

# 新しい家庭科

自立した女と男を  
人間らしい生活を  
差別のない社会を  
育み 創り出す

**ウイ**

逐次刊行物

昭 62.10.16

国立婦人教育会館  
情報図書室

## 「家族」どう変わる、どう変える



1987 **11**

## 四季のうた



### 古いアパート

きり絵と文 金子静枝

つたのからまった古いアパートは私の子どもの頃からそこに建っていた。階段のテラスに置かれた鉢植えの草花を通して住人と話を交してきたような気がする。

詩 頭 卷

夕暮れのまち

羽 生 槇 子

八十何歳の女の人と歩いていて  
その人に

年をとったからできる良いこと

こればかりは若い時はできなかったというのは何ですか  
ときいてみる

その人はとても遠い遠い所を見る目をして にっこりして  
そう 気もちが急がなくてよくなったことだと答える

急ごうと思つたつて急げないからだけれど

前はゆかたひとつ縫うのに

一日で仕上げなくてはと気がせいた

今は何日かかってもいいのだという

それで縫っている 仕事しているのが良いのだという  
年をとってきたから 午前はまあ仕事ができるけれど

ひるになると疲れて

昼ごはんを食べると一時間ほど眠って  
それでさめると

午後にもまた元気があつて仕事ができるという

それでも起きているときはたいいてい手が動いているのですよ  
着るものなどあまり買わないで

孫の制服のブラウスなんかも

着なくなつたらダーツをほどこいて

飾りなどとして

着やすくゆつたり直してわたしが着るのですという

いいなあ

わたしも年をとれるものなら

そんなふうに着るものを着てみたい

急がない縫いものをしてみたい

ほっこり冬の日だまりのような時間の中にはいつてみたい  
そう思つて

その人に肩くつつけて夕暮れのまち歩いている

「家族」どう変わる、どう変える



新しい家庭科を  
創るために

小学校では 絶対的多忙化の中で  
中学校では 評価の二つの顔  
高等学校では 「性」をめぐる授業と考察  
〈わたしの授業〉 生活文化の継承と創造をめざして

金子 瑞枝

53

蛭間 裕人  
香川 敦子  
梶原 公子

38 43 48

「家族」私の場合  
「家族」私の場合  
少女と家族——私の場合——  
「家族」私の場合——既製のイメージにとらわれないで——  
少年と家族  
「家族」私の場合  
少女と家族——「わたしはアリラ」に見る——  
男のなかの家族  
子育てをひらく  
変わりゆく性意識は家族をどう変えるか  
学習の主人公たち おうちのひとのこと

横浜市並木小学校の子と私たち

34

飯田しづえ  
清水眞砂子  
池木 清  
池亀 卯女  
安東 尚美

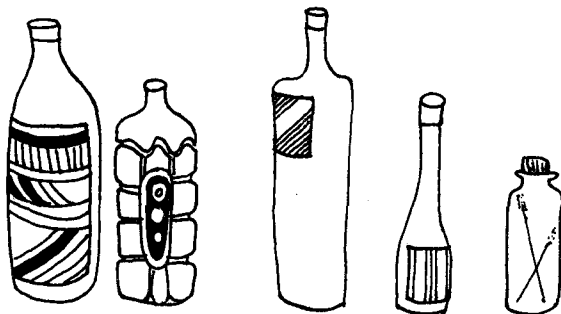
22 24 27 29 31

特集

✓家族はどう変わる？  
「家族」  
牧野カツコ  
高見澤たか子

8 4

○ Weになんでも言おう なんでも聞こう 70 ○ わたくしからあなたに 88  
○ 今月の読書から 82 ○ Weの読者会だより 86 ○ 編集室からあなたに 11, 61



《若い広場》 森幸枝著『男女で学ぶ新しい家庭科』を読んで

深沢乃理子 56・田村静 57・高木みゆき 59

四季のうた

巻頭詩

教育のなかの心理学「学習」まなぶということ(2)

いま中学校で

はなにっき

ダブルポケット

読書つれづれ草

ワンポイント

近代日本女子教育史

知らないことを知りたくて

Weの相談室

KNOWHOW

共学家庭科

ひよっこクラブの

コックさん

日本その日その日

政治の目

古いアパート

夕暮れのまち

事件

もみじ 徒然草

フェミニスト・メソドロジ

ほくのソーニャ(1)

デモクラシーの波と「青鞥」創刊

子供が神経質に

新米教師の軌跡

卵をボンと割りまして

スケイトボード

女性の年金権について

金子 静枝

羽生 楨子

小沢 牧子

仲野 暢子

藤尾 知子

國信 潤子

武田 秀夫

秋枝 蕭子

蓮池 悦子

児玉 澄子

湯沢 静江

佐多 和子

大西麻里子

湯川憲比古

1

62

64

66

67

72

74

75

76

77

78

79

80

知らなきヤソン最新情報 81

☆家庭科の男女共修をすすめる会、教課審答申にむけ要望書提出

○秋の集いへのおさそい 87

○波「家族」をなぜ学ぶ 半田たつ子 84

○ひと「じりりようこさん」 33

表紙デザイン 加藤由美子  
目次イラスト 馬場洋子  
本文イラスト 編集部

○あんてな 94 ○十字路 92  
○泉 90 ○“We” EDITOR'S NOTE 96

## 家族はどう変わる？

牧 野 カツコ



いま、私の手許に一九七一年八月二〇日号の「朝日ジャーナル」がある。創刊十二周年記念に行った論文募集の当選作二十二編を載せた特集号である。募集論文のテーマは、

「私にとっての家」

であった。応募総数七九四篇にのぼり、この種の懸賞としては、テーマにかなり高い関心が寄せられたことを示すものであった。応募論文の中で最も熱心にとりあげられたのが、家を「呪縛の構造」とみる見方であった、と書かれている。入選作の最初の三篇にも若い人たちがそれぞれ次のように書く、

「……私は家から逃げ続けているのである。だが、なぜこうまでも、家の呪縛から解放されようと、逃げ続

けるのか。闘うこと、歴史に存在する人間として、重要な姿勢をもちうることはできないのか。家の呪縛とは？ 怨霊とは？……」

「……『家』とはいったい何か。『家』は私にとってあこがれであり、また心に重くのしかかる圧迫である。あこがれでありすべての憎しみの焦点である。……」

「……家、それは農村においてあらゆる差別的感情の源泉である。家、それは人間に人間以上のもの人間以下のものを押しつける構造である。家、それはあらゆる呪縛の根源的な発想の原点である。家、それは主体を解体させる場である」

一世代も経ていない一五年ほど前、「家」がわれわれの心の深層に、あるいは日常に、まだ深く広く下ろしていたことを思い起こすことができる。

家の重さ、暗く巨大な外圧は、その後どこへ消え去ったのだらうか。この夏、「シングル気分の透明感」という見出しのついた、新聞のあるコラムが印象に残った。

「今年の前半、街にあふれるはやり言葉や新語、コピーの中で目についたものの一つは、シングル志向の時代を表す言葉だ」という。『シングルライフ』『非婚時代』など話題になった本や、「ホームレスアダルト」「ポストファミリー」などの新語が乱れ飛んで、新しい一人の生き方を肯定する感覚がうけている。必要以上に家族にわずらわされずに「自分の世界を生きるという軽いプラスの気分」が新しいシングル感覚だという。家族は何と軽くなったことだらう。

「家」から「家族」へ、そしていま「個人」へ、私たちの意識の中の生活の単位が、急速に変わりつつあるように思われる。「結婚はしたくないけれど、ハネムーンはしてみたい」（ジャルパック）という広告コピーも登場した。「私」や「自分」を前面に出した表現の広告コピーが増えている。つい数年前まで、家や家族に埋没して生きてきた若者たちが、苦悩もせず闘いもせず手に入れた「私」や「自分」の世界は、いかにも危げなものであるけれど、悩みもせずにすつと使い始めてしまうところが、また時代の流れかもしれない。

農村部や古い家柄の家の中には、今も厳然と「家」が生き延びて、個の主体性を押しつぶしている現実が、あるだらう。

「家」から「シングル気分」まで、いま日本人の家族についての意識は、驚くほど多様に広がっているといつてよい。この広がりは、たえず重い後部をひきずりながら先端をどんどん先へ延ばし、いつの間にか重心を移動させていくかのようである。

この二十年くらいの間にアメリカやヨーロッパで起こっている家族の変化は、まさに「激変」というにふさわしい状況であることが、海のこちら側からも十分推察される。我妻洋氏の『性の実験——変動するアメリカ文化』（文藝春秋社）は性の面から、アメリカの結婚や家族の変化を伝えてくれた刺激的な書物であった。その後続々と刊行された書物、NHK取材班『アメリカの家族——離婚・再婚・子どもたち』『日本放送出版協会』や、下村満子『アメリカの男たちは、いま』（朝日新聞社）リチャード・ガードナー『パパとママの離婚』（社会思想社）など、アメリカの人々の苦悩や試行錯誤の生々しい記録を、私はどれも大変興味深く読んだ。

この夏東京で開催された「国際発達行動学会」でも、「日本とヨーロッパにおける家族発達」の部会で、西ドイツのナヴェルツ氏は、西ドイツでは離婚率の増加、出生率の低下が著しく、結婚しないカップル、子どもを生まないカップルが増加していること、結婚というものの観念自体が変化しつつ

あることを報告し、これらがヨーロッパ全体の傾向であるとのべていた。

離婚率の上昇、単親家族の急増、高い再婚率、再婚によって作られる混合家族、結婚しないカップルとその子どもたち、ゲイのカップル、グループマリッジ、そして大勢のシングルたち、こうした多様な家族のあり方が現実になっている欧米では、もう完全に、家族を伝統的な制度化されたモデルにあてはめることができなくなっている。「夫は外で働き、妻は専業主婦、子どもは一人か二人」といういわゆる典型的な家族のイメージにあてはまる家族は、アメリカでは全世帯の七％以下にしかすぎないという報告もある（ウイスコンシン大学、社会学教授、バートアダムス氏、一九八四年）。いたい、家族とは何なのだろうか。多様な家族はこれからどうなっていくのだろうか。

日本では、ヨーロッパやアメリカの家族の激変ぶりに比べると、その変化はきわめて緩やかなものである。むしろ最近のデータでは、欧米とは逆に、離婚数と離婚率が一九八五年以降減少を示したり、戦後ずっと減少を続けていた合計特殊出生率（一人の女性が一生の間に産む子どもの数の平均）が、一九八二年には増加に転じたりしており、日本の家族は欧米のように解体の方向には向かっていないと論じる人もあ

る。スウェーデンなどでは生まれてくる子どもの三〇％以上が、非嫡出子であるのに対して、日本では結婚の届出率が依然として高く、非嫡出子の出生率は戦後ずっと一％以下を保っており、この比率も日本の家族の「安定」ぶりを示すものとしてしばしばとりあげられる。

確かに、平均世帯人員の減少や出生率の低下、核家族化、など家族をめぐる大きな変動は、戦後しばらくの間に急激に生じた現象で、統計的なデータの上でも、激変に相当するような変化はここ十年くらいの間あまりみられない。

では日本の家族はいつまでも安定した形態やイメージを、持ち続けるのだろうか。

好むと好まざるとにかかわらず、産業社会の発展はいずれの国においても家族に大きな影響をもたらしてきた。生産の単位が家族であった時代には、人間は家族の一員にならなければ生きていけなかったが、産業の発展は、個人単位の労働と報酬を得る機会を提供し、子どもを別として男女に、経済的な自立の可能性をもたらした。科学技術の発展は、妊娠・出産を人為的なものとし、少産少死のパターンを定着させた。平均寿命ののび、子育て期間の大幅な縮小、家事労働の機械化・省力化等々は、とりわけ日本の女性の一生を大きく変えてしまった。家事・育児のみで一生を終えることはもはやできないほど女性の人生が長くなったことに、誰もが気づいている。



就労する主婦は五割を越えたが、まだまだこの割合は高まるだろう。二十代の女性の未婚者が増えており、二十歳から二十四歳までの未婚率は八一%、二十五から二十九歳までで三〇%にのぼっている。女性が生活のために結婚しなければならなかった時代が過ぎたように、生活のために離婚ができないという女性も、少しずつ減少し、やがて過去のものとなるにちがいない。

「家族」は、男にとつても女にとつても、長い人生の中である時期選択される一つのライフスタイルとなるだろう。ただし、その形や機能は著しく多様化するので、「家族」を伝統的なイメージで定義をすることは非常に困難になるはずである。

私たちの大学院のゼミでは毎年、アメリカの高校生向きの家庭科の教科書を読んでいる。どの教科書も最初に、「自身」についての章があり、次に「家族」の章がきて、衣・食・住あるいは、消費者問題・衣・食などの章が続いている。家族についての記述は、激変するアメリカの家族を反映していて私たちには大変興味深く、また参考になる。一九七〇年代の教科書では、「家族は結婚によつても成立します。子どもが生まれることによつても成立します。養子をとることによつても成立します」という記述があり、未婚の母と子の家族や、未婚の父と養子の子の家族などの例が並列されて

いて、感心させられたものだ。最近第六版を出したある教科書では、「家族が全員一緒に一つの場所に住んでいる時代もあった。しかし今日では必ずしもそうではなく、両親が別居をしていたり、離婚をしたりして家族員と一緒に住んでいないことがある。家族員は同じ町の中やちがう地域に別れて住んでいるかもしれないが、それでも一つの家族である」と書かれている。また別の教科書では、「ライフスタイル」という章の中で、単身生活（シングルリビング）、共同生活（パラルリビング）、家族生活を取りあげ、それぞれの長所・短所から、人生のうちいつどのライフスタイルを選択するかを考えさせている。

生活のために家族という形態を選ぶという経済的な拘束性から解放される分だけ、家族は最も純粹に情緒とエロスの充足される場となるだろう。多くの人々が家族というライフスタイルを選択しようとするのは、苦悩も喜びもすべてを含めた感情を真に共有し合える人を求めるからである。この期待は、自立しあう男女の関係でこそ充足されるだろう。これからの家庭科教育においては、どのようなライフスタイルを選ぶにしろ、自分の人生を他人に任せることなく生きていける力を身につけさせることが大切である。男も女も自分の人生を自分で選びとっていきける力を持つて欲しいと思う。

（まきの かつこ・横浜国立大学）

## 「家族」

### 個、殺しの結婚観

就職して二年目になる娘が、久しぶりに仲よしの女友達二人と会ってきた。休日の夜、家にいた残りの家族三人で夕飯をすませたところへもどった娘が、興奮気味にそのうちの一人であるNちゃんのことを伝える。Nちゃんは理科大卒業後、一流の製薬会社に就職。目下半年間の海外研修のために英会話の勉強中だが、卒業してからこの二年半くらいの間に、すでに三回もお見合いをしたのだそう。

「お母さんが、来年中にはどうしても話をまとめるって、どんどん写真をバラまいてるんだって。これまで

### 高見澤 たか子



三回とも相手から断わられたのも、Nちゃんが悪いって怒るらしいの」

見合いの相手は、妙にいばった男ばかりで、「ケーキを食べましょう」「いえ、いま食べたくありません」というようなやりとりですら、むっとした表情を隠さず、「生意気だ」というらしい。友達二人でNちゃんを励ましてきたそうだが、小さい頃からNちゃんを知る私たちも、Nちゃんのお母さんの気持ち、どうしても納得がいかない。小学校の頃から、塾・家庭教師と、受験勉強一筋に打ち付けたことに、娘が耐え抜いて、いまその成果が実ったと考えてもよいと思うのに、こんどは見合い。高校時代、リップクリームをつけたくらいで、「非行化」と大騒ぎをしておきながら、いまはNちゃんに、「メイキヤップしろ、ストラックスをやめて

スカートをはけ」と口うるさく責める。

娘からこの話を聞いているうちに、私は気味が悪くなつてしまった。これはつまりは、「子殺し」ならぬ「個殺し」でなくてなんであろう。高学歴化が進んでいるというが、子どものしあわせに対して、なんの展望もなく行われるこうした「個殺し」は、無知無教養、まったくあられもない行爲だ。

結婚という家族の営みの第一步を、親たる者は「個殺し」で汚すべきではないと思う。家族つき合ひは、まずはじめに「個ありき」。男と女が互いの個を認め合う覚悟を持つことからはじめたい。

## 個と個、そして家族の核

ある期間一緒に仕事をするようになった三十代の女性は、確か小学生くらいの娘さんがいるはずなのに、夜遅くなつても家に電話をしたことがない。自分の子どもが小さかつた頃のことを思い出して、あるとき「おうちはいじょうぶなの？」と聞くと、「うちの家族は、夫も子どもも自立していますから、まったく心配ありません」と、明快な答え。二の句が告げず、「えらいわね」というのが精いっぱいだったが、私は「自立」という言葉を、はじめて寒々とした思いで聞いた。かの女が台所に立つのは日曜日くらい、あとは夫と娘が

替り合つて食事を用意するのだそう。確かに自立の見本のような親子だ。だが妻にとつて都合のいいように、父子家庭を営んでいるだけではないか。それに対して、妻のほうはなんの心遣ひの必要も感じていない。

家族という関係を一つの枠組みとして捉えようと、家族それぞれ個を発揮すれば、当然ぶつかり合いが生じる。その女性の場合は、夫と娘の「自立」に自分がうまくのつた形で、二人の個の發揮は、いったいどうなっているのだらうと考えてしまう。仕事に燃えている女性の中には、ときどきかのように、男性論理でスパツと割り切る合理主義者がいて驚かされる。

共働きを続けてきたわが家の場合、娘と息子、そして夫と私、猫の世話からはじまって日常の家事、七年間の老人の看取りも含めて、お互いの都合を絶えずやりくりせざるを得なかった。やはり主婦である私がいちばんワリを食うことになり、不満がたまる。毎日の夜の戸締まりからして、家族は最終的には「だれかが締めると思った」ということでお茶をにごす。小さなことのようにだが、私はやはり納得できない。

母が元氣だったころ、私が夫とそうしたやりあいをしていて、あとからそつと私を呼んでこんなふうになっていた。

「女が細かいことで男の人を煩わせると、いまに家庭がいいやになるものよ。悪いことをいわないからおやめなさい」。

ところが私にいわせれば、そうした細かいやりあいを積み重ねてきたからこそ、母亡き後、大きな赤ちゃんのような父を家族全員で支えてこられたのだ。「へえー、そうかしらねえ、あんたが強引だからでしょ」、母は地下でこういつているかもしれない。確かに個と個がぶつかりあうだけでは、家族の關係は絶えず地震に襲われているようなものだ。それぞれが自立的な生活をし、個を追求していくいっぽうで、なにかを中心にしてまとまる力が家族ではないだろうか。

それはなんだろう。肝っ玉おっ母みたいな人がいれば、びったりだし、日本的家族像にはつきものだ。だが、わが家の場合、私にはそれほど度量もないし、かといって夫も際立つて父性的存在でもない。やっぱり夫婦で補い合って核になるということだろうか。

### 感性を磨く場としての家族づき合い

私は、自分の両親の晩年の姿を見ながら、家族のあり方を考えさせられてきた。父は母の全面的な献身に寄りかかって暮らしてきたし、母は晩年そういう父を恨みながら死んだ。父と母の夫婦のありようは、私にとっては反面教師で、「ああいう關係にはなりたくない」と、常に見てきた。

ところが両親がいなくなったら、二人のことを考える

と、ある場面が鮮明に浮かび上がってくる。私たちが別居同居の形で暮らしていたころ、ある日、父と私がかのことでひどく口論した。翌日私がケロリとして両親の部屋に行くと、母が青い顔をして、こういった。

「昨日のようなひどいことを、もうあの人にいわないでちょうだい。かわいそうに夜も寝つかれなかったのよ」

母の声は妙に静かで、私はその迫力に押され、素直に「はい」といわざるを得なかった。この一場面を思い出すと、私は両親が夫と妻として、ついに人間的關係を結び得ずに終わつたという切れず、「ああはなりたくない」という声にも、勢いがなくなるのである。このごろになって、「なぜだろう？」と折にふれて考える。

それは、父と母がそれぞれに持っていた感性のようなものが、二人の旧弊な主従關係、古めかしい意識をも越えて、鳴り響き合うところがあったからではないか、と思うに至った。

夫にその話をする、*「そんなしちめんどくさいことじゃないよ。糸子さん（母）は、忠雄さん（父）にまったくかかれてたってことだよ」*、などと下世話なことをいう。しかし、それだけでも子どもにとっては、なにか大きな救いになる。

母亡き後父と一緒に暮らすようになって、私は父がよその人に対してなかなか細やかに気を遣うのを見て驚いた。その十分の一でも、母にやさしさを示してやれなかったものか

と、憤慨さえ覚えた。他人とのつき合いで、父が表すやさしい感情や包容力、それを目のあたりにするにつけ、なぜ家族とのつきあいの中で、そうした感受性を発揮しないのかといふかった。母がいみじくもいったように、父はそうした気の遣い方は、家庭では無用のものと考えていたのだろう。母の考えでは、「家庭は男がゆつくりくつろぐ場」だったわけだが、私は、男も女も、ゆつくりくつろぐ場であると同時に、自分の感性を磨く場にしたいと願っている。

Nちゃんの見合いの相手ではないが、テレビドラマを見ると、どうして夫があんなにいばっているんだろうと、不愉快になる。いばっていることに腹が立つというより、その鈍感さ、粗野な態度に不快感を覚える。自分の脱いだ上着を妻に投げるように渡す。「いただきます」ともなんともいわず、乱暴にものを食べる。妻を「お前」呼ばわりする。数え上げたらキリがない。少しでも感受性というものがあれば、もう少しいいつき合い方ができるのではないかと思う。特別気取ったり、マナーがどうのこうのということではなく、人間的な情緒を感じ合うことがだいじだと思う。家族の核である夫と妻のつきあい方は、すぐに子どもたちに伝わる。そして少しずつ、家族が感性を磨き合い高め合っていくことが、すなわち豊かな個を築き上げていくことにつながるのではないだろうか。

(たかみざわ たかこ・フリーライター)



## 編集室からあなたに

### ◆あなたに訴える (1)

10月号にはさみこんだアンケートの回答はポツポツという状況です。毎日の生活が、あまりに多忙なためでしょうか。この欄でご投稿を呼びかけても、打てば響く対応が弱いなあと思うのです。権力を持つ側が、どんどん勢いを増すにつれ、市民の側の意気がしぼんでいくようで、まことに残念です。こうした傾向のいきつく先に何が起こるかと思うと、怖いです。

外国でWeを読まれている方々は、一様に「Weが支え」「Weはオアシス」とおっしゃいます。国内では情報が多すぎて目まぐるしく、食傷してしまうのでしょうか? 「読みきれないうちに次の号が届き、ツン

ドクが重なると後ろめたいので」「手続きがめんどろうでつい」……こんな理由で購読者が減るのは辛い。

We 創刊以来、いやその前からのおつきあいを、変わらず持続して下さっている方たちに頭を下げつつ、新たに読者になった方たちのフレッシュな血が、Weを活性化することを期待します。

それは、あるいは地域の読者会や“Weの会”と共催のイベントへの参加であり、編集部への便りであり、We誌上での発言という形になって現れるものでしょう。

“しにせ”の読者会の息長い活動、ニューフェイス読者会の躍進が地域や職場に根を下ろす中で、お仲間を一人でも二人でもふやしていただければ幸いです。

私も体力・気力の限界まで東奔西走しています。新しい方との出会いは勇気を奮い立たせてくれますが、Weは今危機的状況にあります。あなたのお心をWeに。(半田)

## 「家族」私の場合

深江 誠子

私は、十三歳年下の教え子と、もう八年も暮らしている。三十八歳で初産、そして子どもは非嫡出子、いわゆる私生子である。こう連ねるとたいていの人はおどろいてくれる。だけど、私はいま、気負いも無理もなく、ありのままの自分で暮らせている。夫や妻、嫁という役割をとっぱらって、いつまでもなまなましい女として、男として彼とむき合えるこの充実感、そして四歳の子どもをふくめて三人、友だち感覚でふざけたり、ケンカのできるこののびやかさ。私はこれらを、婚姻届と引きかえにしたいとは決して思わない。

ふり返ってみれば、私は実によい家庭環境で育つたものだと思う。私を生んだ母は、私が五歳の年に病死、その後母が三度も変わった。つまり私には母親が四人いる計算になる。幸いなことに、一番長く暮らした三番目の母は、先妻の子である私と弟を、自分の子ども以上にいつくしみ育ててくれた。その母も、私が二十二歳の年に病死したが、今もって私には母はこの人しか考えられない。だからこの母のおかげで、私は今日まで「血のつながり」への幻想をもたずにこれた。

しかし、私たちのために働きとおし、苦勞の多かった三番目の母の死は、私には予想以上に重かった。私は母が死んだ後にはじめて、母が心ない人たちからいじめられ、コトあるごとに「アンタは本当の母親でないから、そんなことができる」などといわれていたこと、また私がOL生活をやめて大学に行く際も、大学進学に反対していた父だけでなく、ママハハいじめをたのしんでいた人たちからも非難を浴びていたことを知った。そして私の学資を捻出するために、病身に鞭うって働いていたのだ、ということも……。

私にはそんな母の苦勞がみえていなかった。自由だ、解放だど学生運動で叫んでいた自分が、妻に家事・育児を押しつけて解放運動に奔走している男たちと同じ位置にいたことを思い知らされた。母の死後、私は、自分がだれかを無意識に踏みつけてはいないか、とそればかりが気になった。ドヤ街に住む日雇労働者、水商売で働く女たちに関わり出したのも、そのためである。在日朝鮮人、被差別部落の人たち、障害者、第三世界の人たちの問題が、自分の問題としても考えられる

ようになった。そして、そのおかげで、私は自分の思い込みがこわれ、心がどんどん自由になっていく快感を感じることでできたし、差別をうけている人たちのなかに、人間としての本当のやさしさを培っている人が多いことも知ることができた。

だからこそ、私は自分の生んだ子を「私生子」にすることに、何のためらいもなかった。私は家庭が波乱に満ちていたからこそ、既存の結婚制度の偽善性を見抜く力も養われたし、世間というのは、中身よりカタチを大切に、私たちを「かわいいそうな子」にしたがるが、それは自分がカタチに納まっていることだけを抛り所にするしかないほど不しあわせな人間たちが多いからだ、ということも身をもって知ることができた。また、私たち兄弟姉妹は、コトあるごとに団結し、力を合わせてきたおかげで、今でも大変仲がいいし、自立心が旺盛だ。だから、子どもを「なに不自由なく」育てる

必要など私は少しも感じていなかった。それに婚姻届を出した性以外の性をふしだらと決めつける性モラルに、水商売に働く女たちは、日々苦しめられていた。私はこの性モラルに、どうしても屈服したくなかったのである。

幸い、子どもは、カタチより中身に大きく左右されるらしい。私の妹は、高校入学の頃、自分が姉や兄と母親がちがうことをはじめて知っておどろき、自分を悲劇のヒロインだと考えグレてやろうと思っただけ、姉とも兄とも仲がいいのに、とバカバカしくなつてやめた、と随分あとで私に打ちあけてくれた。

いつの日か、私の子どもも、自分が「私生子」であることを知る日がくるだろう。妹がそうだったように、自分を不幸と少しも思わず、むしろ私たち親を誇りに思ってくれるよう、これからも明るくたのしくこの差別社会とたたかっている。

(ふかえ まさこ・大学非常勤講師)



## 「家族」私の場合

尼川 洋子

「耳かき一杯」の隠し味

この数日、夜のほっとした時間を見計らったかのように、

九歳の二女が「コーヒーでもいれようか？」と声をかけてくれる。家族一人一人に好みの砂糖の量やミルクを入れるかど

うかまで聞きまわって、ていねいにお盆にのせて運んできてくれるのだ。「おいしいわ。結ちゃん」と声をかけてやるとクシャクシャとうれしい顔。「あのね、ちよつと隠し味が入ってるの」「隠し味って?」「耳かき一杯のお塩」「へえ、そうなの」と感心したのは一日目のことである。三日目、まさか、その耳かきが現在使用中の耳かきだったとは……。「えーっ!」、思わずみんな飲みかけたカップを下におろして絶句である。「大丈夫、きれいにょく、洗っているんだから」と自信たっぷり二女。「でも、さっきまでそれ、お父さんが使っていたよ」と疑いの表情で姉。「それから洗ったもん」「でもね……」。

結局、耳かきがわりに割ばしの先を使ってもらおうということで話はおちついたのだが、いったいどこから九歳の娘はコーヒーに「耳かき一杯の塩の隠し味」という知識を仕入れてきたのか……。『お塩の袋に書いてあったの』、なるほどねー。すぐやってみようというその行動力には脱帽である。一ヶ月ほど前はふとんの中に卵を入れてヒナにかえそうと試みたようである。ベッドの敷蒲団の上に無惨につぶれた卵が残っていた。着想、即実験というわけで結果のふとんのクリーニングは彼女の関心の外にある。叱りつける私の側から夫が一言、「まあ、ジットン(彼女の愛称)らしいじゃない」。それはそう、今までだってこの二女のおかげをこうむって家族

全員、新しい発見をしてきた。「耳かきの隠し味」もふとんのクリーニングの手間も「おかげ」と差し引きにしておけばいいか。

### 家族会議は寝そべって

＊

「さあ、ごはんがすんだら家族会議しよう。みんな、八帖の部屋に集合して」、ピシリと言いつ放ったのは十二歳の長女。「まあ、大げさな。たかがビデオの機種を決めることぐらいで……」と思っただけ口には出しかねるくらい彼女がはりきっている。でも、二女は言う。「お姉ちゃん、私、聞いてもわからんし、テレビみたいだから。みんなで決めといて」「だめ! あんたもおこづかいからお金出すんだから、わからんでもちゃんと参加して」、これもまた迫力である。学童保育所でジュニア・リーダーとして活躍している姿が目に見える。ソファで居眠りをしかけていた夫がまず、事態を読みとって隣りの部屋へ、続いて私と二女。「お父さん、家族の会議だから横になつてもいいからね」と長女は細やかな心づかいを示す。じゃ、みんな寝そべって。

そもそも、我が家へビデオ購入の話を持ちこんできたのは長女。友達の家でみせてもらった『風の谷のナウシカ』にひどく感動したらしい。「ナウシカ、勇気あるわー。私、ナウシカみたいな女の子、好きやわー」を連発した後、「また、



あの『ナウシカ』みてみたい。うちでもビデオ買おう」の連発になった。子供の欲しがるものは「お金がない」を理由に最低半年は猶予期間をおく。半年たつてもまだ欲しかったら改めて考えるというのが我が家の基本方針である。長女の根気には負けた。「自分たちもこづかいを出す」「宿題をやつてからみる」等々、条件を提示しながらもう十ヶ月も粘つたのだから。「家族会議」などといういかめしい言葉まで持ち出して、長女先導でこの九月、我が家の居間にビデオが備えつけられたという次第。

＊

今夜は「自活」よ！

仕事を終えて、一つ用事をすませて、買物をして家に帰りついたら時計はもう七時近くをさしている。ドアをあけて目にとびこんできた光景は——夕刊を読みふけている夫、テレビに見入っている子供たち、食卓の上には朝食の残りものがそのままに、流しには洗ひ物がドツサリ、足元にはランドセル・袋類、汚れたくつ下はソファの上で丸まって……。奴らは帰ってきてから今まで、一秒の時間も家事のために使っていないのだ。ああ、情ない。共働きで十三年、新しい家族と家庭づくりをめざしてきたのに、なんだ、これは。空腹と疲れは激しい怒りをよび起こす。「何よ、あんたたち！早く帰ってきてるんだつたら食事のしたくしとけばいいじゃ

ない」「だって、お母さん何も言つてなかったから……」「そんなことね、考えたらわかるでしょう。どうして、いつもお母さんだけがごはんのしたくするつて決まつてるの？ やればみんなできるじゃない。赤ちゃんと病氣の人やら、したくてもできない人のためなら作るよ。できる人は自分で作るのが当然でしょ、今夜は自活よ。一人、一人作つて」。形勢不利と見てとつた子供二人は素早く立つて、冷蔵庫の中の材料確保へ。しばらくして立つてきた夫は確保しそこねて買い出しのためにスーパーまで出かける気配。私はふり上げたこぶしのおろし場がなくて空腹をかかえたまま別室に閉じこもるはめになってしまった。

「自活」とは子供の通う学童保育の夏季十日間廃村キャンプの中で生み出された生活形態。「自活」の日、大人たちは子供の食事作りに手をかさない。一年生から六年生までそれぞれに、そこにある材料を使つて一日の自分の食事をまかなうのだ。もちろん、協力しあつてもいい。「おばちゃん、困るわ、お母さんまで「自活」の日をつくるから」、娘たちが学童保育の指導員にぼやいたそうなの。

家族の暮しに型などない。我が家族、私と夫と娘二人。互いに相乗し合つて何が生まれるか、楽しみなことである。

(あまかわ ようこ・大学図書館司書)



## 少女と家族 —— 私の場合 ——

田 丸 瑞 穂

私にとって家族は絶対的存在であつた。超えてはならない、そして超えることのできない大きな壁だつた。幸福も喜びも総てそこにあると信じていたが、そこには愛情という名の下に甘えやときには憎悪もあるということを知つたのである。

私は高校二年生の秋、学校へ行かなくなつた。当時「登校拒否」の問題は世間で騒がれていない頃であり、誰も皆私自身の甘えが原因だと非難した。私自身動かない体を抱え、情けない気持ちで一杯だつたのである。けれどなす術もなく途方にくれていた。

それまで我が家は大きな問題もなく平和なものだつたに違いない。お互い愛情で結ばれており、少なくとも表面上は全くと言っていい程幸福であつた。そこへ娘の登校拒否という一石が投じられ、と同時に愛情という確固たる糸で結ばれていたはずの家族の中の関係が大きく揺らぎはじめた。

子供に信頼を傾けていた両親の口から世間体という言葉が出、私は驚きを持ってそれを聞いた。しかし心のどこかでそれは予測していたような気もしていた。姉妹からも当然の

ことながら強い非難を浴びせられ、私は次第に自暴自棄となつていった。

私の登校拒否を契機として、家族は音をたてて崩れようとしていた。決して切れることはないと思つていた糸は、あまりにももろかつたようだ。否、そんな糸など存在しなかつたのかもしれない。家族だからと信じるあまり、愛情はあるものだと甘えていたのかもしれない。愛情は最初から存在するものではなく生まれてくるものである。そして育てるものではないだろうか。だからこそ愛が深まるには歳月が必要なのだと思う。家族だから、信じ合つて愛情があるのが当然だと思ふのは甘えであり傲りである。けれど多くの場合、それに気づかない人が多いようだ。

隠し通せる限り表面は必死に普通を装つていた私たちは、まだものごとの本質を見ようとはしていなかつた。とりあえずという思いで毎日を生きていたと思う。

私は一層混乱していった。幾晩も眠れぬ日々が続き、神経だけが異常に張りつめ、そして私は薬を多量に飲んだ。

気がつくとも両親の悲しい顔があった。取り乱した、疲れた顔がそこにはあった。この瞬間、心から父と母に申し訳なく思った。すまない気持ちと大きな安堵感が私の心にはあった。そしてこんなことをするまで家族を信じられなかった自分を恥じていた。私こそ家族に対し甘えていたのかもしいない。けれどもお互い、ここにくるまで本音が言えなかったのも事実である。

父は幼い頃から苦勞の多い人だった。金銭的にも精神的にも悩みを抱えながら自力で生きてきた人である。しかし父の口からは決して後悔という言葉は出なかった。人生を甘受しそこで生きてきた己の姿を認める父の姿では、子供の私にも強く訴えるものがあつた。しかし胸中は複雑だったに違いない。生きるために諦めなければならなかった様々なものごとに対し、全く後悔がなかったことはないように思う。何故なら父は、不自然なまでに子供を信頼し、その意志を尊重しようとしたからである。

母も違った意味で苦勞の多い人だった。金銭的には恵まれてはいたものの、精神的には多くの苦悩を抱えてきたようだった。それがいかにその後の母に影響を与えているか、子供の私でもよくわかるのである。

彼らにとって家族とは本当に大切なものであつたと思う。自分たちで築き上げた砦という感があつたと思う。子供に對

する深い愛情だけでも、その思いは伝わってくる。たとえその愛情が正しい方向を指すとは限らなかつたとしても、どうして責めることができよう。家族であるが故に傷つき、傷つけあつても離れられず、諦められないことがエゴイズムであつてもただ非難することはできない。貪欲なまでに人の内部まで入ろうとすることを、一概に否定することができないのである。両親は親であると同時に一人の男と女であり、そして一人の欠点を持つ人間なのである。

彼らには自分たちの生きてきた道があり、培われた哲学があり、たとえ子供であつても踏み入ることは許されない。親が子供の内面に立ち入ることが許されないのと同様、誤まっているからといって、子供のために親の内面までの変化を求めることは許されないし、不可能なことではないだろうか。結果辿り着くところはやはり愛情であると思う。割り切れぬ人間の愛である。ときに傲慢でときに一人よがりな、しかし限りなく優しい人間の愛であると思う。

私は登校拒否を通じて成長し、家族との関係を距離を持つて見れるようになった。問題はまだまだある。しかし一段一段積み上げてきた家族との日々はやすやすとは崩れないだろう。今はただ、必死に家族ともども生き抜いてきた数年間の重い日々を、いつの日かなつかしんで思う時がくることを願うだけである。

(たまる みほ・大学生)



## 「家族」私の場合

——既製のイメージにとらわれないで——

竹 内 希衣子

この間の日曜日、どうしたことか夫と二人で夕食をするこ  
とになってしまった。大学三年の息子は尾瀬で合宿、一年の  
長女はバレーボールの試合、次女は尾崎某とかいうボーカリ  
ストのコンサート、とそれぞれ出かけてしまつて残るは二人。

日曜日の夕食は原則として家でみんなと食べることに、と言  
い渡してあるのに、彼等はなにやかやと用があつて、容易な  
ことではそろわない。それでもたいていは一人が欠けるくら  
いなのに、とうとう三人ともいなくなつてしまった。

何だか無然として夫と向きあつた食卓は、照れくさいよう  
な、落着かない、ぎごちない感じになつてしまった。

これからはきつとこんなことがふえるのだろうか。

一人暮らしをしている母は、「そのうち一人で食事をするよ  
うになるんだよ、振り出しにもどるんだねえ、家族がわあわ  
あやついてたいへんだと思つたのはほんのいつときで、す  
ぐみんな大きくなつてどこかへ行っちゃう」と話していた。

家族全員がそろつて食事をするのは二週間に一度位だ。

私はそれほど顔をそろえることに固執するつもりはないの  
だが、ともかく一度におかずをこしらえてみんなでモリモリ  
食べ、食卓の上のお皿が全部カラツポになり、家族全員が満  
足げにふくらんだお腹をさすつてのびている風景がとても好  
き、これぞ家族という気がしてしまふ。

朝食も夕食もバラバラだと食べるということが事務的で、  
楽しいという要素がうすれる感じがする。そんなこともあつ  
て、出来るだけそろつて食べたい、というのが私のささやか  
な願いなのだが……。

「うちの家族つてずいぶんクールみたいだよ」いつか次女が  
こんなことを言いだした。

要するに、家族どうし誕生日やクリスマスにプレゼントの  
やりとりをしない。父の日や母の日も「なにも商業主義にの  
せられることはない」とか言つて無視。夏の家族旅行もみん  
なのスケジュールが一致しないのと、犬がいるのでおいてい

けない、という理由で出かけない。たまに誰かの誕生日にレストランへ食事に出かける位がまあ家族らしい風景といえるところだろうか。

ケンカもしようがないくらいバラバラに生きている。

最もだんらんしている、という状況は、深夜十二時頃から夫と私が晩酌をしだす頃、外から帰って来たり、部屋から出てきた子どもたちがまざって飲んだり食べたり、テレビを見たりしながらおしゃべりをしている時間だろうか。

門限の男女差別を徹廃せよ、と娘たちが要求してきて、いろいろ話しあった結果、親が後退するかたちになってしまったのも、この時間の話しあいでのことだった。

飲食関係の「制服を着せられる」ようなアルバイトをしてはいけない、という親のこだわりには、「今どきそんなこと言っちゃって……」と子どもたちが猛反撃をくり返しているが、何度もち出されても、これは親の姿勢とつつ放している。深夜の攻防戦もあったり、ばかになごやかな時もあったりして一日の終わりの一時間余りの共有時間にかろうじてコミュニケーションが成り立っているのが我が家の現状だ。

それぞれに友だちがあつて遊んでくれる人がいて、勉強する場があり、スポーツをする仲間があり、やたらに忙しい。父親も忙しい。母親も忙しげにとびまわっている。出入り

が激しく落着かない家だとは思ふ。でも、誰もかまってくれなくて、家にばかりこもっている人がいたらそれはそれで心配だ。毎年ほとんど医療費がいらなくて、元気ですつとんで歩いている家族を見ると、どうやら私の家族たちは、それぞれに充実した主体的な生き方をしているのだと思える。

そう考えてあきらめるっきゃない、のだと思う。

断絶のない家族なんであるのだろうか。私たちの世代と育ちかたがまったく違う子どもたちを見ると、断絶もいいたところだ。子どもたちもそれは承知していて、「考え方は違ふけれど、まあ受け入れよう」という度量を見せて親とつきあっている感じだ。「袖ふりあうも他生の縁ということもあるからね」というのが私の決まり文句で、何かの縁があつてこうして家族になったのだから、まあ仲良くやりましようというほどのところが、私たち家族のスタイルといえそうだ。

家族はこうあるべきだ、とかこうありたいという、既製のイメージにとらわれた期待をもつと、とかくみんながうつとうしいことになりそうだ。

家族そろって食事をするのがいい家庭、会話のあるのが断絶のない家庭、思いやりのある家族、ふれあいのある家族……そんなイメージにとらわれていたら「不幸な家族」が増える一方だろう。

自然体でできた家族のスタイルを大切にして生きるしかない

い。家族という意識が稀薄になり、個人の生きかたが優先するようになった私の家のような状態は、まさしく家族の崩壊といえるのかもしれない。

でも、家長が君臨して、親が理不尽に親らしかったひと時代前の家族がよかったとは思えない。社会や政治家がやたら

に声高に家族について語る時はたいはいキナ臭いにおいがする。

親や主婦としては割りきれない感情を残しつつ、いまは「家族」についてあまり分析しない方がよいと思っている。

(たけうち きえこ・フリーライター)



## 少年と家族

宮迫千鶴

私の『ママハハ物語』を読んださつたある男性読者から「宮迫さんが軽く楽しそうにママハハという言葉を連発するので、自分がべったりしたナマチチであるような気がしてイヤになりましたよ」というような感想をいただいた。私は楽しくて噴き出してしまった。そうか、ママハハvsナマハハ、ママコvsナマコという図式が成り立つではないか。ナマコとはすごい。いやそれ以上にナマハハとはおそろしい。ナマハハが一步手前ではないか。たしかに生母が権力をふりかざして生子に迫る情景、昨今問題になっている母子癒着や母

の支配は子供にとってはナマハハ的恐怖である。

それに対してママハハのなんと清々しいことか。なにしろお腹を痛めたわけではないから、産んだということをふりか

ざして子供に迫ることはできない。ナマハハにならなくてすむじゃないか、とママコの息子に向って言うのと、息子はまたママハハが理屈で遊んでるぜというような顔をして笑っている。目の前にはすでに少年期を過ぎ、大人の仲間入りをした男がいる。

息子とこの人生の運命として出会った時には、彼は子供から少年になったところだった。

「いいわねエ、少年と暮せるなんて素敵じゃないの」

長くシングルを続けていた女友達は言う。彼女の想像力と観念における少年とは、ひたすら美しい存在となっている。

「あのねえ、少年の実体についていつでも講義してあげるわよ。あなたが考えているのは文学的イメージよ。幻滅する覚

悟があるなら聞いていいわよ」

私は彼女に、少年の実体のほんの一部を話してあげた。いかに少年は乱暴で、性ホルモン過剰で、不精で、ナマイキでかつ神経質で、すなわち中途半端な存在であるか。正確に言うなら、性ホルモン過剰はともかく、乱暴で不精であつても許される旧来の少年文化圏に育った少年と暮すということ、決して美学的なものではない、と。

もともとナマイキかつ神経質、この件に関しては私は自然なことだと考えていた。自我が日々成長する時期には、かつての私だつてそうだった。ナマイキとは、この社会の原則や成りゆきに対して大人のように諦めていないさわやかな精神の発露であり、神経質とはそのナマイキさが大人たちによつて傷つけられる苛立ちであることが多い。つまり、ナマイキとか神経質というのは、少年らしさのあらわれでもある。

すなわち、往々にして少年というのは次の三つの要素のマルガムなのである。

▼乱暴・不精（古くさい性別分業の考え方により、男の子が生活文化から疎外されているために発生する）……①

▼性ホルモン過多（生理の自然）……②

▼ナマイキ・神経質（知性の自然）……③

私が息子と暮しはじめた時に出くわした最大の不愉快さは、実はこの①をめぐるものだった。端的に言えば彼は彼の

生母との母子関係においては、旧来の性別分業文化を教育されており、雇用均等法が成立する数年前に、私は性別分業文化に染まった少年と直面していたのである。

私が少年の生母と同じく性別分業論者であるなら、ママハハとママコとの間にはカルチャー・ギャップはなかったが、私は男女を問わぬ生活自立主義者だったので、同居以来、ママコ少年は涙と忍従の日々となつたのである。すなわち彼は衣・食・住に関する自立学習をしなければならなかった。わが家ではそれを「花婿修業」と呼んでいた。

②の生理の自然に対して、ママハハがとつた対応は、性に関する話題を開放的にすることであつた。というのは息子は私の世代の思春期と違って、学校でスライドその他による性教育を受けている。雑誌やTVなどのメディアでも「性」は表通りを歩いている。陰湿に語られる時代ではないし、なによりもママハハである私自身が暗い性の語り方を好きじゃない。

しかし、家庭における性教育は、何よりも親たちである男女がどのような愛情関係を生きているかにかかつている。つまり重要なのは言葉ではなく親たちの態度であり、それを眺めることで子供は性と愛の言葉にならない深層を知る。たとえば親が口先では愛の純粋性をときながら、その実、愛人を抱えていたり、不倫を働いていたりすれば、それはみごとに性の欺瞞教育なのである。

だが、なんといつても私にとって面白かったのは③である。すなわち、少年のナマイキと神経質と付き合うこと、それは私の思考をもう一度、あのみずみずしい思春期時代へとワーブさせてくれた。もちろんママハハはすでに大人であつたから、少年のナマイキさを頭ごなしに抑えついたり、世の中とか世間というのはそういうものじゃない、と少年の牙を折るような説教調の説得ができないわけでもなかった。にもかかわらず私はそういうことを一切しなかった。少年と一緒になつてパンクになつて学校に反抗してたのである。だって、息

子の言うことにまともに耳を傾けていたら、文部省や学校教師のほうの間違つているとしか思えないことがあまりにも多かつたんだもの。

ともあれ私にとってママコは、人生の出会いのなかでも素晴らしいもののひとつだった。この出会いはかりそめにも親子という関係が生み出してくれたものだが、そのなかみは親子というより、仲間といったほうがよい。そしてその仲間と暮すこと、それが私の家族観なのである。

(みやさこ ちづる・画家)



## 「家族」私の場合

どうせ疎開するならあこがれの信州へと、長野県須坂につてを求めて行つた私たちは敗戦後も大阪に帰れず、農家の蚕室で第二子は生れた。夫は仕事のため大阪におり、手伝いに来てくれていた若い娘は助産婦さんをよびに町はずれまで走つてくれたが、どうにも痛くて産まれそうなので、部屋を畳を汚したら大変だということが頭にいつぱいで、這うようにして新聞紙を集めて来て、畳の上やふとんのまわりにしきつめ、そこで産んでしまった。

## 飯田 しづえ

へその緒がつながつたままうぶ声をあげている所へ、やつと年とつた助産婦さんが来られたが、別に驚きもせずさつさと処置をされ、「女の子です」と言われた。第一子を大阪の聖バルナヴァ病院で産んだ私にとっては、非常時だという気があつたから出来たけれど、考えて見れば農家の嫁はギリギリまで働いてひとりでお産をするという話もきいていたから、助産婦さんにとってはどうということもなかったのだと思つた。



「あんたは新聞紙の中で生まれたんやで」といつも言われていた第二子は、だから私もお産が軽いのよと笑って、三人目の時には彼が留守だったので出産用の荷物を車にのせ、自分で運転して病院へ行って産んだし、退院する時も迎えに来た上の子たちと赤ん坊をのせ運転して家へ帰ったそうである。

夫はフランス語で名前をつけたいと、「愛」という意味の「アモ」がいいと言ったけれど、大阪では餅のことを「あも」と言うので、この子が小学校へ行ったら「あもあも」とひやかされると反対した。それなら「光」の「ルミ」はどうだというので「ルミ」と片仮名でつけることにした。彼はカナモジ運動をしていたから、出生届を出したら変わった名前でと言われたそうで、敗戦の翌年であった。

水は外からバケツで汲んで運ぶ。流しもない蚕室であったが、広さは充分あった。村の娘たちが洋裁をしたり歌ったり新しい勉強をしたりするには都合よく、次々ときき伝えて集まって来た。四歳児と赤ん坊は皆が留守りをしてくれて、私は何の心配もなしに育児と仕事が出来た。

親たちの旧い和服をといて自分のワンピースやスーツ、子ども服に仕立ててゆく喜び、封建的な旧い風習やおきてを自ら解き放つ考え方の学習など、輝ける民主化の五年間といわれている時期であった。

大阪に小さい家が出来て皆と別れて帰って来たが、たちま

ち食糧難にぶつかり学習会どころではなかった。せめて子どもたちにちゃんとした食事を週一回でもさせたい願いの親たちが集まって色々工夫をし、材料を持ちよって、週一回の子ども生活学校が生れた。子どもたちは集団生活のよろこびを味わい、ブーク人形劇団のスライド「野ばら」等の上映を子どものもので実行してゆくのしさを知った。今まで女学校と中学校の別学であったのが男女共学になり、フオークダンスなど男生徒と女生徒が手をつないでおどり、旧い教育をうけた親たちには眼をみはるような変わり方であった。着るものも不自由であったから洋裁のクラスはすぐ集まったし、学習会もボツボツ始まって、私の仕事は絶えず忙しく、次男小学校入学と同時に市会議員になったので、ますます多忙になった。

夫の建築設計の仕事も忙しく、家中皆がキリキリまいの状態だったのが、子どもにとつて却って何でも自分で考えてする習慣をつけたのかなと思う。が、当時はいつも「悪い親でかんにんしてや」と心であやまっていた。だから第一子が二浪しても目標をかせず、その頃一番むづかしい電子工学をめざすのも、そつとみているより仕方がなかった。受験の三月は、市議会も新年度予算の審議で毎夜おそくなりつらい思いもした。ルミは私の思いもかけない東京の学校に行く、寄宿舎のある津田の数学をと言うので驚いた。何かの話の時に、音楽は楽器が高価だから私たちには向かない——たのしみな

ら別やけど——数学は紙と鉛筆があればいい。どんな所へ行っても出来ると話していたことが子どもの頭に入っていたのかと思った。せっかく志を立てたのだからそうしたらとすすめ、受験の時、学校に頼んで寄宿舎にとめてもらった。上級生に大変親切にもらったので、自分が入学してからもういつも入試の学生の世話役を申し出て卒業まで続けた。

卒業生がほとんど職業を持って働き、自分の収入の中から学生のための奨学金を寄付していることなど、女が仕事を持つことの喜びをはつきり育ててもらったことは私の津田への感謝である。現在は大学の教師をしているが、私学だから七〇歳まで勤められると、三人の子を育てながらがんばっている。昨年イギリスの学会に出るはどうかと言われた。二歳の幼児をかかえているからと断ると、やっぱり女は駄目だと言われるのでどうしようかと相談して来たが、私は留守番に行つてやれないので彼と相談した結果、彼が休暇をとり、海外

出張が出来た。今年はまた報告する役目を持って出張する由、やっと女の仕事認められるようになったと私もうれしい。孫の女の子が大きくなった時は、もっと自由に行動出来るだろう。三代がかりだなとつくづく思う。

私は子育てが終わり孫九人という中で、夫が八〇歳をこして病気になる、恍惚になりかけたのを、やはり交友関係からの医師の注意で早く発見出来て、今それを取りもどすための闘病中である。男の自立とは何か。家庭科共修の大切さを身にしみて感じている。男が会社の仕事から離れた時、自立した生き方が出来ず恍惚の人になってゆく哀しさを病院で数多く見て来た。今まで活動して来た女の仲間たちが、夫の老化的ために家にしばらく閉じこもる辛さもあり、人間の自立をめざす家庭科共修を深く考えさせられる毎日である。

(いいだ しずえ・元市会議員)



## 少女と家族——『わたしはアリラ』に見る——

清水 眞砂子

『わたしはアリラ』(ヴァジニア・ハミルトン作・掛川恭子訳、岩波書店)の家族ほど風変わりな家族はちょっとないか

もしれない。「一家のある者は、自分が何者かをさぐり出す過程にあり、ほかの者は、自分が信じてやまない虚構の中で

生きている——そんな一家を書くのは大変だが、思いきつてやってみる価値がありそうだ。」(一九七六年ニューベリー賞受賞スピーチより。訳者「あとがき」による)作者がそう思つて書き始めたのがこの作品であることは今では疑いの余地のないところだが、実際に生まれてきた作品の家族は、私たちがこのスピーチから想像した家族をはるかに超える、過激ともいえる家族だった。もつとも、家族構成そのものはごくごく普通で、両親と兄、そして十二歳の誕生日を迎えたばかりのアリラという、どこにでもある構成である。ただ、ほかにもうひとり、この家族と深くかわつている人に(仮面のジエームズがいる。普通とちがうのはこのあたりからで、アリラの父親(太陽の石)父さん)は、今のところは地元の工業単科大学の食堂で給仕人の監督をしているが、いつまで続くかは誰にもわからない。なにしろ、「あしたにも仕事をやめて、まえに住んでいたクリフビルにたどりつくまで、歩きつづけようという気になリかねない」人だからで、父親が姿をくらますたびに息子がバスに乗って迎えにいくということがすでに幾度となくくり返されている。出ていくたびに月給は使いはたしてしまふから、母親はその都度ひどくめいってしまう。が、仕事の腕はよく、公平で、職場の人びとの信望はあつた。身長一七八センチ弱、両の肩はがっしりとして、青みをおびるほど黒い、つやのある髪を肩までのぼしてゐる。

母親も一七〇センチと背が高く、美しい。長いほっそりとした脚をもち、ちりちりの髪を背中までたらずか、ポニーテイルにまとめ、おしやれで、「かがやくばかりに顔をつくり」、「つけまつげをしてからでないと、スーパードットでかけようとしなない。」少女たちを集めてダンス教室を開き、町の人々からも広く信用されている。たとえかげでは、「黒」と声に出していいない人々に「色が濃い」などと言われているようにも。

兄の(天翔ける太陽)ジャックはアリラより四つ年上の十六歳。頭には黒い皮の、また時にはすきとおるように薄い絹のヘッドバンドをすつきりと、さりげなくまいて、足にはウエリントン・ブーツをはき、時には上半身むきだしで、若者たちが車乗りつけるところへ馬をのりつけ、人々の注目をあびている。いま、まさに、「インディアン」として自分がつくりあげた虚構の世界に生きている真最中なのだ。アリラは、兄が大真面目で「インディアン」になっているのか、ただの真似なのか、本気なのか、はかりかねているが、いずれにせよ兄さんはあこがれの人で、いつも誇りに思ひ、母親もまた「ジャックのまわりには独特の『靈氣』がたちこめてゐる」などという。

そしてアリラは、というと、彼女は自分がどこにゐるのか、自分が何者なのか、ようとしてつかめず、ゆれ動く深い

霧の中にいる。やがて、その霧は少しずつ少しずつ、たとえ部分的にはあれ、晴れていくのだが……。

まったく、四人とも一見、てんでばらばら、月並な作家の手にかければ、たちまちのうちにみじめに崩壊させられてしまいそうな家族である。が、しかし『わたしはアリラ』のこの家族は風変わりなまま家族として生きのび、——この「生きのびる」ということには藤本和子のことを待つまでもなく、当然、人間としての、そしてこの場合はさらに家族としての威厳をもって、という意味が含まれている——その中では虚構のくずれた兄のジャックもそれでつぶされはしないし、アリラもまた、自分に課せられている仕事を深く自覚することもできる。これはいったい何によって可能なのであろうか。たとえ他人の目には風変わりに映っても、子どもたちは両親を尊敬し、両親もまたそれぞれにその尊敬に値する人だったから、などというのは答えにならない。たとえ仕事ができたと、一ヶ月も雲がくれし、給料も使い果たして、息子が迎えに行つてようやく帰ってくるような父親の何を子どもたちは、そしてまた人々は尊敬していたのだろうか。母親は美しく、やさしく、実際的だったから、ただそれだけで子どもたちの敬愛をあつめられたのだろうか。子が親を誇りに思い、尊敬する、そこにあるのは何なのか。家族の中で本当に子どもたちが生きのびられるとしたら、それは何によつて

なのか。個人的な能力とか、家族内部の同情だけで、人は生きのびられるものであろうか。

この問題を解く鍵はどうやら〈仮面の〉ジェームズにありそうである。これは何も親子の間に第三者が入ることの必要性を説く心理学者たちに同調しようというのではない。それならジェームズでなくてもよかった。〈仮面の〉ジェームズがジェームズでなければならなかったのは彼が類に生きていた、もつというなら、彼につながるすべての生きている人、死んだ人の存在を自分の中に深く引き入れて生きていたからである。父さんはそのジェームズにつながり、ジャックも、そしてアリラはことに、父さんを通じて、あるいは直接、このジェームズにつながっていた。母親もまた彼らと民族こそ異にしていたが、歴史の中で敗北を強いられてきた黒人のひとりとして彼らにつながっていた。アリラはそういう人たちの中にいた。ジェームズは生前、アリラは部族の語り部になるだろうと予言する。彼女も、今はつきりとそうなりたい、なろうと決心する。個を超えて類にぬけた家族、歴史の迷子になつていない家族、そんな中で人ははじめて個人としても生きのびられるのだと、この本は私たちに伝えてくれているように思われる。

(しみず まさこ・児童文学者)

はっげん

## 男のなかの家族

池 木 清

自分自身の将来の職業について考えさせるような課題を出して、それに対する学生（当然女子ばかり）のレポートを見ていると、教育効果か否かは別として、なかなかしつかりした職業観を持ち、一生仕事を続けたいとの希望を表明している者が多い。ところが、一方で「女は家に居てもらいたい」と男は考えていると彼女たちの多くは固く信じている。そこで、現実の問題が起こっているわけでもないのに、早々と結婚後の生活に思いをめぐらして悩んでいる。

もし、男子学生に同様の課題を出したとすれば、職業選択についての悩みや迷いはたくさん出てくるであらうが、好きな女性がいなくてもその家の家業を継ぐように望まれてもいるのでなければ、まず結婚後の家族生活について言及する例はほとんどあるまい。

一般の大人にとって家族といえ、配偶者、子供、そして老親などが通常思い浮かぶが、それぞれの持つ意味はかなり異なっている。ことのよしあしは別として、女性と男性とでは、人生の中で配偶者の持つ意味も大きく異なっている。男

性の場合には、これまでその生き方を妻の事情に左右されるケースは少なかった。逆に、女性は、夫の事情次第でその人生を根底から覆えされることもしばしばであった。このような従来からの実態が、冒頭に述べた女子学生のレポートにも反映しているわけである。

ところが、同じ家族でも子供のもつ意味は男性にとって重い場合がある。通勤できない程度の遠隔地に転勤という事態が生ずると、子供の教育を理由に妻までが夫に同行せず、男性ひとりが新任地に移り住む単身赴任を強いられるケースが多い。子供の教育という理由があげられるのは、子供がある程度の年齢に達している場合がほとんどであるのに、夫婦が新任地に移住して、子供だけをなんらかの措置をして従来地に残すという方式をとらないところが日本的な特徴である。

更に、老親となると日本社会では大義名分になる。なんとか遠隔地に転勤したくないと考える人たちがまっさきに持ち出し、また人事当局にも説得力のあるのが、老親の世話をしているとの理由である。子供の教育という理由は、中堅サラ

リーマンの大部分が抱えているために無視されてしまうが、老親の世話はだれにでも当てはまるわけではないので、効果がある。老親の世話といっても、実際には勤めている男性がしているというよりは、その妻がしているのだが、それでも男性が転動できない理由になるあたりが大変日本的である。

同じ家族の事情でも、男性にとつて最も持ち出しにくいのは妻の職業である。転動で単に夫婦が別々に住むことを甘受させられるだけならまだしも、その異動が昇進であつたりすると、会社側は暗に妻に職業をやめさせて新任地にも同伴せよと要求してくる場合すらある。

一口に男のなかの家族といつても、妻と子供と老親とで、日本社会の一般的な受け止め方はこんなにもちがつている。以上は、筆者の価値判断ではなく、現状認識である。それでは、今後はどう推移するのであろうか。

女性の社会進出が進み、共働きが常態となると、これまでのように妻の職業を無視した考え方は改められなければならない。やはり家族の事情を判断する重みの順序は、配偶者、子供、老親の順になるのが自然ではないか。

といつても、どこにでも夫婦で現れるようなアメリカナイズした社会を筆者が推奨しているのではない。夫がなにかの榮譽を受けると、妻までがしゃしゃり出てきて手までふつてゐる姿ほど、男女平等に反する光景はない。自分が稼いだわ

けでもないのに、離婚訴訟で三六〇億(?)の金を要求する神経なども、全く同様である。女性の地位向上とは、あくまで女性自身が自らの力でいかなる榮譽でも、金でも、ポストでも獲得できるようにすることであつて、男の家族という理由でおこぼれをできるだけ多く掠めようという類の態度ほど、女性の地位向上を妨げるものはない。

国際婦人年以來、我が国でも女性のあらゆる分野への進出が進み、次々と現れる「初の女性〇〇」は後に続く女性たちを大変勇気づけている。これは、女性にとつてのみならず、男性にとつても喜ばしいことである。子供や老人のように稼得能力のない者を扶養家族として遇するのはよいが、大の女を当然のごとく男の扶養家族に認めているぐらいおかしいことはない。「女の生き方は、男よりも選択の幅が広い。働くこともできれば、働かないこともできる」との論をよく見かける。正に現状はそれとおりで、男性の立場からすれば甘えるなどいいたい。女性の職場進出の環境がある程度整ったあかつきに、なお働かないで男に寄生して生きようとする女性を歓迎するほど甘い男性ばかりではないのである。

我が国も既に女子差別撤廃条約を批准し、伝統的な性別役割割分業観を変容させていく努力が各方面でなされている。いつまでも「女は家庭に居てもらいたい」と男は考えていると一方的に思い込んでいる若い女性ばかりが育っているのはお

かしい。家庭科教育でも、国際婦人年以降の世の流れを学ばせて、女生徒のこのような思い込みを修正していただければ

幸いである。

(いけぎ きよし・日本橋女学館短期大学)



## 子育てをひらく

池 亀 卯 女

子育てをひらく、と書いてみると、ひびきは悪くないし、新しい方針(?)が出そうな気がする。しかし「どういうことですか? どうすればいいのでしょうか?」と問われると、そう簡単には答えられない。私もこの言葉を使っているが、それは、現在の「閉ざされた育児」の状況に対して、もう少しひらいてみませんか、と、とりあえず問いかけているだけなのだ。もう少し理屈をいうと「閉ざされた」とはどういう状況なのか。閉じられているのをどこまで自覚するのか。その根っこをどこまでみえるのか……。うっかりと、子育てをひらく、などと明かるく言ってしまったけれどその奥は深そうだ。閉ざされた育児状況を部分的に切り取って描写するのはやさしい。アパートの一室で一日中幼い子と向き合う母親。熱だの夜泣きだのと子供のことで困れば実家のお母さんに電話するしか方法のない人。育児書と首つびきの人、何とか良い私立中学へ入れようと必死の人。孤立した家庭の中で育児に

熱心になっている母親を非難する声は多い。

しかし、子供がかわいい、家族こそが大事だ、こういう思いを誰も否定しすることはできない。そもそも夫婦や親子、家族の絆自体、内へむかう閉鎖性をもっている(対幻想といってもいいし、エロスの結合といってもいいだろう)。

今問題になっている家族の孤立や閉鎖性は、そうした家族の本質があるからこそ、当事者にとっては自覚しにくく、自分のウチさえ良ければいい、という方向へ傾きやすい。だから、若い人の希望は結婚して楽しい家庭を作ること、子供をうむことに集まる。

そうした世間一般の意識にのっかって行政も専門家もマスコミも「夫婦仲良く、子供をかわいがろう」という一種の家庭基盤充実策をうち出してくる。少産少死・高齢化社会の中で、離婚の増加など「家庭崩壊」への危機感をもつ政府は、今まで以上に優生思想がらみの母性思想を押しつけてくる。

たとえば、二、三年前から立案中の母子保健法改「正」案をみて、母子手帳にかわって母性手帳を発行し、妊娠前の若い女性（中学卒業時・あるいは成人の時）に渡して母となる準備をせよという。この改正案は同時に新生児モニタリングシステムという先天異常のチェックシステムも盛りこんでおり、良い子をうむため、良い子に育てるため（そうでない子は生まれないようにする、あるいは早くから選別する）の施策が検討されている。

母子保健法改正を待つまでもなく、今、婚前学級・母親学級、そして乳幼児の健診や育児相談で強調されているのは、まさしくこの「良い子を産み、育てる責任はお母さんにありますよ」ということである。母子関係論は、三歳までの母子関係がその子の将来を決めると言うし、非行や登校拒否の専門家はその子の幼児期に問題があったと指摘する。ただでさえ、二人か三人しかいない子供を大事に育てている親にとって、これは恐怖心をおこさせる話である。

育児は楽しい、というファッショナブルな育児雑誌にも、裏側ではこのような母子関係論が浸透している。こんな状況だから母親たちが育児に懸命になるのも無理はない。いつも母と子という風にワンセットにされている不当さにも気づかず、亭主が毎日会社にとられていることも怒らず、育児を自分一人の肩に背負いこんでなんとか人並みに育てようと腐心

する。

こんな子育てが真に楽しく、生きがいとなるはずがない。みんなどこか疲れ、うんざりしている（子供はもっと疲れているのですぞ）。それでも手をゆるめず、結果としては自分の子供しか見えない世界に陥っている。

大人同士の競争的な関係、キハクな人間関係は、お互いにある一面しかみられず、お互いの違いや個性を大事にする方向にいかない。基準はいつも「世間」である。世間並みという基準からはずれるのがこわいから、病気や障害も許せなくなる。しかし、多様性やお互いの違いの中にこそ、面白さやエネルギーのもとがある。わずらわしいから、と子供や大人の出入りを拒否していると、子供たちもまた、人との関係がキハクになったり、自分の個性に自信がもてなくなる。

子育ての問題は、いつも大人同士の関係、大人の生き方の話におちついてしまう。私たち自身、どんな生き方をしているのか、それを問いたださない限り、新しい子育ては出そうにもない。ようやく出てきた「男の子育て」にしても、現実には長時間仕事にとられているのをどうするのか。会社からはずれてどう生きるのかにすぐ直面するだろうし、子育てにかかわれる男がふえたとしても、それが、男も女も家庭第一、子供第一、となるのであれば、やはり、子育ては個別のものになってしまいうだろう。



今は何もかも手探りだけれど、子供たちの育ちに学ぶ、彼らの成長力を信じた上で、大人もまた自分のこれからの生き方を考え合い、共に行動していける関係をつくれたら、子供

たちもきっとそんな大人たちの姿に学ぶことが多いだろうと思うのだが――。子育てをひらく前に、大人同士、ひらき合いませんか？  
(いけがめ うめ・小児科医)



## 変わりゆく性意識は家族をどう変えるか 安 東 尚 美

大体、女性というのは、小さい時から将来必ず結婚し家庭を守るように育てられているので、仕方ないと言えば仕方ないのだが、我が身を照らして、仕事上、人生上の責任を男に頼るところがあった。社会における仕事や運動について、失敗したら男がうまく処理してくれる、理解ある男がそばにいてくれないと何もできない、という考えが自分の内にあることを、やっと素直に認めることができ、克服していくことの難しさを実感できるようになってきた。

一方、女性解放運動においても、結婚し夫婦の枠内で役割分業などの改革を目指す人と、離婚したり結婚しなかったりして夫婦制度そのものを批判する人とお互いを批判し合い結果として運動が分断してしまうことがしばしば見受けられた。いずれの考え方に立つにせよ、個人的な男女関係や愛情の中身そのものに性差別を温存する大きな要因が潜んでいる

以上、男性中心の性秩序を見直すことが不可欠となってくる。この中で、「女は純潔を守るべき」「性愛行動は男性からしかけるべき」という考え方はすでに崩れつつあり、女性たちの性意識も性行動も開放的になってきている。しかし、結婚しているかどうかで出産と中絶とが切斷され、しかも結婚に関して男に発言力があるという状況の中で、「性解放イコール女が損、女は男に結婚の対象として愛されるようにふるまうべき」という図式が温存されている。男性は、仮に「男は仕事・女は家庭」というパターンを作ることになっても、女性を結婚制度の枠で「守ってあげる」ことによって、性に対する責任を果たしたと見なされ、いわゆる二重規準がまかり通っている。そこで、性規範を真に平等なものとし、女が性の主体者たり得るためには、「結婚せずに子供を生むな」「子供を生んだら離婚すべきではない」「両親がそろってこそ健全な家庭」と

いう考え方を見直し、結婚制度に代わる新しい性や民法の秩序を考えていくべきではなからうか。ところが、今の政府のやり方は、優生保護法や母子保健法によって女性に対してだけ性解放を押さえこもうとしたり、特別養子制度によって「未婚の母の子供は夫婦そろった家庭へ養子に出しさえすればよい」という意識を植えつけようとするものののだ。

単親家庭を特別視し、かわいそうだから福祉の対象にするという考え方をやめ、多様な家庭を前提とした社会を目指していきたい。教育についても、将来必ず結婚すると決まっていたわけであれば、社会面・生活面での自立も考えやすいし、街作りについても性別分業が想定できないとなると職住近接や自然との調和もすんなりと視野に入りやすいと思う。

当然のことながら、「結婚制度を崩してフリーセックスにすると、得をするのは何かの天才や美男美女だけで、とりたてて魅力のない私たちは配偶者に恵まれなくなってしまう」という反対意見も聞こえてきそうだ。

さらには、「育児や看護と仕事との両立を一人でやるのは大変だから、大人同士の協力関係が必要だ。結婚以上に安定した協力関係は考えられない」という意見も出てきそうだ。

これは、私自身の、そして女性運動全体のこれからの課題ではないかと思う。女性との協力関係では、以前同居していた妹に、「姉が婚外子差別と闘う運動をやっていることがわか

ると自分の結婚にさしきわるので」と出て行かれたし、地域で保育園の親同士のつながりもできつつあるが、家族以上のものにまではなっていない。男性との協力関係でも、子供の父親も以前からつき合っていた別の男性も、料理はもちろん、布団の上げ下ろしや灰皿掃除に至るまで、私が病気になるか、うるさく言わないとやってくれないし、「家事の分担を言い続けるようでは愛情が冷めるから一緒に暮らせない」という本音をもらすのだ。

非婚カップルや婚外子が珍しくなくなり、伝統的な家族観夫婦観のタガが緩めば、家族を超えたネットワークもかなり作りやすくなるのではないかと思う。要は、結婚制度に疑問を抱き、性について開放的になっている若い人たちに、親の世代との性意識のギャップを乗り越える勇気がどれだけあるかだろう。血縁家族を一セットにして登録する日本独特の戸籍制度にガツチリとからめとられて、親たちの世代には、「娘を無事に嫁がせること、すなわち一族の恥である婚姻外の妊娠や出産を未然に防ぐこと」が親のつとめであるという考え方がすこぶる根強いことから。

私自身、結婚以外の生き方、考え方を認めさせるまで、特に母親とずいぶんケンカをしてきたし、婚外子差別と闘う会のメンバーは皆同様だという。「私生子」差別をなくす会」会員は、決して有名人やエリート女性ばかりではなく、「ガキが

「ガキ産んでどうすんだ」と周囲から心配された「何も持っていないいちっぽけな女の子」だっているのだ。

こうして女たちが伝統的な家族を解体していった結果、家族や子供からあぶれることになった男たちは、きわめて樂觀的かもしれないが、映画「クレイマー・クレイマー」や「赤ちゃんと乾杯」などのように、男一人あるいは男同士でも子供を欲しがり、子育ての楽しみを見出すようになるのではない

かと予想している。

男性も含め多くの人々の価値観が、生産と生活とを同じ視野で語れるものに変わっていかなければ、女性解放運動が実を結ばないのは確かであろう。その過程にはいく通りものやり方があり、それぞれを異質のものと考えず共通点を捜し、つながりを見出していこうとする寛容さが望まれる。

(あんどろ なおみ・建設コンサルタント)



## 〈青春ふりかけ〉を 書いていた ごじらりょうこさん



「ごじらッテ、ナニモノデスカ?」という読者からのまじめな質問もあったので、東京吉祥寺の彼女のアパートを尋ねることになりました。

〈ごじら・りようこ〉こと若竹稜子さんは、今年三月からここで一人住いをはじめた。生まれて初めての引越しか。小金井市の両親の家にいた頃、二日に一ぺんは夕方「ただい

まー」と、よその子が学校から帰って来た。彼女の実母(通称・魔女)若竹キミイ氏に話を聞いてほしくてやって来た。彼らがとも生き生きとして見えた。「私も会いたい」とき、魔女に会える人になりました。いので家を出ることにしたそうで、今は「会いたい時に会いに行きます」の関係を楽しんでいるよう。

目下、子ども活動や合唱団(パートはソプラノ)『野川を清流に』の運動やWeの活動に加わって「われながら感心するスケジュール」という。以前から「活動に参加することで学習も兼ねるような何かに加わりたい」という気持があったというから、「スゴイ」と感心するところ。

ごじら、流に選んだ大学の通信課程では、家政学部・生活芸術学科に在席というから、

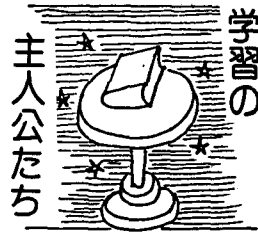
「家庭科の先生になるのかな?」と聞くと、「まったくわかりません。三十歳までに卒業を目指します」とのこと。

自分の時間を確保したいので、現在「スケジュール調整のきく仕事」で選んだ、ミ〇タードーナツで売り子さんをしている。

「百四十種類もあるドーナツのねだんを覚えなくてはならないし、お客様との応対の仕方をそわたり、社会の厳しさにもふれるけど、同年齢の人たちと、いっしょに働いているのって、ものすごく楽しい」と言うから、家賃を稼ぐだけじゃなくて、エネルギー源でもあるらしい。未知のものに、ものすごい憧れを抱いている。それが情熱となってキラキラ輝いている。この夏はたちになった、ごじら・りようこさんでした。

(青木)

## 学習の



## おうちのひとのこと

横浜市並木小学校の子どもたち

### ◆一年三組の子どもたち◆

いがらし ひろこ

おとうさんいつもおこずかいくれてありがとうございます。おかあさんいつもおいしいごはんつくってくれてありがとうございます。おいしいよこれからもおいしいものをつくってください

じびき あらた

おかあさん、おかいものときは1どに1ぺんに、かわないの。おとうさんたまにわ、いっしょに、あそびなさい。おねえちゃん、らんほうをしないの。

はしもと かよ

おかあさんおこらないで。  
おにいちゃんいじめないで。  
おとうさんにちようびあそぼうね。

しまだ まさゆき

おとうさんはやくかえってきて。おねえちゃんいつもおそいね。

よしおか あき

おかあさんおとうさん、たばこすわないで。  
おじいちゃんたばこすいすぎ。  
おねえちゃんすぐおこるな。  
おかあさんじゃすこにいったら、ながくじゃすこにいないで。  
おとうさんえごこつたら、ぜったい、いちりんしゃかってよ。がんばるよ。

しおかわ たかお

おとうさん、はやく、かえってきてください。  
おとうさん、おおいこえをださないで、ください。おかあさん、あまりおこらないでください。

ほさか ゆみ

おねえちゃんなかよくあそんでね。  
おかあさんいつもおいしいおりようりつくてね。おにいちゃんなかよくしようね。  
おとうさんいっぱいやすみふえるといいね。

とほら きわむ

おかあさんどうして、そんなにぶつぶつおこるの。りようたどうして、りようたは、なきむしなの。

よしだ ふみえ

うちのおとうさんはいつもいえでたばこすうからだからわたしわけむりでせきおしてしまいましただからやめてもらいたいです。  
うちのおとうさんわてれびおみてるとすぐちやんねるおかえてしまうからやめてほしいです。

うちだ ひろゆき

おかあさんは、ごはんを、つくるのが、おそ  
いからもっと、はやくしてください。おかあ  
さんは、どうしてがみがみおこるんですか。  
おとうさんは、どうしてにちようびたばこを  
かうんですか。

おさかべ りつこ

おかあさんたばこいっぱいすわないで、  
おとうさんびいるのみすぎないで  
おねえちゃんあんまりおこないで、  
おねえちゃんあんまりいじめないで

すずき としひろ

おとうさんまいにちはやくかいってきて  
おかあさんあんまりおこないで  
おねえさんあんまりおこないで

たなか あんな

おとうさん、たばこをすいすぎないでくださ  
い。おとうさんビールをのみすぎないでくだ  
さい。おとうさん、はやくかえってきてくだ  
さい。みえたたかないでください。えりいじ  
わるしないでください。おかあさんおはなし  
をしすぎです。

かわせ ともや

おばあちゃんがあさべんきようてうるさい  
よ。おかあさんうるさいよ。  
おとうさんにちようびになんでつりいくの。  
おばちゃんがっこうのよういでうるさいよ。

あおき あんり

おとうさんそんなにおさをそんなにのまな  
いでね。  
おかーさんそんなおこないでねおこりん  
ぼうはあんりきらいですよ。

ひぐち たろう

1 ゆうじじぶんのものををつかえ  
2 おかあさんおとうさんがみがみすんな  
3 おかあさんねえただけねさせて  
4 おかあさんおとうさんぼくにもいばらせて

みうら くみ

おかあさんへおかあさんおこないでやさし  
くなつて。おねいちゃんへおねいちゃんまじ  
めになつてくれない。おかあさんへひるとよ  
るのごはんはやくつくつてね。おとうさんへ  
いつもはやくかえってきてね。

あさか まゆ

おとうとのゆうくんは、ますくまんをちよう  
しにのるな

おかあさんびあののれつすんのときおこない  
いで

おとうとのゆうくんおさかなをすこしはきら  
いになつて

## ◆四年二組の子どもたち◆

「しんじてもらいたいな」

中川 あいか

この間、スイミングのしけんがあった。そ  
の時、すでにいっしょにいつていた、きよう  
子ちゃんはまだ5級にいつていた。でもわた  
しは、6級だった。だから私は、ぜったい5  
級にいきたいと思った。6級のテスト内よう  
は、クロール25メートル、せおよぎ25メー  
トルおよぎことだ。私はいっしょうけんめいお  
よいで25メートルおよげた。せおよぎもおよ  
げた。だけどおちてしまった。

家に帰つてしけんにうからなかった事をい  
ったら、お兄ちゃんやお母さんに

「うからなかったの。25メートルおよげな  
かつたんでしょ」

「25メートル私およげたよ。だけどおちちゃったんだよ。本当に25メートルおよげたよ」と、私がいった。だけどしんじてもらえなかった。その夜私はねる時ふとんでないた。「どうしてお母さんたちしんじてくれないの。本当におよげたのに。そんなに私がしんじられないの」

と思ひながら。

その日からこの事は、だれにも言っていない。だれか相だんにのつてくれる人いないかな。だれかにぜん部うちあけたいな。

(お母さんにはぜったい言っちゃだめ)

## ぼくの家

舟山 陽平

ぼくの、家は、お母さんと、お父さんが、たのしい、からうれしい、たとえば、お父さんの、よびかたは、でかぼくで、ぼくのよびかたは、ちびぼくと、言います。

奈良 理沙子

うちのお母さんは、おとうとのことばかり、で、学校で、ぼうさいくんれんのときに、きてくれないし、おとうとのほうばかりで、だいたいは、おとうとが、なにほしいといった

りしたら、かうけど、わたしたちのときは、かってくれませんか。でも、おとうとにも、こわいときが、あるけど、わたしたちのほうが、ものすごく、こわくなりません。おとうとが、ほかのところにいっちゃったら、「こっちおおいで」とやさしく、いうけど、わたしたちが、いくと、「なにやってんの、はやく、こっちないよ、おいていくよ」とか、おこるのに、もっとわたしたちにも、やさしくしてほしいです。でも、お母さんは、やさしいときもあるので、やっぱり、すぎです。

中里 威晴

おとうさんのことで？

ぼくの行きたいところに いっしょにいってほしい。

おかあさんのことで？

もっとやさしくしてほしい。

家出少女

小林 恭子

わたしは、「ぜったいに家出をしよう」と思ったことがなん度かあった。そのときは、だいたいお母さんやお兄ちゃんのことだった。だいたいお母さんはおこりすぎるんだよ！

とか、お兄ちゃんはずぐちよっかいだすんだもん！ きらい、とかベツトで思い。そうだ！ 家出をしよう！ と思ひました。

また、べんきょうをやりたくないのに「やりなさい」とむりやりいわれたので、思わず「アホー」と言ってしまった。そうしたらお母さんがチーターみたいになって、

「おやにむかってなんですかっ」といっておこられてあたまにきてしまった。だからまた家出をしようとおもった。

でも、けっきよくできなかった。

山本 政幸

お父さん おとうさんは会社でなにをしている。はやくかえてくる時もあるけどおそいときはおそくかえてくる時はおそくまでなにおしているの。

工藤 陽子

わたしのお母さんは、わたしとそっくりです。せいかくも、だいたいおなじだし、わたしも、お母さんも、おこりんぼです。もうやだ。お父さんと、なお子もそっくりです。

大が ひろき

おかあさんめちやくちやうるさい。

それにあれやれこれやれつてめちやいやだ。

あたまがいなくなったりするとぼくのせいに  
する。

もういやだ。

お兄ちゃんたちがおこる

松田 圭子

マンガをだまってよんでいると、かつてに人のよむなよーとか、お姉ちゃんの物をいじくつてあそんでいると、おこつて、わたしの物をかかってにさわっている。お姉ちゃんがねているとき明りをつけるとものすごくおこる。それでわたしにはでんきをつける。

おわり。

おそろしいあに

岡本 洋

うちのあには、いつもぼくのことけつとばしたりします。ぼくは、あにがおうとになればなあと思いました。なぜかというとおかえしができるからです。ぼくはそうなたらいいなあと思いました。

神尾 千枝子

私には、6才になる弟がいます。

この弟は、いたずらをすることもあるけど、本当は、とってもいい弟です。電車や、野球が、すきで、毎日のように、プレートなどをいじったり、野球の本を見たりしています。でも少し、いやな所もあります。それは、私の、かみの毛をひっぱることです。これだけやめてくれれば、本当に、いい弟なのに、これから、やめてほしいです。

高木 友博

ぼくの弟は一番にならないと、ぐれてしまいます。それでぼくは「いつも一番じゃないんだよ」というと、弟は「うん」といいます。けれど、また一番にならないとまたぐれてしまいます。ぼくはそんなせいかくをなおしてほしいです。

松下 万里

うちのおねえちゃんは、とてもやさしいです。だからだいすきです。でもやっぱり少しこわいところもあります。おかあさんもおとうさんも同じです。おねえちゃんはい年は中学生です。さみしくなります。だからやだ

なあと思いました。

田口 健介

うちには、人間らしい人間がいなくて、そのかわりにかかっているとりが、人間らしい、まったく正反対いなかぞくである。まるで、とりに、かわれるようだ、たん気で、おこりっぽいとりで、気に入らないとかならず、ぼくをいじめる。かわいそうなぼくである。

長浜 美和子

わたしは、5年生のお兄さんがいます。いつもわたしを一回ぶたないと一日が終らないと言うのです。本当は、いますぐにでもやめてほしいです。

中村 隆太

寅次郎は、なまいきです。毎日いやなことがあるとぼくに、「りゅうた」といいます。とってもなまいきだと思います。お母さんが寅次郎にたのみごとすると必ずぼくに、おしつけます。寅次郎は、ぼくをどういうふうにおもっているのかさっぱりわからない。いつもはなまいきでたまに、弟らしいところもあります。おもしろい弟だともいます。

# 小学校では

## 新しい家庭科を創るために

### 蛭 間 裕 人

## 比留間先生 家庭科でがんばる

—絶対的多忙化の中で—

比留間比呂志の勤務する、東京都武蔵平市立第十七小学校の一期は実に忙しい。  
まず運動会。学年の種目の練習もさることながら、四色対抗で行うそれぞれの縦割りブロックごとの、応援練習、歌の練習、マスコット作り、会場の装飾……。今年の比呂志は持ち上りの六年生なのでまだしも、学級編成換えのあ

った年など、学級が学級らしいふるまいもできぬ内に、ブロック集会の話し合いの場に投げ込まれ、一人一人の自覚や想いなどを生かす余裕もないまま、チームの名・色・マスコットなどを拙速に決めさせざるを得ないのである。やらせもいといところさ——と彼は思う。  
結局、沢山な仕事を作り出し、教師たちは六年生に発破をかけるのだ。  
「リーダー学級のお前たちが燃えなくて、運動会が成功するとも思っているのですか……」  
六年生が下級生を煽り、学校中がワーとかカーツという状態になる。忙しい、と口々に言いながらも、教師たちは生き生きしている。

企業戦士と呼ばれるホワイトカラー労働者も同じなのだろうが、教育労働者も「多忙化政策」との指摘に耳を傾けるゆとりもあらばこそ、仕事のやり甲斐の中にドツブリ潰かつて、根元的・哲学的な思索とはほど遠い地点にある。教育労働の現場も、日本全土を覆うアパシー（社会大衆状況）から自由ではあり得ないであろう。

運動会が終わって一息する間もなく、七夕集会への取り組みが始まる。再び縦割り集団で、笹飾りを競い、合唱コンクールの準備に明け暮れる。そんな合間を縫って、教科の先を急ぐ時、比留間比呂志はいら立ちを覚えるのだ。



近ごろの子供は遊びを知らない、と言って学校で遊びを教え、学習は塾に任せる。それと同じ、逆立ちした関係に似ていると彼は思う。彼が教室の中でしっかり学習させたいと思うことは、意図が大き過ぎるとみえていつも時間にせき立てられている。

さて、家庭科である。「草餅」は持ち込み教材というか、PTA学級行事というか、中途半端に終わってしまった。  
——が、まあいい、と比呂志は思う。

調理学習の実践例の中には、地方に伝わる料理を取り上げたものがある。名取先生の「チマキ」の授業も映画で見た。戦争体験の学習として「すいとん」や「大根めし」の例に接したこともあった。

家庭や地域の料理、は教科書の教師用指導書にも書いてある。

東京の学校で地域の料理といえどんなものが想像されるのだろうか。また日本全国から集まって来ている各家庭の料理を、学級の中へ引き出すのは大変なことだと、比呂志はひるんでしまうのだ。

山梨の「ほうとう」秋田の「しょつつる鍋」をやってやれないことはない。が、運動会や学芸会で民族舞踊が流行るの

に余り賛成でないのと同じ感覚で、比呂志は気乗りしない。

むしろ日常生活に本当に役立つ技術を身につけさせるのが本来家庭科の役割なのではなからうか。教科書を繰ってみる。ゆで卵&ほうれん草の炒め物、目玉焼&粉ふきいも、米飯&みそ汁、紅茶&サンドイッチ。これらは和食、ないし和洋折衷、あるいは洋、の範囲で、中華がない。朝鮮も。

日本の食生活の中に、中華料理が占める割合はかなり高いと思われるのに、小学校五・六年の家庭科〈食〉の分野に、それは登場しない。比留間比呂志は、彼の共稼ぎの生活の中で、それはかなりのウエイトを占めていたと思っている。中華風のスープや肉野菜炒め、中でも炒飯や冷し中華そばなどは、インスタント食品を極力排しながら、手早く作ることが出来るので重要なレパートリーであった。

炒飯を作るには、やはり北京鍋（中華鍋）がいい、と比呂志は思う。家庭科室の小さなフライパンでは……。やはり、油を温め、煙が出始めた頃、といった卵を抛り込むことから始まる炒飯は、底の丸い中華鍋でなければほんとうの技術を伝えることにはならない気がする。そこで、年度当初の予算会議にと狙っていたのだが、家庭科の部会であっさり蹴られてしまっていた。ミシンの購入が最優先とあればしかたがない。

六年一学期の〈衣〉は、エブロン作りということになっている。科教協の会員であり、かつて教研活動の活動家を自認

していた頃の比留間比呂志は、

「日本全国いたる所で、一年生の総てがアサガオを育てているなんて、異様な風景ではないのか」

という指摘に同感し、自らもそう発言して来た。しかし、組合の教研活動の退潮とともに教科書批判の力は弱まり、業者の教材セットの激しい売込みの功績もあったのか、「日本全国を挙げて一年生がアサガオ……」は美事に定着してしまっただけがある。

今、比呂志はエプロンの材料のセットを前にして、忸怩たる想いを噛みしめる。日本全国、津々浦々で、六年生がこのエプロンを縫っている。が、アサガオを止めて代わりに持ち込むものと言われれば、あれやこれや思いをめぐらすことの出来る比呂志であるが、エプロンに代わる何かは全く見当もつかないのだ。

ふと、比呂志の頭をよぎるのは貫頭衣のこと。縄文時代ならカラムシで織ったであろう、あれ。が、それは知的興味の対象としてであり、日常生活に資するという点からすれば疑問である。それにカラムシの貫頭衣なんぞ、逆立ちしても出まっこないのだ。

生地の色と模様。見本全部では繁雑になるから四種ぐらいに絞らましよう。そう、その中から自由に選ばせ、購入させることにいたしました。形は同じものを作らせるのがよい

でしょう。評価も簡単ですし、それがいいでしょう。学年うち合わせでこんな風に決まっていく。子供が個性を発揮できるのはポケットの形と、シシユウということかしら。

エプロンを作った『たんぼぼしんぶん』から

5月20日（火）の四時間  
目にエプロン作りをしまして  
た新しいミシンをかうの  
で、ミシンがはいってから  
作ることになりました。

だけど、五年のころぞう  
きん作りでミシンの調子が  
考えました。みんないい案  
わるかったので、学校がま  
がうかんだと思います。

比留間比呂志は、この記事から、彼のエプロンへの意識が透けて見えていると思う。この日の『たんぼぼしんぶん』のメイン記事は、**運動会の練習があった**で、一校時に学年体育で組み体操があったと報じている。二時間続きの家庭科の一分間分をその時間に充てたのであった。その一分間を、新しいミシンが入ったら本格的に取り組むという口実で、シシユウの下絵なんか描かせて、お茶を濁していたのがスケスケなのだ。

運動会が終わり、新しいミシンが購入され、エプロンの製作に取りかかった。

裁断。といっても型紙に合わせて、与えられた布地の二た隅を斜に切り落とすだけ。もちろん体の大きさに応じて寸法を変えらることになっているが、それはネグってのことである。

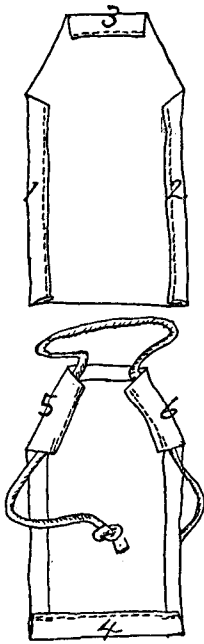
次に、縫う。手縫いはやめミシン一本でやることにする。五年の「袋」の教訓を想起し、縫う手順を示すことにする。

1・2・3はこの順でなくても出来上がりは同じである。また4・5・6もそうだ。だが(1・2・3)と(4・5・

6)の順は変えてはならない。重なり方が変わってしまうので必ず守ってほしい。また(4・5・6)の縫い始めと、縫い終りをかえし縫いにしておくことを指示した。そしてその一工程ごとに提示し、点検を受けることにした。

ミシンは四人に一台だ。八台使ううち四台だけが新品。一人が全部終わってから交代するのでなく、一工程ごとにチェンジする順番を決める。

ミシンを使うことが指導要領に定められ、必ず扱うものだと言うなら、教育行政は一人一台のミシンを確保すべきだと



比呂志は思う。少なくとも二人に一台は最低条件だ。学校配当予算の中から本年度は最優先としてミシンをぶんどったのだが、たった四台である。その分他の教具でまた不自由に耐えなければならぬ。

ミシンの故障の大部分は、針の取り付け方の誤りが原因だと修理屋さんから聞いた。「縫えない」と言って来るミシンは、まず針のつけ方を点検することにした。けっこう多いのだ。針の根元の太くなった所はカマボコ型をしている。その平たい面をミシンの上下なる棒にすりつけるようにして取りつけるのだが、それが出来ていない。繰り返して注意し、しっかり身につけさせなければ、と比呂志は思う。

#### エプロン作り 『たんぼぼしんぶん』より

6月17日(火)の三、四 ている人が多かった。

時間目に、家庭科でエプロンを作りました。 ぼくはまだでした。そしていそいでやったらきれい

みんなりようわきがぬえにできました。

5・6は紐を通すのだが、紐を通した形でミシンをかけようと苦労しているのがある。比呂志が

「紐は後から通すのだよ」

というと「ええっ」と驚いてみせたりする。縫った後から紐

を通すのが大変と思っていたらしい。さては、パンツなどのゴム紐を通した経験もないな、と比呂志は思うのだ。彼は、ちよつと驚いたがすぐに「ま、そんなものだろう」と思い至る。

いざ紐を通す段になって、一括購入した裁縫箱に、この太い紐を通すのにちようどよい紐通しが入っているのが驚きであった。業者の教材研究の徹底していること。

相変わらずミシンの調子が悪い。その調整でアップアップしていて、全体の状況の把握がおろそかになると、次第に教室の中が騒然として来る。ミシンがふさがっている時はシシユウを進めていることになっていた。が、その仕事にはあまり集中せず出歩いたりしている。家庭科の時間というのは、彼らにとっては息抜きの時間なのだ、と比呂志は思う。

水泳が始まった。プールの使用割り当てで、クラスの時間割が不規則になる。一学期も終わりに近づいている。通知票「あゆみ」の用紙も配られた。

エプロンは、どうやらミシン掛け紐通しまでは終わりそうだ。シシユウはまだまだ……。

炒飯は別として、せっかく栄養士の内海先生からつけ汁の材料を伝授してもらいながら、冷し中華は見送らざるを得ないのだろうか。見送らざるを得ないのだ。

中途半端に終わろうとしているのは家庭科だけではない。

歴史では、単なる知識の切り売り詰め込みではなく、ある種の感慨を児童に持たせたいと願っていた。さき玉古墳群への社会科見学を企てていた比呂志であったが、学年の教師らを説得しきれず、不調に終わってしまった。時間がなかった。

巨大な築山である古墳。そこに埋葬される一二人の王のために、どれだけ人民の労力が費やされたのか。古代人はどのような思いを胸に疊んで土を運んでいたのだろうか。そんなことを古代人になったつもりで討論させる授業を、一学期に取り逃がしてしまった。もう可能性はほとんど残っていない。

卒論へ向けてのテーマの決定などの進行状況も極めて不満である。

多忙化政策め！

もちろん政府の文教政策の反映や、教育財成の貧困の結果であることは確かだが、自分たち十七小教師集団がそれに輪をかけて多忙化を進めているとも言えるのだ。自分で自分の首を締めているような……。教師集団が手を貸すことによって多忙化は、絶対化する。

多忙化政策め！

(東京都小平市立小学校)

# 中学校では

## 新しい家庭科を創るために

姫路サークル

香川 敦子

### 評価の二つの顔

近頃よくきく言葉「評価する」「批判する」。

「〇〇に関しては一応評価する」というときには、十分満足ではないがまあまあ認める、肯定する、ということでしょうか。「批判する」がマイナスイメージであるのに対して、プラスイメージという感じがします。

家庭科に限ることではありませんが、中学校での成績評価は、普通5・4・3・2・1の五段階で示されています。その段階に属する人数の割合もまわっています。

学期の終わりに渡される成績表は、何といっても重みのあるものです。生徒にとっても、親にとっても、それをつけて渡す立場の先生にとっても。

私の記憶は大変古いもので、今の状況と全くいろいろな要素が異なっています。しかし、学校生活における「評価」「成績」「点数」「お点」は、今も昔もかわらない重みをもっています。

通知簿を渡されるとき自分の期待と不安、そして開いてみたとき、パツと目に入る数字。大体予想通りのこともあります。いつも弱い科目が一点あがっているときの（十段階方式でした）ほっとしたうれしさ。それこそ自分なりに大体よかったと「評価」していた科目がさがっていたときの胸のつかえ。まさか、今でも試験の夢をみてうなされるといふようなことはありませんけれど、こうした自分の中だけの気持のゆらぎは、いまでも想い起こすことができます。懐しいものです。

そもそも私の記憶では、試験となつて、少しなりとも勉強をしてみて初めて、ああ、こんなことを習ったのかと、その

全体像が臆げながらわかるということがよくありました。そして、試験になって問題をみたとき、私の思っている「学習したこと」と、先生の要求される「学習したはずのこと」とは、合うこともあれば、ずれることもあるという認識をしました。この精神活動は、やや高度なものだと思います。子どもの世界から大人の世界に渡っていくにあたって、経験すべき大切なものだ。自分の物差しとひと（先生）の物差しのちがいが。世の中にはいろいろな物差し（評価）があるものだということの理解。何でも自分の思い通りにはいかない（勉強したからといっていい点がとれるとは限らない）とか、ひと（先生）の物差し（価値観）を理解しなければいい点はとれない（自分の物差しを変える）とか、ひと（先生）の物差しがわかりかねることもある（どうしてこんなことを覚えなければならぬのだろう）など。これは今はやりのコミュニケーションの原型のようなものを含んでいると思います。つまり先生側も、（私自身が教師をしていた経験から）、ひと（生徒）の物差しを認識する貴重なメディアです。こんな風になしかなかったもたらえなかったのか、とか、この生徒はこんな表現ができるのかとか。教室の、ややもすれば一方通行になりがちな「授業」というものの評価が、ここにされているのです。このコミュニケーションで、生徒は、つぎの先生との攻防戦（点とり合戦でしょうか）に頭を使います。その先

生、その科目についてです。弱い陣地は補強しなければいけない。敵（先生）の状況に思いをめぐらせなければいけない……と。

先生の立場からいえばもちろん、どうすればあの生徒、この生徒に、学力がつくかの作戦行動です。

私はこの原稿を書くにあたって、考えれば考えるほど、現在の成績評価というものがわからなくなってきましたので、教育学の専門の友人にききました。送られた論文のコピーから、理解できたことを少し紹介します。

私が、なめるほどと感心したことは、指導要録（いわば成績評価を含めた生徒の公的な記録）は、「指導および外部に對する証明等のために役立たせるための原簿」なのです。だから(I)指導資料（私が書きました学習の効果に関する生徒と先生の間のコミュニケーションのメディアというところ）と、(II)対外証明の資料（転校とか、上級学校への進学、就職のときなどの内申書など）という二つの顔を持っているものなのです。

(I)の立場からいえば、多面的に個別的に書かれるべきですが、(II)の立場からすれば、客観的で、簡潔で、相対的な比較ができるものでないと困ります。行きつくところは、偏差値です。教育本来の考え方からすれば、生徒の発達の保障、学

力の保障のための評価であるのが当然です。しかし世の中がせせこましくなり、競争がはげしくなると、(II)の対外的証明(この生徒はこの程度です)に安易に使われてしまうようになつたのです。一番これが偉力を發揮する場が、高等学校の入学試験となります。義務教育でもない高等学校であつて、ほとんど全員が進学を希望するとなると、(II)がものをいいます。(II)のために、(I)(本来の評価)が呑みこまれてしまったのです。論文の中に、「指導資料」機能に対してはいわば見切りをつけた……とありました。

幸か不幸か、私の親たちは、私の学業成績に全く関心を示しませんでした(昔は、一般に関心がうすかつたと思ひます)。前に書きましたように、私は自分なりに成績にこだわつていたのですけれども、親は、「よかつた」とか「もう少しがんばりなさい」とかいったことがありません。どうも、成績表を見たという感触もないのです。それで、私は仕方なく、成績というものは、親たちにとって、私の値打の物差しになるものではないのだと考えたようです。私はあくまで、私の問題として、この先生、この科目について、攻防戦を繰りひろげることになりました。

私の親たちはクリスチャンでした。親たちの考える私の値打というのは、神様の目から見た価値ということになるの

だろうと、私は自然に思いこむようになりました。そうするとこれは、雲をつかむような物差しで、とても七〇点だった試験を、八〇点というようなわけにはいきません。しかもよくよく考えると、親たちの考える物差しの方が、上質なものに思えるのでした。ですから、学業成績というものは、先生と私かぎりの、その科目かぎりの攻防戦であつたわけです。

私が一緒に勉強会を持つてゐる若い仲間、成績表を渡すとき、1や2ばかりの生徒の、顔をひきつらせてゐるような表情に、つらさを感じるといいます。また別の仲間は、年度によつてできばえが異なつて、これ位ぬえれば(スモッグ製作)、前ならば3はつくのに、1か2をつけなければならなくなると、嘆きます。私は、じろりと彼女を見て、あなたの指導力が変わったのではないの? といひました。

私は、数学などを担当したとき、クラスによつて平均点に差があるのに気がついたことがあります。そのようなとき、教える側の私の授業にむらがあるのではないかとドキリとしたこともあります。新しいことを教えるとき、最初のクラスは、私に不安や気負ひがあり、二番目位は、やりやすく、三、四番目になると、自分でくどすぎるのではないかと思つて省略してしまう、ということが本当にあるのです。クラス

の雰囲気で、学習がすすむ、すすみにくい、という差もありました。今の荒れている中学校は、私の経験したやりにくいクラスなどとはとても比較にならないものでしょうけれど。

もう一つ、私の仲間の先生の話を紹介します。

それは彼女が中学の生徒だったときの経験です。

ある英語の先生が、学期の初めに、毎回の試験に、九五点以上の点をとった人には、必ず5をつける、とおっしゃったそうです。彼女を含めて皆がんばりました。そして大勢の人が九五点以上をとり続けました。さて、終業式のとき、校長先生が、その先生のやり方は、決まりにはずれているから、英語の点はつけてないと、おっしゃったそうです。彼女たちはがっかりして、皆で抗議をしようとしたましたが、担任の先生になだめられて治まったということです。

彼女は今も、その先生を、教えることに熱心ないい先生だったと、印象深く覚えていそうです。

評価がこんなに生徒の意欲をかきたてるものなら、(Ⅰ)の立場、発達の保障、学力の保障に役立つものだと思います。

どの先生でも教えているときは、全部の生徒に、全部が一〇〇点とはいかなくても、せめて、六〇点か七〇点のつく程度にわからせたい、八〇点のレベルになるようにするのは、どうすればいいのだろうと、心をくだき、工夫をし教えてい

ます（教師は、生徒に学問を教えるプロなので、プロ野球の選手が技術の練磨にうちこむのと同じことです。生徒にわからせること―学力の保障―ができないなら、二軍にまわってもらうか、やめてもらうべきではないでしょうか）。

そして、ニコニコと「皆よく勉強しましたね、皆成績が良かったですよ」といえるとき、教師冥利につくというものです。私も生徒の頃、たまにそういうことがありました。教室の中に春風が吹きこむような空気でした。しかし、現在は「評価」というものがその前にたちはだかるのです。春風はすぐ北風にかわります。

どうしても成績の順に並べて、ここまでが5、ここまで4……とつけなければならないのです。

論文の中に「相對評価の分布が教師に対する制約条件となつた」と書かれています。また、つぎのようにも論じています。

第一に、教育評価は個性に即した判定をするものであつて、学級あるいは学年の中での相対的位置をきめるのが目的ではない。第二に、この評定法では学級差や学年差を知ることができない。第三に、児童の理解にもとづいた処置ができない。たとえば全員の成績が向上した場合、評定結果は変わらず、個々の児童の努力の評定に反映されない。第四に、評定の正規分布は大多数の法則にもとづいたもので、無選択に集



めた大集団に対しては適用できても、わずか五、六〇人の学級にこの分布を適用するのは統計的に無理がある。

私は、耳が不自由なこともあって学力のおくれがちな少女と、もう五年つきあっています。今年中学三年生ですが、そのテストの問題をみると、量を多く、レベルを高くして、とにかく点数が一行に順序づけられるように、とされているように思われてなりません。先生の立場からすれば、相対的に、客観的に評価するために仕方のないことなのでしょう。

そしていつも彼女は、1とか2の並んだ成績表を淋しそうにみせます。それでもある科目が1から2になったとき、私ははっと気がつきました。誰かが1になったのだと。私は彼女にいいました。「Nちゃん、これ2になってよかったけれど、誰かが1になったのね」

誰かを蹴落さなければあがれない、評価、というシステム。

私の女学校時代の国語の先生にこの話をして、うかがいました。「先生、通知簿に一番悪い点で、何点つけられましたか？」五〇年以上も前のことを想い起こされるまなざしをなさって「五点（一〇段階）かしら」とおっしゃいました。この先生は、作文をていねいにみて下さって、必ずおさなりでない批評や感想を赤インクで書いて下さいました。私だけでな

く、皆が、返していただいた自分の作文をみるときは、ラブレターを開くような心ときめきを感じたものです。自分の書いたものが、わかってもらえて、評価されるうれしさです。点数はなかったのですが、よい評価か、悪い評価か、すぐわかりました。生徒は本質的な評価を求めているのです。私やその頃の友だちが今もものを書くのが好きなのは、その先生のおかげだと思っています。

ずつと後、「あなた方の作文を読んでいて、白々と夜があけてしまったこともあるのよ」とおっしゃいました。

本当の（指導のための）評価は、生徒も求めているものなのです。それが教育という、人と人との相互作用のコミュニケーションのメディアであるからです。

それなのに、戦後導入されたアメリカ式合理主義の評価のシステムが（アメリカではきつと、もつとよい効果をあげているのでしようけれど）、日本では明治以来の要素能力中心の学力観と融合して、それが上級学校への入学難などからみあい現状のように無惨なものになったと、私には思われます。

# 新しい家庭科を創るために

梶 原 公 子

## ☆避妊を学ぶ意味

「性」をめぐる授業のしめくくり  
に、避妊の問題を取りあげる。こ  
れは中絶とも切り離せない問題  
で、生徒の多くは「完璧な避妊法  
のできる」ことが理想」と考えてい  
る。しかし避妊について学ぶこと  
は、単に妊娠を避ける方法を学ぶ  
という技術的な面のみであるなら

## 「性」をめぐる 授業と考察

(2)

それは短絡的過ぎる。また生徒の多くが望む「100%完璧な避妊法」が、果たして人間にとって本当に理想だろうか。

避妊の問題は、もっとマクロにとらえ、それを手に入れることが人間特に女性の生き方にいかに大きな変化を与えたか、を考えさせたい。更に、避妊が完全な市民権を得ることによって性<sup>II</sup>生殖ではなくなった現在、避妊がどんな意味を持つのかを明確にする必要がある。

授業では、初めに生徒たちに以上のような視点ですすめることを話す。そして副読本を見る。テキストには様々な避妊の方法が図を混じえて説明されている。生徒の多くが知っているコンドームやリング、あるいは経口避妊薬ピルなどについて、一通りそれぞれの方法や問題点、成功率などを説明する。ピルについて、飲み忘れなければ100%確実であるが、副作用の問題などで一般には市販されていないと言うと、生徒たちの関心が集中する。副作用を考えなければ、使用法の手軽な点、100%近い確実さを持つものは他にないからだ。私の経験からも、長女出産後、ある産婦人科医院の看護婦さんから、その後の家族計画の一環としてピルを勧められた。余りピルに関する知識のなかった当時は、勧められるままにその錠剤を買って飲んだ。ところがしばらく続ける内にどうも体調がそれまでと変わって来た。看護婦さんの説明によると、薬はすべて体外に排出されるから安全であるとのことだが、

合成したホルモン剤を毎日飲むことが果たして本当に安全だろうか、ピルは使われ始めて余り年数がたたないことから考えると、安全性は実証されていないことになる。もしかしたら、その実証を自分の身体でしていることになるのではないかと、と大変不安を感じ、半年位でピルの使用はやめてしまったことを話す。

### ☆自律的妊娠の持つ意味

避妊の問題で私が最も生徒たちに考えて欲しい、と思うことは、確実な避妊法を手に入れることによって、人間特に女性の生き方がいかに変化したかということである。女性がより確実な避妊法を手に入れること、すなわち妊娠を自律的に行うことができることは、自分の人生設計を自分の意志にもとづいて決定することが可能なことを意味する。現在高校三年である彼女たちは、今後の長い人生の中で様々な岐路に立つだろう。その時どの道を選択するのか、また自分の人生をどのようにコントロールしてゆくのか、それは、自律的な妊娠をすることと不可分な関係にある。

女性がひとりの人間として自立した生き方をしたい、と考える時、避妊の持つ意味は誠に重要である。これが私が避妊の問題を単に技術的な面でのみで扱いたくないと考える理由である。

授業では、生徒たちに避妊の持つこのような側面について学んでゆくことを話す。

そして何人かの生徒に、今後あなたはどんな人生設計を描いているのかと質問する。とりあえず短大に合格する位までしか考えていない生徒も多い。結婚して30歳位までに二人の子供を産みたいと言う生徒。質問した範囲では、せいぜいこの位までという答しか出て位ない。

けれども生徒が「30歳位までに二人の子供を産みたい」と言うことができるのはなぜだろう。そこには計画的な出産・避妊が可能であることを、無意識のうちに思っているからではないか、と話す。そして、このような事が当然のこととして考えられるようになったのは、せいぜい皆さんのお母さんが皆さんを産んだ時代より少し前、一九五〇年位からだのだ。それより前の時代は、おそらく女性が自分の人生を自分で決定するという事は難しかった。その歴史について考えてみようとする。

### ☆自律的妊娠ができなかった時代

まず、自律的妊娠ができなかった時代とは、を考える。女性は妊娠したらすべて生むというのが当然だったのは、なぜなのだろうか。

生徒たちは、即座に「科学や医学が未発達なため、確実な

避妊法がなかったから」と答える。そのために女性が多産であり、また乳児死亡率も高かった。また経済が低成長な江戸時代などでは、子沢山は生活苦につながり、間引きや口べらしとしての娘の身売りが行われていた。生徒たちは、間引きが風習として各地にあったことに驚く。

もうひとつの大切な要因として、性が宗教や儒教に縛られていたことをあげる。ヨーロッパではキリスト教が大きな影響を与えていたように、日本では儒教の考え方から、自由な恋愛や結婚は不義密通とされていた。男尊女卑の考え方から、結婚したら妻は夫に万事従わねばならなかったし、男性には、売春が公認されていた。

このようなあり方のもとに、女性の生き方は縛られ、女性の人生は、子生み子育ての人生だった。

### ☆自律的妊娠ができる時代

現代は自律的妊娠ができる時代である。それはどうして可能になったのだろうか。

生徒たちが気づいた科学や医学の進歩による避妊法のほかに、性が宗教や儒教に縛られなくなったこと、性解放の思想が広まったことをあげる。

戦後、日本でも男女平等が憲法にうたわれ、男女共学や婦人参政権が実施された。けれども男と女は、本当に同権にな

ったのだろうか。建前としては平等をうたっても、社会に出て仕事をする時など、やはり女性より劣っているとされてきた。それは女性が妊娠し、出産する性であるため、男性と平等に仕事ができない。女性の天職は、妊娠、出産、育児にあるとする考え方が依然として根強いためであることは話す。

女性には妊娠・出産する性であるが、このことを理由に、女性を差別してはならない、という考え方がいま世界的に広がっている。

その後国際婦人年、国連婦人の十年「女子差別撤廃条約」が採択され、日本も条約を批准している。この条約は、女性が妊娠・出産することを理由に差別されてはならないことを、明確にうたっている。

現在はまだこの条約が名実共に実行されている、とは言えないが、皆さんが自分の今後の生き方の中で、女性の自立を考え、実行していくことが大切だと思うと話す。

### ☆生徒の感想とその後の問題

以上の授業の後、性をめぐる授業を通して、何を感じたか、授業についてどう思ったのかを生徒に書いてもらった。

一番多い感想は次のような意見である。

「100%完璧で安全な避妊法を、早く誰かが発明すれば良いの

にと思う。ピルは日本でも解禁してもいいと思う」

「中絶しなくてもすむように、完璧な避妊法がうまればいいなあ。安心してできるってことはいいことだ」

次に目につくのは次のような感想である。

「昔の人は性交Ⅱ妊娠・出産でかわいそう。今の時代に生まれて良かった」

「昔は何につけても悲惨な世の中だったようだ。今は女性の立場が昔よりよくなって、良かったと思う」

このような感想を読んでいると、性をめぐる授業の内容を目先の利害損得で受けとめた生徒の多いこと。昔はこんなに悲惨だったけれど、現代は恵まれているとして、女性の歴史を、自分の現在にもつながる問題として考えないことが目立ち、何ともやり切れなかった。

中には、「私は絶対結婚するまで処女は失いたくない!」と大きな字で書く生徒がいた。感想を書け、と言われたから書いた、授業の内容にはほとんど関心がないという気持ち伝わって来るようなものもあった。

四月に私は本校に転勤してきたのだが、本校は各教科がすべて、同一内容同一歩調、定期テストは科目ごとに統一したものを実施することになっている。統一テストを行うためには、違う内容を授業でやるわけにはいかない、という実情があった。

その点からすれば、性をめぐる授業を、こんなに延々とやらす、「新生児の身体的特徴」をやらねばならなかった。生徒たちの書く感想は、この事に対する反発だろうか。

感想の中にひとりだけ

「私はこうした授業を、男子女子も共に受けるべきだと思う」

という生徒がいた。また、梅原さんの次の意見に考えさせられた。

「授業でやった内容は、わかったような気がします。でもまだわからないことだらけです」

これを読んで、授業でやったことは、結局通り一辺で、例えばピルのことひとつを考えても、一体どのように考えたか、良いのか彼女にしてみれば漠然としているのではないか、と思った。私の方は、理路整然と首尾一貫した授業をやったつもりでいても、生徒たちは始めて耳にする言葉や考え方が多く、感想を書けと言われても困ったのではないか。

一方私の方は、性をめぐる授業をこれだけやったのだから当然、色々な意見が出るはずだと考えていた。

結局、梅原さんの感想に強くひかれ、この後の四時間の授業を自主学習にあてた。それは、性をめぐる授業の中で、自分が疑問に思ったこと、より深く知りたいと思ったことを一つ選び、それをテーマに学習する、というものである。そし

てレポートとしてまとめる。また、統一の期末テストのために、その内容も並行してやらねばならない。

次の授業で、自主学習の要領をプリントして説明した。図書室を利用し、始めるように言った後、ひとりの生徒が即座に聞いた。

「先生、この授業と同じことを、他の先生もやるの」

「多分やらないと思う」と私が答えると、

「他の先生と違うことやっても良いの」

と言う。私は再び気が滅入って来た。それは他の先生と違う授業を私がやることに對する単なる不満ではなく、規則が優先し、それからみ出したものを一切認めない、という学校の体制を、そのまま私の授業のやり方に当てはめていたからだ。そして自主学習などという、面倒なことはやりたくないという思いが、よく伝わる言い方だったからだ。

そしてまた、一方では、優生思想に疑問を持ち、障害児について調べる生徒、フェミニズム思想に關する本を読む生徒、日本女性史を調べ、結婚形態をレポートする生徒など、熱心に取り組む生徒のいることも事実である。

けれども、この生徒のように、面倒なことはやりたくないという反応をする生徒、屈折した内面を示す生徒が年々目立つようになってきている。それは、自分の個性を発揮し、伸び伸びと考え、行動するのには、学校という場が余りにも窮

屈になり過ぎたため、彼女たちが高校生らしい純粋さを徐々に失う方が当然かも知れない、とも思う。

性をめぐる授業をやることの難しさと、この「家庭科以前の問題」は、解決できない私の課題である。

(静岡県立大仁高等学校)

## 生活文化の継承と

金子 瑞枝

### 創造をめざして(2)

(宮崎県日南市立東郷小学校)

#### 三、「稲から米へ」(六年)——九月

##### (1)授業に取り組むにあたって

本校のまわりには田畑が広がっている。一学期の間、児童はいつも稲の成育の様子を目にしているわけである。自分の家でたべる分の米は自分の家で作っている家も多い。早期水稲であるため、夏休み中に稲刈りが行われ、手伝いをする児童もいる。しかし、刈り取られた稲からごはんに至るまでの過程を知っている児童は少ない。また、給食の残菜の多さを見ても、米を大切にするという意識は低いように思われる。

そこで、夏休み中に刈り取られた新米を使って、二学期頭初に「稲から米へ」の学習を組み込むことにした。本来ならば「日常の食事」の単元で、ごはんのみそ汁について学習す

る中に組み込みたいところであるが、今年度は諸条件がそろわず、この時期の扱いになった。夏休みに学校キャンプが行われ、飯ごうで炊飯するので、一学期中にごはんについて学習し、炊飯の技術を身につけさせておく必要がある。しかし、一学期のはじめには十分な量のもみ米を入手できない。やむなく「稲から米へ」をあとから扱うことにしたわけである。

一学期に米についての学習をしているので、基本的な知識は持っている。そこで授業にあたっては、はじめからもみ米を渡し、白米にする方法等については教えず自分たちで考えさせ実行させてから、あとでまとめを行った。

##### (2)指導計画(七時間)

##### 。第一次「もみ米の観察」

もみ米を観察し、もみがらを取ったものが玄米、玄米のぬ

(一時間)

か層を取ったものが白米であることを知らせる。また、もみ米を白米にする方法について考えさせる。

第二次「もみ米を白米へ」

(四時間)

家の人に方法を教わり、もみ米を白米にする作業を行う

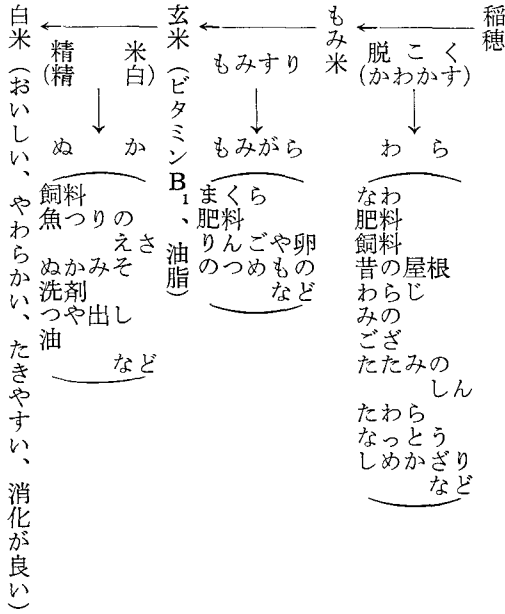
第三次「稲から米への学習のまとめ」

(二時間)

稲から米へのまとめをして、作文を書く

(3) 学習過程

。稲から米へ



〈稲から米へ——もみとぬかを取る方法〉

方 法	結 果
1、一粒ずつ、手でもみを取り、ぬか層をつめでこすり取る	きれいに取れるが、時間がかかりすぎる
2、えんぴつのうしろでつつく	もみはとれるが時間がかかる
3、じょうぎでおさえる	米粒がつぶれた
4、下じきでこする	ぜんぜんとれない
5、手のひらにのせてこすりあわせる	なかなかとれない
6、水でぬらす	水をたくさんすってやわらかくなった。手でもむともみはとれるが、わざわざ乾燥させたもみ米をまたぬらすのはおかしい。米がくさったり、虫がついたりするのではないかな
7、ボールにもみ米を入れて搦でつく	今までの方法よりうまくいくが、米粒がにげやすくて、時間がかかる
8、一升ビンにもみ	よくとれる。ただし米がすくなくいと、



米を入れて捧でつく

米粒がわれてしまうので、米を多くするか、ビールやジュースのビンにした方がよい。ある程度もみがとれたら、ザルにあげて風を送るともみがらだけが飛ぶ。ビンに入れてつく作業と、ザルにあげて、もみがらやぬかを飛ばす作業を何回もくり返していくと精米ができる

#### (4) 反省と今後の課題

何も言わずにただもみ、米だけを渡し、「三週間後にこれを炊いて食べます。それまでに炊ける状態の米にまでしてください。方法は自分たちで考えます。家の人に尋ねてもかまいませんが、手伝ってもらわないように」と言った。実物に手を触れ、自分たちで考えながら作業をしていくという授業展開に、児童は興味・関心を示した。家庭科の時間だけではとても間に合わない、休み時間のたびに交替でびんを持って、捧を上下させている様子が見られた。家庭に持つて帰って作業をしたり、作業の話を家族にしたりする中で、家族から昔の話を聞いたりした児童も多かった。

結局、ほとんどの班が玄米どまりで白米にまですることはできなかったが、それを炊いて食べるのがとてもうれしい様

子だった。そして、どの児童も「あれだけ時間をかけて苦労して、たった一口しかないの」と言っていた。その後に書かせた作文にも、そのことを書いている児童が多かった。

児童が作文に書いている主な内容は次のとおりである。

- ① もみ米が白米になる過程をはじめて知った
- ② はじめてやってみて、昔の人のやり方がわかった
- ③ 時間がかかり苦労したが、いっしょうけんめいにやった
- ④ 食べてみると、苦労のわりに少ししかなく、白米ほどおいしくない

⑤ 昔の人は大変だったのだなとわかった

⑥ 米、ひいては食物を大切にしなければいけないと思った  
現代の日本人の食卓は、実質的に豊かなものであるかどうかは、疑問に思われる点も多いが、見かけ上はあり余るほど豊かになっている。このような時代だからこそ、食べ物を大切にすることや食べ物を選ぶ目を培っていく必要がある。この意味からも、主食である米を教材としてとり上げることは、食生活を考えるいく大きなポイントとなるであろう。

精白過程の学習については、実際に使われていた道具があれば一番良いのだが、入手が困難なので、せめて写真などの資料だけでも入手できるようにしたい。さらに精米所を見学して、今の精米方法と比較してみることが、児童の理解を深めるのに効果があると思われるので今後検討したい。

森 幸枝著 『男女で学ぶ新しい家庭科』 を読んで

日本女子大学家政経済学科 深沢 乃里子

『男女で学ぶ新しい家庭科』では、京都における家庭科男女共修への長く、険しく、常に期待と不安が交錯しつづけていた過程が、実際に男女共修になってからの生徒たちの感想やアンケートなどと共に手にとるようによくわかった。森幸枝氏をはじめとする多くの教師・研究者の莫大な努力と苦勞、そして何度かの挫折への悲しみや、研究成果が認められた喜びは、はかりしれないものがある。家庭科というものの難しさを改めてひしひしと感じた。また、家庭科というものについて悩まされ、考えさせられる著書であった。

森幸枝氏は、家庭科における男女差別は、もちろん家庭における男女差別、ひいては国内的・国際的なそれに発展し、助長することになりかねないということに恐ろしさを感じていたのであろう。家庭科自身が、他教科から受ける差別・べ

つ視も避けられない悲しい事実として、正面から受けとめている。家庭科が、人間としてより人間らしく生活することができるための教科であるのだということが、非常によく伝わってくる。そして、また家庭科は、生活の科学であり、実践的でなければならぬと述べられている。

私はこの著書を通して、また家庭科教育法という授業の全般を通して、家庭科というものに対する見方・考え方・イメージがまったくといっていいほど変わっていった。そしてそれは、京都において、男女共修の家庭科の授業を受けた生徒たちの感想にみられるようなものもある。したがって、今私が、今まで私の中にあった家庭科とは違う家庭科に出会っているような経験を高校時代にすることができた彼らを非常にうらやましいと思う。今までの家庭科は、家庭科でありながら、真の意味での家庭科ではなかったと思われる。出会いというものはおもしろいもので、一度出会ってしまったと、出会う前と全く同じ感覚にはもどれないものである。私にとつ

て、この新しい家庭科（男女共修ということも、その内容も含めて）は、まさに大きな出会いであった。

それまで私は、自分の中で家庭科を差別していたように思う。高校時代、真剣に議論しあえる友達に恵まれた私は、「今は受験のためにこうやって勉強しているが、将来自分のためになるのは家庭科なのではないか」などと話し合ったおぼえがあるが、それも今考えると知識・技術というものだけにとらわれた見方をして言ったのかもしれないと思う。

大学に入ってから、家庭科の教職課程は、少しでも多くのことを自分のものにしたいという気持ちから、教師になるならなにかかわらず選択した。自分が実際に教師の立場に立ってみた模擬授業を含めて、この家庭科教育法の授業で自分の中の何ものかが変化していくのが非常によくわかった。家庭科があつかう範囲の広さに驚き、またそれを自分のものにし、おしえる難しさを痛感した。今、現在の社会において、家庭科がどうあるべきかということは、常々考えさせられるものであった。

家庭科は、単に知識・技術の修得だけのものではなならないし、科学的な側面をもつ人間の生き方の教科なのだと思う。だからこそ、夢は描いても、きれいごとですべてすませることはできない。しっかりと現実をみつめ、逃避せず、地に足をつけ、考え、進んでいかなければならないので

ある。

森幸枝氏は、「はじめに」の冒頭で「やっと、やっと、長い冬のトンネルから抜け出して、この国の家庭科にも明るい春が手のとどくところまでやって来います」と書いている。今、ここでも一人の大学生が、家庭科に対する認識を新たにしている。しかし、春が来るまでの北の風は、まだ強く冷たいはず。したがって、これからの課題こそが十分に大きいものであるといえる。

男女共修という、家庭科における新しい旅立ちが、全国にひろがってゆくことを熱く願ひ、また、私も、できることは、ほんのわずかであるかもしれない力をそそぎたいと切に思った。

このすばらしい出会いが、私の人生に与えた影響は、非常に大きいといえるだろう。

日本女子大学食物学科 田村 静

私が受けた家庭科教育と森先生の家庭科観とは、あまりに違っていた。森先生は家庭科を単なる家庭生活の技術や知識を一方的に教えこむものとはせず、様々な生活課題に対し生徒自らがその学習によって得た知識・理解を技術に活かし、

行動することの出来る力を育てる教科と考え「生活(くらし・いのち)と科学とを具体的・実践的に直結させていくことで生徒の全面発達に資する」ところにその独自性をみている。

しかし、私が今までに思っていた家庭科は、調理や被服を習うものであり、家庭生活のあり方や、家政経済についても学んだはずなのだが、調理や被服の実習しか記憶にない。高校では進学校であつたこともあり、家庭科は息抜きの時間であつて、内職と称して、英語の予習や数学の宿題をやっている生徒もいた。そんなありさまに、若い先生は手を焼いて「家庭科でも単位を落とすことはできるんですから」と脅したこともあつた。そんな家庭科しか知らなかつたので、教師になつたかつた私も家庭科では仕方ないとか、でも、受験に關係ないので気が楽なのではないかとも思つていた。女子だけが家庭科を受けていることにも疑問を感じず、男女共修なんて、考えたこともなかつた。

しかし、同じ家庭科に対し、それでは間違つていると感じ、男女共修と、その立場の確立に力を尽くされた先生方の経験談や家庭科観を聞いて、もう少し真剣に取り組まなければいけないと思つた。

家庭生活は男女で創りあげるものであり、そこに衣食住があり、子どもが生まれ、社会と関わっていく。その家庭が以前は蔑視され家庭科も蔑視されてきたが、本当にくらしを大

切にし、いのちをいとおしむ人間を育てることが必要であり、生活を社会科学的視点からとらえるのが家庭科であるとしている。

そのために男女共修の家庭科の中で、特に食と性に関わる分野に力を入れ、実習と班学習を重視している。今まで、調理実習は、作り方を覚えるためのものとしか考えていなかったが、「調理実習を生活課題、例えば、物価や公害などと結びつけてやりたい」という先生の考えに、私なら食文化や栄養障害に関連してやりたいなどと、あれこれ思つた。そしてまた、それがチームワークを大切にし、自分が働いて作り出す喜びや面白さを知る意義もあることを改めて感じた。

また、現在食生活の背後にある問題は様々で、深刻化しているの、これから先、生活の中心になる自分も含めた青少年が、深く考えてみる必要性を感じる。そのために班学習をして、個人個人に、相互の協力や連帯の力を借りて実感として納得させたいとする先生の考え方に賛同する。

保育でもそのことは充分いえる。自分は今現在、子どもの立場にあるが、いざれ近い将来親になる時が来るのだから、今の子どものおかれている状況を把握し、本当に一人一人の子どもの健全な成長を保障する立場で、責任が持てる人間に、豊かな人間観をもつ人間になるように、男女共に保育を学ばせる必要があると思う。母性保護は女性の保護ではない

という話は、どういふことなのかよくわからなかったが、この本を読んで理解した。

しかし、自主性と連帯性のない生徒の一人である私は、班学習が、それほど効果のあるものなのか、どうしても疑ってしまう。先生が嘆かれる事柄は、自分の身にも覚えがあり耳が痛い。しかし、家庭生活に根ざす諸問題が次第に深刻化してきている現在、自分が教師であればその問題について生徒に直面してもらいたい。この矛盾が解けなければ、教師としてやっていくことはできないだろうと思う。

模擬授業では、やはり高校生に考えてほしい問題がたくさんあるため、話し合い中心の授業になった。その時は、意見もたくさん言ってくれて成功のように見えたが、実際の高校生が素直にそれだけ答えを返してくれるものなのか、私たちが考えるようにその問題を受けとめてくれるのか不安が残っている。その時もうまくいかなかったのだが、さらにまとめるのが難しくなるだろう。生徒の意見を超える意見をもつことが必要だという先生のお話もあったが、それには自分自身が社会をよく知る必要があると思う。取材活動も活発で、生の声もたくさん取り上げている新聞やテレビに、日頃もつと耳を傾け、学びたい。

高校生たちは、私たち以上に生活実感がないかもしれないが、社会に対する不安と興味はもっているはずだと思う。そ

れは、話し合いの中ですぐに現れることはないかもしれないが、まずは、耳を傾けさせたいと思う。そうした知的関心を満足させることから、生活について考えていけたらと、思う。自分のもつ知識・経験をすべて子どもたちの成長の踏台にすることができれば、素晴らしいだろう。

#### 日本女子大学食物学科 高木 みゆき

戦後の民主教育と言われる中で、家庭科が徐々に非民主化していく過程に、森先生は現場の教師として疑問を持ち、そして立ち向かわれた。その実践は、様々な難関があったにもかかわらず、一家庭科教師としての力を上回るほどのものであると思う。そして、そういった実践が成し得たのは、先生の中に、体系づけられた“観”が確立していたからであるのは言うまでもない。

家庭科が当初の民主的な家庭を建設するための教科から、女子の家事処理能力育成の教科に変貌するにあたって、個人―家庭―社会というつながりがあるやふやになってきた。家事の担い手の女子は、個人―家庭のつながりを、社会を支える男子は、個人―社会のつながりを重視することを目指しているかのようなのである。そこでは、男女が共に家庭を創り上げて

いくことなど望めない。そこで、森先生は、男女共修を進める上でも、男女が各々家庭と社会に対して認識を深め、関わっていくことの必要性を強調された。生活を科学的に認識し、それに基づく実践力を養うことは教科論としても挙げられているが、暮らしや生命をいとおしむという、人間が生きていく上で最も重要な精神によるものとしている。これは、男女関係なく、人が人として生きていく姿勢とはいかなるものか、前途有望な若者たちに、問いかけ、より人間らしい生き方をするためにその方向づけの手助けをすることが、家庭科には可能であることを示している。

高校生という感受性豊かで大人への一歩手前という時期に、暮らしと社会について学び、生活能力向上のための技術を体験学習することは、これから先の人生にとって不可欠である。そのことは、森先生の教室での体験からもうかがえる。そして、受験勉強優先の高校の学習の中で、人間性を養うための学習ができ、その方法としても、生徒一人ひとりが関わることでできる班学習が可能かつ有効であることを、理論だけでなく実践からも主張されている。

生活と科学の結合という時、社会科学の認識があまり強調されていなかった従来の家庭科では、広い目で家庭を見ることはできない。これは、実際に家庭科を受けた私自身も強く感じる。先生が授業の中で取り扱われた「婦人と職業」や

「女性としての生き方」は、高校生にとって重要な問題である。その問題を見過ごして、後になって後悔する女性はいくつかないだろう。

大学に進むことのできた者は、ある程度自分の人生について考える時間がある。しかし、高校からすぐに職場に出るような女子生徒たちにはそんな猶予はない。それ故、家庭科でその事を考えるのはとても意義深いと思う。模擬授業をやる段階では、私自身の力の及ばないこともあり、自分の専門分野を取り扱うことに甘んじてしまった。しかし、家庭科で本当に大切なのは、家族や人間に対して理解を深めることだと思う。

自分が模擬授業をし、更に課題で森先生の本を読んで、家庭科というのは実に奥が深いのかかわらず、自分が無知で、力不足なのを痛感した。食物や被服を、断片的に学び教えるだけでは、家庭科は成り立たない。社会現象を捉え、それと家庭がどう関わっているか、そして個人はどうすべきか、そこまで考える時、今までのような家庭科に対する考え方ではいけないとつくづく感じた。

小学校・中学校と、私は裁縫や料理が得意で、その家庭科が好きだと思ってきた。高校に行ってから、好きとか嫌いとかいう感情さえも持たなかったが、何しろ、実技教科として家庭科を見てきた。その事に何にも疑問を感じなかったの

は、恐らく幼かったからだろう。しかし、よく考えてみると、裁縫や料理は、家庭科において、重要な一部分ではあるけれども、それが全てでは決してないのである。一つの細胞として、例えば料理があったとする。それを含む、食物の分野という組織は、他の組織と相互関係し合いながら、一つの家庭を成立させているのだった。従って、家庭科とは、実に総合的な教科であること、改めてその難しさと重要性を認識した。

例えば、女性の生き方についてや、家族の問題に対しては、自分に確信がなければ、生徒たちを納得させることはできない。今の私はまだ、その確信を得ていない。幼稚化した大学生の一人として恥ずかしく思う。しかし、徐々にものが見えるようになってきた。

家庭科は、受験体制の中で軽視される傾向にあるが、一方受験に左右されないといった利点を生かして、五感に働きかける授業ができると思う。講義だけでは、生徒たちがついてきてくれないのは、自分が生徒であった時を思い返せばすぐにわかることだ。体の五感全てを使って、「生きる」ことについて学習する。これが家庭科の授業であると思う。そして、それを可能にするためにも、私たちは今現在を充実させ、存分に生きなければならない。



## 編集室からあなたに

### ◆あなたに訴える（2）

東久留米の読者会で、福田三津夫さんが言われました。

「地域に、鎌田慧さんと呼んで講演会を開いたことがきっかけで、“清瀬の教育を考える会”が生まれた。少人数だが、テーマを掲げて話し合っている。そんな折、Weのバックナンバーを取り出して、もう一度あの意見を読んでおこうと準備したりする。Weはこういう時、とても役立つ」  
たくさんのすてきな意見が出たいい会でしたが、Weの生かし方という意味で、私は福田さんのこの言葉を、大変うれしく聞きました。「ツツドク」という方も、せめて、テーマを心の隅にとどめておいて下されば

必ず再度読む機会があるはずです。

昨夜、登校拒否の子どもたちの居場所“東京シュール”を訪ねました。「人間」80分の授業をよく聞いて、鋭い反応を示す感受性豊かな10代の少年少女たち。この子たちに拒否された学校とは何か？

教職を捨て、彼らの居場所を作った奥地さんの勇氣とエネルギーはどこから生まれたか？

昼間は消費者運動の中でできた石けん工場見学に。夏は北海道で20日間の合宿。部屋には糸繰り機や小さな織機も。

若々しい青年やママさんが奥地さんを支えているとはいえ、綿々たる訴えを聞き、相談に乗り、みなを魅きつける企画を立て、お金の心配をするのは彼女です。

言霊の幸ふ国と言いますが、人が志を立て、やむにやまれずすることは、もっと貴い。せめてこうした活動の支え手の広がらんことを。  
(半田)

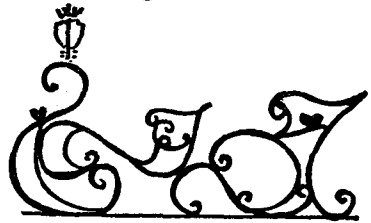
# 教育のなかの

## 心理学

### 「学習」まなぶ

#### ということ (2)

小沢 牧子



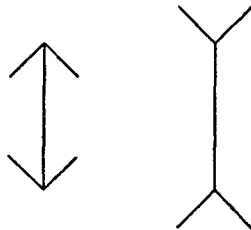
「わかる」とはよいことか？

「学校の勉強、よくわかる？」「うん、わかるよ」というような会話が、親子のあいだにしばしば交わされている。わかることはよいこと、わかれば安心、という通念は、ほとんど疑いのないものとしてひとびとの中に浸みとおっている。とくに、教える立場にある教師たちはそうである。「わかるよろこび！」「いきいき学び、たのしくわからせるために」「わかった！と叫ぶ子どもの眼の輝き」などなどの言葉に酔いかげんの雰囲気に出会うことも少なくない。「わからせる」ことを至上課題として、熱っぽくそれを実践する教師のひとびとに、「でも、わかるってなに？」「学校の勉強がわかるって、どういうこと？」などとしらけた問いを投げかけるこ

とがためらわれるほど、「わかること」「善」の思いこみは、激しくそして深く根づいている。

学習「まなぶ」とは何かというテーマを考えようとするとき、まず、わかるとは何か、どのような営みをさしてわかるかといっているのかを問わなければならない。私の考えを先に言ってしまうなら、学校の課題をわかるということは、私たちをとりまく世界における事象「ものごとの、あるひとつの側面がみえるようになることであり、同時に他の側面がみえなくなりわからなくなることなのである。わかることはよいことだというのは、だから、私たちをある意味で欺いている呪文であり、その呪文に酔うことは、実は

ミュラー・リヤーの錯視 錯視図としては、構造が単純であるが、錯視研究でもっとも取り上げられる。矢羽根が外開きか内開きかによって、主軸の長さが異なって知覚される。





考えものなのである。

「ほんとうのこと」は一つしかないのか

学ぶこと、わかることはふたつの顔がある、と前号で書いた。前頁の図を見ながらこのことを考えてみよう。これはよく知られている、ミューラー・リヤーの図形である。どこかで一度くらいは見たことのある人が多いだろう。錯視とよばれる知覚現象を示す一例である。二つの図形において、主軸の長さは同じなのだが、矢羽根のつき方によって、右図の軸は長く、左は短く見えるのである。ここで大事なものは、何が「ほんとう」なのかということだ。「ほんとうは軸の長さが同じなのに、眼に惑わされて（錯覚して）同じでないように見える」のか、それとも「ほんとうは違ってみえる図形なのに、ものさしに惑わされて軸の長さが同じだとする」のか。答はもちろん前者であるとされている。「ものさしで測ってごらん、ほら、ほんとうは同じ長さなんだよ。わかつたでしょう」と、私たち大人は子どもに教える。つまり、ものさしという「客観的」な道具を正当なものとして、私たちの肉体がとらえる見え方を誤ったもの惑わされたものとするのだ。それはすなわち、客観的・科学的なもののごとくとらえ方を「上」に置き、肉体的・感覚的なとらえ方を「下」に位置させて、事象のふたつの姿に上下関係をつけることなのである。

わかることは捨てること

しかし、ここで子どものいろいろな反応に出会う。ある子どもは、「ああわかった。だからものさしって大事なんだね」と、ものさしにすぐ関心をもち、目盛りのしくみを理解し、ものさしの思考をさつさと身体のかなにとり入れる。このタイプの子どもは、必ず学校の勉強の出来がいい。点数のとれる、成績のいい子どもである。ところが別の子どもは、「でもやっぱりちがって見えるよ」と、自分の見えかたに関心をもち、そこにこだわる。ものさしの眼があるということとはわかったが、あんまり面白そうなものでもない。それよりこの二つは違うものだ、という自分の眼を捨てたがらないのである。このタイプの子どもは、学校では「わかりが悪く」「のみこみが遅くて」「成績が悪い」という話になるのだ。

事象のとらえ方の二つの姿は、どちらもひとしく「ほんとう」である。しかしその二つの「ほんとう」を平らに並べないで、「真のほんとう」と「にせのほんとう」に分けて上下関係をつけたところに、近代の学びの抑圧がはじまった。つまり人間の生き方の息苦しさははじまったと言ってもよい。ひとつが「わかる」ことは、もうひとつが「わからなくなる」ことだというのは、このことと関係している。

今回は有名な心理学者、J・ピアジェの説をひきながら、さらに考え進めていこう。

# 四国中学校で

仲野暢子



## 事件

「アッおまえだけ黒く焼けてるなんてズルイ!」「センセエアタシしっかり受験生しちゃった!これは事件デース」にぎやかな休み明けに、いつもちよつと大人っぽい雰囲気の淳一の顔色に気付かなかつた。

翌々朝「昨夜十二時頃史郎の父親から電話があつて、息子が血だらけで帰つて来た。聞いても何も言わないので学校で調べてほしい。顔が變形しているが、他に別状はないので、医者に見せてから学校へ寄越す」という話が担任からあつた。このところ学校自体もまあ静かだったし、特にこの学年はのんびり、ややしまりなく暮らしていたので、突然のショックだった。各クラス聞いてみたが、はかばかしい情報がない。そのうちに本人が来て、「どこかの中学生に電話で呼び出されて大塚駅へ一人で行ったら、相手は大勢で、へんな知らない公園へ自転車に乗つけてつれて行かれて、下っ端の一

人とタイマン(一対一のケンカ)張らされた。勝ちそうになつたら、大きくて強いのが二人でとびかかつてきて、めっちゃめにやられた」ということだ。

公園の場所の見当から、I中へ問い合わせで写真で相手がわかつた。その頃淳一が真っ青な顔をして思い詰めたように教室から飛び出して来た。大至急の話があると言う。「実は今度の事件に大きなかわり合いがあるのだけれど、ホントのことをいうと仕返しが……」と声までかすれている。

——とにかく話してみて。もし必要なら秘密は守る。あと、傷害事件になるかもしれないので、警察へは今朝学校から知らせたし、相手ももうわかりました。

「えっ? じゃあ僕たちがいま話しても僕たちのせいで知れるんじゃないんですね」

彼の話によると、夏休み最後の日にサンシャインの玩具屋さんへY、Hと三人で行つた。帰りに中学生らしい四人組に物陰に連れ込まれて二、三発殴られ、学校の名前や自分たちの住所氏名、電話番号まで言わされた。そして番長はいないと言うと、一番強いのは誰かと聞かれて、結局史郎の名前を言つてしまった。「あとで電話番号を聞くから教えろ、先公やマッポにチクルとタダではすまないゾ」と凄まれた。

三人で二日間あれこれ悩んだが、もし言い付けてバレたら何をされるかもわからないと脅えているうちに、Yの家に彼

らから電話がかかって、史郎の電話番号を教えろと言う。

「オマエラガイワナクテモ、ホカカラシラベレバワカルンダ。オシエナケレバ、オマエラノマエバヲゼンブオツカイテモイインダヨ。チクツタラヒヲツケルゾ」と脅され番号を教えた。

やっぱり誰かに言おうとしたけど三人の意見がまとまらない。ハジメは史郎に警告だけでもしようと姉に頼んで「不良中学生が狙っているから気をつけるように」と匿名電話をかけてもらった。そして昨夜史郎が呼び出されて大塚駅で彼ら八人とにらみ合っている所へ、Yが偶々講道館の帰りで通りかかった。連中に見付けられ、一緒に連れて行かれて、一部始終を見せつけられた。向こうの当て馬が史郎にやられそうになると、ボスら二人でみぞおちを突いて、うずくまったところを蹴ったり、顔を靴で踏み付けてコンクリートにこすりつけたりして血がいつぱい出た。やっと解放されたので、Yが史郎の家の近くまで送って行った。

相手のキタナイやり方に煮えくり返る思いと同時に、三人のなんという不甲斐なさ！ 知恵のない対応、その結果が史郎のあの顔だと思ふと情けなかった。I中から「三年生の八人が関係していることがはっきりしたので、連れてお詫びに行きたい」との電話。本人は「病院へ診断書を取りに行くし、もう顔も見たくない」ということで、父親に連絡すると、「事実がはっきりして、二度とこんなことを起こさないな

ら、あえて今告発するつもりはない」。I中から先生四人に連れられて到着した一団は、体は大きいが見た目はそれほど変わっているわけではない。担任と生活指導係で立ち合っ

てかなり厳しい話し合いをした。

史郎は「電話でシツコク喧嘩を売られたので、二人だというから会って話をつけようと思って行ったら、大勢いてどうしようもなかった」と言った。高い月謝だった。

恐いのは十分わかるけど、三人にはもう一度考えてほしかった。その結果、彼ら自身の体験と反省がみんなの役に立てばと、勇気を出して書いてみた。淳一は「今まで不良と接触したことがなかったので、どうしていいかわからなくて、まず自分たちの名前を真つ正直に答えてしまった。それで史郎君の電話を聞かれると、『元々向こうから史郎の名前を出して聞いてきた』『オレたちが言わなくても誰かがまた聞かれるだろう』と今考えると我が身かわいさだけの言い訳だ。史郎君の変わり果てた顔を見たとき本当に恥ずかし、自分をのろってしまった。僕たちが史郎君に謝った時『お前らはもう関係ないんだよ。終わったことなんだから』と彼は言うてくれた。僕たちはこんな良い友だちを売ったんだ。いつそのことうんと殴ってほしかった」と涙ながら言った。

実際は何ができるのか、みんながもう少し賢くなれるようあちこちで考え合っているけれど、実行は簡単ではない。

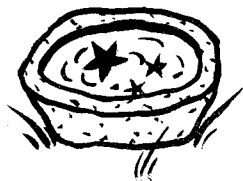
はなにつき

## もみじ 徒然草

藤尾知子

「神無月の比、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里にたづね入る事侍りしに、遙かなる昔の細道ふみわけて、心細くすみなしたる庵あり、木の葉に埋もるる懸樋の雪ならでは、露おとなふものなし。閑伽棚に、菊、紅葉など折り散らしたる、さすがにすむ人あればなるべし、かくてもあられるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に大きな柑子の木の、枝もたわむになりたるが、まはりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覚えしか。」

神無月は陰暦の十月、今の十一月の末、もみじの美しい時である。私はもみじが大好きだ。年も終わりに近づいて、美しい紅葉を見ないでいると、何か仕事をやり残しているようで落ち着かず、かなりの無理をしてでも紅葉狩りに行くことにしている。京都にはもみじの名所が多い。兼好は何の用があったのか秋を楽しみながら淋しい細道を歩いてた。すると仏に仕えながら心静かに住んでいるらしい人の庵があった。御供えのための菊や紅葉が無造作に閑伽棚に置かれてある。そして感極まった兼好は言う。「かくてもあられるよ（こんなにしても住んでいられ



るんだなあ）。ここからが兼好らしい所である。そこではたと庭に鈴なりのみかんの木を見つける。その木は人影も見えぬ山中に植わっているのにもかかわらず柵がめぐらしてある。「少しことさめて」などと言っているが、大いにかっかりして兼好は言う。「この木なからましかば（よからまし）。」だかどうしてない方がいいのか、ある方がいいに決まっている、と私は思ってしまう。みかんは、花も実も楽しみな木だ、なければよいのは木ではなくて柵である。しかし、あえて柵と言わなかったのは、もし兼好の家に枝もたわむに実ったみかんの木があったならば、彼自身も柵を作りたい欲望にかられたかも知れないという思いがあったからではないだろうか。だから余計にこの柵が気に入らない。それならば庵の主は兼好のためにどうすればよかったのか。私なりに考えたことは、まず柵をとりはずす、次に木の下に「御自由に御取り下さい」と書いた札でも掛けておけば、兼好はきっと満足して、遠慮なくぞんぶんに賞味させていただき、最高に幸せな気分になって通って行ったような気がするのである。（カット・宮永由美子）

## アメリカの共働き夫婦は今 ②フェミニスト・メソドロジー

國信潤子

アメリカの共働き夫婦の事例研究を行うとき、私が注目し、かつ自分でもこの方法で分析したいと考えていたのが、フェミニスト・メソドロジーである。事例研究の内容に入る前に、この方法論について簡単に説明してみたい。

フェミニズムということばは今ではかなり浸透してきている。その意味は簡単にいうと、「歴史的にも、また今日の社会にも、女と男の間には社会的差別があるということ」を認識し、この状況を改めてゆこうとする思想、及びそれに基づく運動」というものである。これは今日社会教育・大学教育に浸透してきている女性学の根本思想でもある。

この思想が今、社会科学の分野で一つの方法論を創出しつつある。つまり従来の実証主義的な方法論が常に男性の視点を基準としてきたことへの異議申し立てがその背景にはある。女性の視点に立った事実の掘り起こしが必要である。そして、この女性の視点とはつまりフェミニズムの視点に立つことである。女が一個の独立した個人として認められていない社会にあつて、女に関する事実の掘り起こしをすることは容易ではない。政治・経済の変遷のみを追っていたのでは全く見えてこない女の生活、女にとっての事件、女の意識がある。女は語りはしなないが感じてきた事実をどう掘り起こすか。これらは従来の統計学的手法からはこぼれ落ちる。さらに事例的研究手法をとつても、既存の事例的研究にはいくつかの限界がある。

その限界の第一は、主―客の分断である。つまり、調査する側と調査される側の関係を、主体―客体という形で二分化してしまふ点である。つまり、知る側―これは多くの場合男の研究対象のだが―が客観的にみるため、という口実のもとに、研究対象としての人間を、最大限客体化してゆく。よいラポール（対人関係）を作ることの重要性を指摘しつつ、対象を客体化してゆくという一種自己矛盾的な心理作業を従来の事例研究者たちはしてきた。参加観察などの方法は最大限、調査者が調査対象者の生活に入り込むことを主旨としつ

つも、調査者はあくまで客観的分析のための他者性を保持することが必要とされてきた。フェミニスト・メソドロジーはこのような方法を批判する。女の事実の掘り起こし、それも日常生活の詳細にわたる事実を女が語るとき、そこには極めて私事性の高い、通常では人に語りたくない部分も含まれてくる。そのとき、フェミニストである調査者は、自らの内面の開示によってこの私事性を共有してゆこうとする。あるいは先に自らの悩みを調査対象者に伝え意識の共有をしてゆく。これは客観性確保のための被調査者の対象化とは全く逆の過程である。

第二にハード・データをより重要な価値のある情報とする従来の方法では、差別される側の論理や意識や感覚は汲みとれない。ハード・データとはつまり数値であり、それも統計的処理に耐える大量な数のあることがポイントになる。数の多い方が真なり、とするやり方自体に問題がある。しかし統計処理によってこぼれ落ちる個々の事例に入り込み、その内部の事情を明らかにしてゆく、これがソフト・データであり、フェミニスト・メソドロジーはこれを重要視する。数字では表現されない多くの事実を、被調査者に密着した形で記述してゆくことが大切であると考える。

第三に、仮説検証型の方法の限界が、男性研究者による女性についての調査には明らかにある。つまり男の視点で立て

られた仮説を検証すべくいかに調査を重ねたとしても、女性である被調査者は、決して本音をはかないし、仮説に合った対応しきしない。つまりここに女の生き方が常に他者からの期待（つまり男からの期待）を内面化することによってつくられてきてしまったという差別的な社会背景がみえてくる。そうした状況下で、女が突然、主体的な意志をもち自らのことばで語り出すなどということはあり得ないことなのだ。フェミニスト研究者はこの女の主体性の欠如が形成されてきてしまった歴史的・社会的背景を理解している。それ故に、あえて被調査者を前にして、主―客を分断し、仮説検証を目的とするような乱暴なこととはしない。むしろそれより、調査者―被調査者の二分化をなくし、意識の同調化をはかることにより、被調査者が自らを語ろうとするようし向けてゆく。自己を語ること、しかも、自分のことばで語り自分の内面を相手にわかるように説明すること、この技術を被調査者が獲得すれば、それが最大の仮説になるはずだ。フェミニスト・メソドロジーは参加観察的手法であるが、さらに調査者が女の置かれた社会的・私的状況を同じ立場に立ってみていることが必要だ。目の高さを共有することである。

このようにフェミニスト・メソドロジーを社会調査に用いるには、一つには差別される側に調査者が真に立てているか、という問いが調査者自身に投げかけられる。多様化する差別

の中でも、その中の一つ、しかも重要な一つ、つまり人類の半分がもう半分を差別するという性差別に対して、差別される側に立ち得るか否かが問われることになる。産む性をかかえる女がそれ故に社会・文化的に劣位に置かれる、という現代社会―歴史的にも同様だが―を告発すること、これがフェミニスト・メソドロジーの根拠となり、力となっている。

共働き夫婦への面接は、アメリカの事例では、アメリカ人が調査者となった。黒人夫婦には黒人の女性が調査にあたった。アメリカという複雑な人種・民族の力関係のある社会にあつて、調査者が常に白人であることも問題である。

私が分析に参加したこの調査の企画者はカリフォルニア大学バークレー校社会学部教授アーリー・ホクシールドさんである。一九八二年から八四年までの二年間、私はアーリーの著作、活動、家族、生育歴と彼女の全体像にふれ、この一人のフェミニスト社会学者の研究方法・意識に強い共感を抱いた。私は以前から日本で、男性、及び女性の性別役割意識の変容をわずかずつ事例調査していた。アーリーの調査に出遇い、「これだ!」と思った。女と男をペアで詳細に面接調査し、しかも、フェミニスト・メソドロジーを用いること、これによってみえてくるものこそ、私が捜し求めていたものだと思つた。調査項目は六十数項目に及び、そのほとんどが被調査者の自由な語りによって答えられるものである。そのため面接時

間は三時間から六時間、しかも二、三回にわたるということとはよくある。この面接を全てテープにとり、聞き書きとしてタイプしてゆく、そのテープや資料は膨大である。

事例調査データの分析は客観とは程遠い。調査者として被調査者に直接会つた人が最も多くの情報を得ることができる。その人の話し方、間のとり方、表情、ジェスチャー、視線の位置、指の動き、息づかい等々、人と人が対面するときにはこれらの全てが情報源となる。テープを聞くと、これも書類を読むだけとはまた異なつた情報が得られる。声の高低、アクセントのつけ方、口ごもる様子、消え入るような語尾、あるいは怒りをこめた調子などである。

アメリカの事例について私のふれたのはテープとそれを記録した英文資料である。特に日本にもち帰りじっくり読み込んだのはタイプされた聞き書きである。米語のスラング、幼児語等、日本語にすると全くニュアンスの異なるものも多い。こうした制約を考慮に入れたつても、この事例研究に私が夢中になつたのは、事実は小説より奇なりのことば通り、その聞き書きの中から浮き彫りにされる共働き夫婦の女性像、男性像が生々しく、しかもジェンダー・コンフリクト―女であること、男であることと、女らしくあること、男らしくあることとの葛藤―が赤裸々にみえたからである。

次回から個々の事例を紹介してゆきたい。



## Weになんでも言おうなんでも聞こう



◆女性民教審の増刊号、大変感激させられながら、大変うれしく拝読いたしました。

代表の俵萌子さんの本『おんな三代』も、共感点が多く、うれしく一息に読んでしまいました。二〇年近く前の豊中一中に私が在職中、PTAの関係で、俵萌子さんのお母様と親しく、萌子さんのことをうかがったことも思い出していました。

女性民教審の存在は、女性史や教育史にも貴重な大きな足跡を、はっきりと残すことをごさいますよう。

臨教審の専門家？ よりも、深くて真剣で女性民教審がよくこなすにまで!! と、六月の「最終教育改革提言」には、びっくりさせられました。さすが、と心強さ、女性の真価を知らされました。太郎次郎社の「ひと」臨時増刊のことも、お教えいただきましたので早速書店で求めました。

俵さんの「天下国家の臨教審を向こうに回して」には、本当にここまでこられる道程は並々ではなかったことと、申しわけない気持ちにさせられました。でも、本当の勝負はこれ

からですね。何よりの力強い足場が与えられました。ありがたいことです。

去る七月二十四日、飯田さん、福本さん、藤本さん、岩瀬さん、宮崎さんたち、家庭科の男女共修をすすめる会関西グループの有志十名余りが、府会議員お二人立ち合いのもとで、府教委指導課の担当者二名との話し合いを持ちました。

文部省が出すのを待って、それからすればよい。「すべて文部省待ち」を強調され、家庭科の指導主事は姿を見せずでした。

七日、臨教審の最終答申が出ました。臨教審委員に、女性が三名というの納得し難いですが、人選ももっとオープンに、民主的配置がほしく、ここが一番「教育」の根本、理想ではないか、と思います。教育は、時の政治、政党に左右されず、理想を追求し、政治をも善導していく力を発揮していきたいものと願います。教育は、現在のように、政治のしもべ的存在ではなく、独立した存在であるべきですね。

(高槻 楠崎ルリコ)

◆フォーラムの地元実行委員として、……ひとことでは言えないけれど、強いて言えばオシロシナー！（ありがとう）という気持ちでいっぱいです。

今年のテーマは、とてもいいです。でもいいことばかりだったかなーとも思います。地方で生きる苦しさとか、そういうこと、私たち本当は気づいていないのでしょうか？

実行委員として参加したことは、今までのお客さんの関わりとは全く違った収穫がありました。それから子ども活動がすごくよかったです。それから子ども活動がすごくよかったです。Weで育った子どもたちがいづれWeを引っ張る人々になった時、とってもステキな実りがあるだろうな、本当にWeは大きな広い家族だなーと思いました。

いつも一緒に活動している仲間たちが、精いっぱい山形のよさを味わってもらおうと動いている様子に、とても美しいなあ、と感動しました。「もっと大地に根をおろして、しっかりと生きろ！」と、百二十名近い参加者のみなさんが私に教えてくれたような気がします。慶子先生や星さんのお話もよかったです。



ジンと心に染みしました。しかし、いつものように、じつくりと三日間を通して語り合うことができなくて、というふうに感じられた方もいらつしやったのではないでしようか。

二日間をおいて、羽黒山で報告をかねた学習会もやりました。Weの精神を生かして「○先生」はやめよう！ なんていう雰囲気でも、しかも、これからの私たちの研究課題として、地域の生活文化を掘り起こし、科学的法則性、文化的価値を見出し、教材化してゆく。そういう中身の研究を、汗を流して歩きまわったり、地域の人々に学んだりしてゆこう、ということ話を合いました。

これからも、微力ながらもWeの一員として何かやりたいと思っています。

本当にオショシナー。(酒田 大場広子)  
◆初めてフォーラムに参加しました。山形の豊かさって、初めわけがわかんなかったのですが、参加して納得。そして地域に根ざして生きることの強さを感じました。地方にまいてもどって四年、都会の豊かさについてあれこれをいだいて生きてきた四年間のようでした。それがふっきれるとまではいかないのですが、私の生きている八女、筑後地方(福岡県)にも、同じような豊かさが、ああ、たく

さんあるんだと、このフォーラムに参加することで、再認識をしました。自分が気づいていないだけだったんだなあ……と、そんな心に余裕のない生活をしていて自分がわかっただけでも収穫。帰ったら、教材にできるものよりと、……またがんばろうと思います。

(福岡 隅本智子)

◆フォーラムのテーマは、家庭科が変わろうとしている(変わらなければならない)今、家庭科の中で追求すべき豊かさ、人間を大切にするくらしをどこからつくり出すのか……の示唆があったと思うのです。どんな家庭科をつくらなければならないかを考える糸口が広がったと思います。

出かける前に星氏の『農からの発想』という本を読んで、実に感銘と示唆を得ました。農を切り捨てる発想が、生活を大切にしないう資本至上主義であると同様、家庭科を軽視する発想は、人間軽視と根は一つであると思うのです。星さんの講演は、それがいかにまちがっているかをしみにみと語られていました。「農からの発想」に『育てることの意味』という副題がついていましたが、この本は「家庭科からの発想」と言いなおしてもよいほどに、家庭科のめざすものと重なるところが多

くありました。「人間のいのちと健康がなによりも優先し、生きている実在感が充てんするような社会が建設されなければならない。競争と支配によって維持される秩序でなしに共存と連帯によって結ばれた自由な関係で追求されねばならない」(前述の書より)

(埼玉 柴田・間瀬・脇)

◆今春四月、十数年続けてきた高校勤務からろう学校へと(強制)配転され、希望で週一回(50分)の料理クラブ担当となりました。即席ラーメンを作った(?)経験ぐらいしかない私ですが、ママグトふうの料理の中にも感動する知恵や手順や雰囲気があつて、楽しく時間を過ごしています。

今夏は、県内の家庭科教員(すなわち女教師)で構成する「家庭科部会研修会」に参加を希望、管理職にも「出張」扱いをさせ、(1)庖丁の研ぎ方と基本的説明 (2)魚三ノ四種類の基本的おろし方の実習の研修をすることになりました。当初教科外の教員(私は英語)だから駄目、というタイドも撤回(同僚の家庭科教師の抗議を受けて)させての参加になります。が、楽しみにしています。

(福岡 安部宣人)

# ぼくのソーニヤ (1)

「人間は長細い一本のチューブに過ぎない」と喝破した人物がいたように思うのですが、思い出せません。もしかしたらこの私が例によっていつのまにかつくりだしたデタラメという気がしないでもありませんが、それはとにかく、私の身体を一本のチューブに見立てると、その真中あたりの大部分は人並みはずれて丈夫にできていてどんな暴飲暴食にも長年耐えてきましたが、その両端の入口と出口の部分の造りだけではどうも神様が手抜き工事をしたらしく、その部位をめぐるといくつものトラブルとその補修のために痛い思いや苦しい思いを何度かくりかえしてきました。

子どものころはすぐに扁桃腺をはらし、大学生のときはジフテリアにやられて咽喉に熱い嵐が滞留しているかのようなつらい思いをし、三十過ぎの冬には壊疽性口内炎という名前からしておそろしげなやつにとりつかれ、口内全体がただれるというような目にあいまして。ジフテリアのとき、隔離された病院の医者が「君のように頑健な若者が小児のかかるジフテリアにやられるとはめずらしい。ぜひ学会に発表させてもらいます」と感心したほどですから、よっぽどそのあたりの造りが粗末なのでしょう。入口だけでなく出口のほ

うもまた幼児の脱肛、三度にわたる痔の手術といったぐあいにさんざんな目にあってきました。

高校の二年の終わりだったか、三年になってからか、とにかく小ラスコーリニコフを気取っていたころ、排便時に鋭い痛みが肛門を走るようになりました。高尚な世界苦を苦しんでいるはずの若き精神の貴族が、こともあろうに痔疾などというもののにとらえられるとは。そう慨嘆してみても痛みは日ましにつのり、授業中もまともに座ってられないありさま。かといって医者に行くのもプライドが許さない。懊悩しつつ道を行けば、肛門科の看板ばかりがやけに目につく。ある日、あまりの痛みに学校を早退し、都電の無慈悲な震動を脂汗を流してこらえつつようやくのことで電車を降り、地下道をくぐって池袋西口の通りを這うようにして家に向かいましたが、とてももちそうにありません。もはやこれまでと観念し、応急処置をと、立教大学の近くのかねて目をつけてあったY肛門医院に飛び込みました。

午後もまだ早く、一人の患者もいません。ほっとしながら案内を頼むと、糊のきいた真白な服の看護婦が奥から出てきて「どうぞおあがりください」と丁寧な口調でいいます。自分より年下らしい高校生くらいの小柄な少女です。ちよつとどきつとしましたが、「痛みが激しくてたまりません。みていただきたいんですが」と来意をつげると、「いま昼の休みですが、先生にうかがってみますので、しばらくお待ちください」と、色白な、マシユマロみたいな頬をした少女はあくまでも丁寧です。静かにスリッパの音をたてながらマシユマロさんは奥にはいっていきましたが、待つほどもなくやはり小柄な初老の医師が楊枝を使いながら、「入りなさい」と診察室の

ドアをあけてくれました。

半白の髪をきちんと刈りこんだ温厚な紳士とみえたこの医者が、しかし、大変乱暴な人で、「君、ズボンをおろして、その台の上に乗リたまえ」と少女がいるのかまわず平然と命令し、もじもじする間もあらばこそ、仰向けに寝た私の両足を、ちようど赤ん坊のおしめをかえるときのようにぐいと持ち上げ、一目見るなり、「あ、これは手術しなければ駄目だな。君、下にはいているものを全部脱ぎたまえ」とまたも命じ、いきなり麻酔の注射をぶつりと肛門の筋肉に突き立てました。「あ、痛い！」と飛び上がるようでしたが、文句も言わず、次々と打つその後の注射は、もうすでに痛みもなにもなく、やがて、ぶつつ、ぶつつと太い肉の筋の束を鉄で切るような感じを手始めに、足をあげて天井を見ている私の尻のあたりで何事かがぐんぐん進行していきました。時折、チューブをぐつと押しこまれるような不快な圧迫が容赦なく加わり、私が懸命に吐き気をこらえているうちに事は終わりました。聞けばこの医院の痔の治療は飛び出た痔核を切りとるのではなく、その根元をきつく縛りあげ、ピンポン玉のようになったそれに何かの液を注射して腐り落ちるのを待つのだといひます。「ライム・ライト」のチャップリンを思わせるY博士は、消毒液で手を洗いながらそんな説明を手短かにしたあと、あっさりこう言いました。

「保険証とお金はあとで家の人に届けてもらいたまえ。ただし手術は技術料を含むから保険がきかない。×万円だ。ま、二週間は家で寝ているんだな」

×万円？ 二週間は家で寝てるんだな？ 軽く言ってくれるじゃない。学校はどうなるんだ。エスケープの常習犯たるおれだって、

一応は高校生だぜ——。あわてたってはじまりません。事はおわっているのですから。いままらピンポン玉を縛り上げた糸をほどき、注入された毒液を抜くとは言えませんが。「はあ、はあ」とうなづきながら、ズボンをはき学生カバンをもって診察室兼手術室を出かかると、マシユマロさんが相変わらず静かな口調で、「毎日ガーゼをおとりかえますから、なるべく午前中においでください」と告げ、「どうぞお大事に」としとやかに頭を下げました。どきまぎして私もペコンと頭を下げ、あわててドアをしめようとしたとたん、まだ頭を下げている少女のおでこにガタンとドアがあたつてしまいました。いっそうあわてて私が、「あ、大丈夫ですか」ときくと、少女の白い頬にはじめて刷いたように血の色がのぼり、「ええ、大丈夫です」と少し笑うようにうつむいたのです。

肛門病院を出て家まで帰る途中、私は生まれてはじめて打たれた麻酔が全身にききはじめてらしくもううっとりとしてしまつて、ほとんど空を踏むようにして道を行きました。

祥雲寺坂下は車の往来が激しいところです。そこをふらふらになりながら横断するとき私は、「おれはいま車にひかれそうになつてもよけきれないな」と他人事のように思ったのをいまでもはつきりと覚えています。

笑わないチャップリンみたいなY博士の乱暴さ加減はこの一事にもよくあらわれています。麻酔がさめるまで寝かせておけばいいのに、患者を。

あつという間に私はY博士の患者にさせられてしまったのです。ある日の昼下がり、がらんとした肛門病院にうっかり飛びこんだばかりに。

(つづく)

# ワンポイント 〈17〉デモクラシーの波と「青鞥」創刊

——ブルジョア的女性解放運動——

秋枝蕭子

「元始、女性は大陽であつた。真正の人であつた。今、女性は大月である。他に依つて生き、他の光によつて輝く、病人のやうな蒼白い顔の大月である。」に始まる発刊の辞を以て、明治四十四年九月、平塚らいてう（明子）を中心に、女性のみの手により雑誌「青鞥」が創刊された。発刊の辞の中で、筆者らいてうは繰返し、女性の内なる隠された太陽、すなわち天才を発現させよと叫び、それこそが彼女の希求する「真の自由解放」なのだと言張した。

時は既に二十世紀の初頭であり、先進西諸国では、十九世紀後半から沸き起つていた各種の解放運動（奴隷解放、女性解放、文盲解放運動等）のうねりが高まり、近代的市民権の獲得を求めるデモクラシー思想やその運動が拡がり、さらに近代資本主義産業の発達とその矛盾・歪みから社会主義思想やその運動も展開されていた。このやうな思想は、我が国にも次々に移入さ

れたが、明治の天皇絶対制の国体と基本的に相容れない社会主義思想及びその運動は、きびしい弾圧を受け、「青鞥」創刊の前年に起こつた「大逆事件」以来は、殊に社会主義運動にとつては「冬の季節」と称される暗い年月となつたのであるが、他方、ブルジョアの民主主義の方は、国体に抵触しない範囲で許容され、明治末期から大正期にかけて、いわゆる「大正デモクラシー」時代を出現させたのである。

十八世紀末英国のブルジョア的女性運動家たちの渾名「ブルー・ストッキング」から命名された「青鞥」は、まさに大正デモクラシーの魁をなす運動でもあつて、らいてう自ら主張したごとく、女性たちの内面的自己開発乃至文藝的才能の発現を目的とした、ブルジョア的女性解放の烽火であつた。

しかし、今日では極めて穩健な主張に過ぎない「青鞥」も当時の社会には少なからぬカルチャー・ショックを与えた。それは、長らく封建的な男尊女卑社会の重圧の中で、何らかの精神解放の突破口を求めていた一部の知的女性たちに、共感と期待の灯をともしたと同時に、他方保守の人々には、いわゆる「良妻賢母」的女性觀を脅かす危険思想と見なされた。

この世間の批判の中で、却つて「青鞥」は初期の文藝的性格から、次第に社会的視野を拡大していった。大正三年末、らいてうが私的生活に穩棲して、伊藤野枝に編集を委譲し、大正五年二月、野枝自身の責任放棄から廢刊となつた。



# 知らないことを知りたくて

(7) 蓮池悦子

ステさんは、二、三十メートル離れたすぐ隣に住むお祖母さんに知らせに行きました。お祖母さんは、おそらく一八三〇年代生まれではなかったかと思えます。すぐ駆けつけて来て、

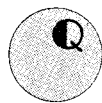
「ku—mat nepo, ku—mat nepo. kors i uta n en ram i sa m pe new a oka i ke, e—hoppa wa, enon e—s i ki ru kus ta e—an ru we an? (私の娘よ、私の娘よ。小さい子供たちは残して、どこに向いていこうとするんだ)」と母の枕許で泣きながら言っています。

「ハーポ(お母さん) モコンノ(熟睡する)しているのに、フチ(お祖母さん) やかましい」ステさんがそういうと、  
「tan tan i ram ki t t a! hapo kokkops e i ke, e ci e ra mi si i ka

ri。……(うんまあ、驚いた。母親が化け物を背負った死んだⅡの)に、お前たちわからないで……」

それから、皆にそのことを知らせるよういつかつたステさんは、叔父さんの家の前まで行つたのですが、コッコッセⅡ化け物を背負うⅡという言葉が、あの世に行つたことを意味するとは知りません。また、よその家を訪ねるときは、外で軽く咳ばらいをして待ち、家の中から人が出てきてから、はじめてその家の中に入るものだとしつけられていたので、しばらく家の周りをウロウロしていました。

「hay ku—era m tu y! nep kus i ta e—an? (ああびつくりした。何でお前いるんだ)」  
家から出てきた叔父さんに尋ねられたので事情を説明すると「i ram ki t ta ra! あきれたな ene そのよう neである i keの)に、nep何 kus u故に ci s e家 ot taの)内に e—ahunお前は—入り kaも somo ki noせず)に soy外 taで e—anお前は—いる ru weの ta(強め辞) anだい?」とさんざん叱られました。なぜなのかステさんにはわかりません。集まって来た大勢の人々が、よく寝ている母に取りすがつて泣き喚いでいるのを、やかましいなあと思ひながら、暖かい日だったので、妹と二人して裸になって外で遊んでいたの



三年前に五歳だった長女を喘息で亡くしました。当時は悲しくて、辛くてたまりませんでした。が、このごろはようやく、しかた

がなかったことと思えるようになりました。今心にかかっていることは、五歳になった長男のことですが、この子も喘息の体質です。私は強く育てたいと心がけて、スイミングスクールには少々風邪ぎみでも行かせたいのですが、同居の義父母は非常に神経質になっていて、咳一つ出ても家の中に入れておきたがりません。そんな時には私もイライラした言葉遣いになるし、子供はそのようなやりとりをみていて神経質になっています。

夫は勤務時間が長く、仕事も大変なので、あまり心配をかけたくなって、細かいことは話しておりません。

(東京 Y・Y)



かわい盛りのお子さんを亡くされた親御さん、そして、おじいさん、おばあさんのお気持ちは、いかばかりであったか想像を絶するものであったと存じ、読んでいて、当方の胸も痛みます。幼な子を失うこと程、苦しいものは、

この世にないと、私は、常々、思っております。

それ故に、同じ喘息ぎみの御長男に対して、お母さんが、強く育てようと必死になるお気持、当然だと思えます。医学的にも、きっと、その方が良いのだろうと思います。しかし、おじいさん、おばあさんも、かわいい孫を、二度と失いたくない気持ちで、大事に、大事にと、神経を使っておられるのでしょうか。

一人の子供に対して、三人の大人たちが、あれこれと神経を使い、関心を集中させ、世話を焼き、目をかけ、心を遣う状態というのは、その子供にとって、背負いきれない重荷となる筈です。その方が、「風邪ぐらいひいていても水泳をさせるか」「家に閉じこめるか」という具体策の是否よりも、お子さんが、心身共に健やかに育つ上で、良い影響を与えないのではないかと、私には思えるのです。

お医者さんの指示に従って、家族が一致した姿勢をとれるよう、仕事に忙しいお父さんであっても、その点に関しては、話し合いに協力してもらおうべきではないでしょうか。

そして、子供には子供の世界があることを、回りの大人たちが認識してあげてほしいなあと思えます。大人もまた、自らの世界を充実させていけるとよいのになと思います。

## 新米教師の軌跡 その2

湯 沢 静 江

佐藤先生は、学校の側の校長住宅に、奥様と、お嬢さん、息子さんそれぞれおひとりずつの四人で住んでおられた。たしかクリスチャンでもあった。北海道のご出身とうかがったことがあるが、新潟から東北方面の訛もあって、「ツクイ（机）インピツ（鉛筆）」というような発音をされていた。若かった頃はあちらこちらと歩かれたのかもしれない。職員の中には、茫洋ぼうちやうとしてつかみどころのないこの先生を、あまりよく言わない人もいたのは、佐藤先生のスケールの大きさが理解できなかったからだと思う。

奥様がまたとても素敵な女性で、専業主婦でいらっしゃったが、ものの考え方が柔軟で、かつ斬新、私にとつては理想の女性に思えた。学校の近くに間借りをして、ひとりで生活をしている私が、日曜日などにふと人恋しくなつて、先生のお宅へうかがうこともあった。そのような時、お忙しいなかで

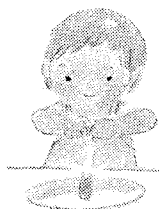
も、快く招じ入れて下さり、教育問題を含めて、いろいろなことを御夫婦で話して下さった。奥様は、私を客間に通し、お茶だけ出して別室に引込むというような他人行儀なことは決してなさらなかった。居間の中央にある薪ストーブ（その当時、家庭にストーブのある家は極めて珍しかった。北海道で使っていたストーブだったのかもしれない）を囲んで、先生は服の上に袖なしのチャンチャンコを羽織つてあぐらをかき、奥様も大抵の場合その側に座つて話に加わられた。

ある時、こんな話を奥様がなさった。「わが家では男の子も台所仕事をするのですよ」「でもエプロンの紐がうしろで結ばなくてね」「男の子の服には、うしろ手で紐を結ぶものがないのよ」と言つて笑われた。そう言えば私の父も浴衣ゆかたを着る時、へこ帯を前でしばつてからうしろへ回していた。「男の子の体格がよくなつてお父さん（先生のこと）と同じ大きさの下着を着るようになったものだから、洗濯をした時にわからなくなるでしょ。それで、それぞれのパンツに名前を書いてあるの」と言われて指さした物干し竿には、先生の名と、息子さんの名が墨でしっかりと書きこまれたパンツがいくつもひるがえつていた。二〇歳そこそこの新米教師に、そんな話ができる御夫婦だった。

# ひよっこクラブのコックさん

## 2. 卵をポンと割りまして

○佐 多 和 子



“卵をポンと割りまして、そのまま飲んだら生卵、卵をポンポンと割りまして、ジュージュー焼いたら目玉焼き、卵をポンポンと……”

これは、ひよっこの子どもたちの大好きな手遊び歌、卵を割る快い音と卵を割ってホットケーキを作った時の思いが重なるのか、キャッキャツと喜んで歌いだす。卵割りって楽しいものだよ。

ひよっこで初めて卵を渡された子たちは、今までさわらせてもらえなかったものにさわれるうれしさと、卵を割る怖さに緊張する。それでもみんながやるのを見ると「自分も……」と思うし、何よりもこれで食べる物を作るとあらばやりたくなるのが当たり前ではある。初めは卵の殻が破けるかどうか気がかりなところだが、それができれば次に黄味をつぶさず、きれいに割れるかどうかに挑戦するようになる。これは誰が言うわけでもないが、自分の割った卵と仲間の割った卵をみて子どもたちが自分で“基準”を作っていく。「できた」と小さく呟く姿は、実に頼もしい。

包丁だって同じこと。ひよっこにいる姉・兄についてきていた美智ちゃん、大人には人見知りしながらも、ひよっこのみんなのやることに興味

をもつて包丁を握ったのは一歳十カ月の時だった。当番のおばちゃんの誘いにはのらなかったが、子どもたちが迎えに行くといつてきて台所に入り込んだ。みんなが見守るなか、包丁を握って野菜を切る顔は緊張に満ちていた。

こんな様子をみたおばちゃんは喜々として急におしやべりになってしまふ。「ひよっこでは美智ちゃんが一歳十カ月で包丁を使つてね、上手に切ったのよ」「まあ、すごいね」なんて、一緒に喜んでくれるひよっこ以外の友がいるのもっと楽しくなってくる。が、やがて、こうしたひよっこの活動に対して、別の見方があることに気がついた。ひよっこに見学にきた若い母親が、卵割りや包丁使いに驚くと、次に「うちでも練習させなくちゃあ」と言うことがある。卵割りや包丁使いなど、ちよつと練習すればすぐできるようになるもので、難しいものではない。でも、テーブルにいくつもの卵を並べ、母親に練習させられる子どもの姿は見たくないと思う。卵割りも包丁使いも、みんなと一緒に料理を作り、ワイワイ言つて食べるから上手になるのではないかしら？ とおばちゃんは思うのです。

(カット・加藤友子)



## スケイトボード

帰国後、まもない頃の話。

ある日、二男（七歳）の友達が遊びに来た。

〇君「スケボー、貸して下さい」

私「……!?」

頭の中は一瞬、大車輪……（この子は、何か高い所にでものってしまった物がとりたくて、助けになる長い柄の棒＝スケボーなるものが欲しいのかな。イヤ、ちがう……）

〇君「このまえ、あったでしょ」

私「あっそうか。いいわよ」

と言って渡しながら、何ともイヤな気分。Skateboard が何で、スケボー、なの？ 気持ち悪い。

いくら忙しいからってスケイトボード、と言うのに、どのくらい時間がかかるというのだろうか。もう……万事これだから、日本人は英語がしやべれなくなってしまうのだ。

スケイトボード、と言えば、少々発音が悪くたってアメリカ人に通じると思う。スケボー、では通じないし、その上習慣とは恐いもので、たとえば、本当はスケイトボードというのだ、と知っていても、ついいつかり英会話の時にも「スケボ……」などと言ってしまった（あっ、しまった。ほんとは何ていうんだっけ）など悩んでしまうことになる。

英語をそのまま日本語として使うなら、より原語に近いまま使う方がよい。表記法も、スケイトボード、とか、ラジオはレイディオ、とかにしておけばよいし、さらに、オートバイはモーターサイクル、カーテンレールはカーテンロッド、電機スタンドはランプ、フレンチドレッシングはイタリアンドレッシングという具合にきちんと、正確に言ったなら頭の中の英単語数は倍増、である。

英語（その他の外国語も）を勝手

## 日本その日その日



### 大西麻里子

に短くしたりして、変な日本語を作るのはもうやめよう。なぜなら、日本人はアメリカに暮らしていてさえ、それをやってしまうから。そしてそれを持ち帰るから。

身近な名詞からはじまって、自由、とか、民主主義、とかいうむずかしい言葉まで、日本人は自分たちに都合のよいよう、本来の意味を切り捨ててしまったり、変えてしまったり平気で使っている、と私は思う。だから、これらを大前提として話合ねばならぬ時、アメリカ人との間で話ぐいちがつってしまうのだ。器用に「外来語」を使っているうち、世の中に「真赤なウソ」が出来上ってしまったって良いはずがない。

他人や他国を理解するには、また自分を、自分の国を理解してもらうには、まず、言葉というものを大切に入念にとり扱うべきだ、と単純名詞で苦労した主婦は思うのデス。

# 政治の目

## 女性の年金権について

### 湯川憲比古

昨年四月から新しい年金制度がスタートしました。これによって、各年金制度に共通の基礎年金の制度が導入され、月額五万二二〇八円(62年度)の基礎年金については、すべての国民に確保され、従来任意加入であったサラリーマン(被用者)の妻も、一人一人の個人の年金手帳をもつようになります。

年金の加入者(被保険者)には、次の三種類があります。第一号被保険者は、いわゆる国民年金の加入者で、自営業者、農業者、被用者年金に加入できない五人未満の零細企業従事者で、20歳から60歳までの人です。第二号被保険者は、被用者保険、すなわち厚生年金や共済年金に加入している人です。第三号被保険者は、厚生年金や共済年金に加入している人に扶養されている配偶者で、サラリーマン(被用者)の無業の妻がこれにあたり、約一〇〇万人とされています。

ところで第二号被保険者、すなわち厚生年金や共済年金の加入者の年金は、基本的に一階部分にあたる基礎年金と二階部分にあたる報酬比例部分(標準月額八万円強)によって構成されています。その上に、職場によっては、職域年金(企業年

金)の上乗せがあり、さらに今回のマル優廃止でも生き残った財形年金の制度もあります。これに反して、第一号、第三号の被保険者には、個人に属する報酬比例部分が全くありません。従って、第三号被保険者であるサラリーマンの妻が離婚をすると、基礎年金しか受けられないということになります。

私は現在の年金制度の大きな問題の一つはここにあると思います。このことは、サラリーマン以外の男性の問題であると同時に、第一号と第三号の被保険者の多数を占める女性の年金権にとっても大きな問題であると思います。そこで一つ提案をします。アメリカのIRA (Individual Retirement Account=個人退職年金勘定)制度の国民年金加入者のみへの適用です。これは、個人年金のための金融商品の購入について年間二千ドルを所得から控除する制度で、「付加年金」、「自治体年金」などと共に、国民年金のみ加入者の二階部分として大いに検討に値すると思います。女性が多数を占める、第一号被保険者と第三号被保険者の「連合」によって、年金制度の改革を実現することもできるのではないのでしょうか。

# 知らなきゃソン 最新情報

家庭科の男女共修をすすめる会  
教課審答申にむけ要望書提出

九月二六日、家庭科の男女共修をすすめる会は、「もう一押し、新教育課程にむけて」集会を開いた。情報教育を中心にした各地の動き、政府、業界の動きの報告の後、本年末にも出される教課審最終答申にむけ、「女子差別撤廃条約の精神にかなった実質的な男女共修が実現されるよう」ダメ押しの要望書を検討した。「会」は十月一日、文部省に行き、塩川正十郎文相、福井謙一教課審会長に提出した。

(前文省略)

一、男女平等の推進を教育の基本にすすめることを明らかにして下さい

家庭科教育は女子差別撤廃条約に従って改革されることになりましたが、家庭科以外では、男女平等をすすめるための具体策は、教育に関しては殆んど着手されていません。社会の変化への対応を意図したはずの臨時教育審議会も男女平等の問題は無視し通しました。このようなことは、女子差

別撤廃条約の締約国としては許されないはず。新しい教育課程においては、男女平等の推進を教育の基本にすすめることを明記するとともに、教育行政関係者は、あらゆる機会を通じてこの考えをひろめる努力をして下さい。

二、男女の役割についての定型化された概念を徹底的に排除して下さい

新しい教育課程、学習指導要領の中に固定的な観念が入りこまないよう十分注意し男女の役割を変えて行くための教育内容を積極的に検討して下さい。特に「親の役割」「健全な家庭」の名のもとに、伝統的な男女分業型家庭がよいという考え方を押しつけたり、人間の多様な生き方を否定したり、「生徒の特性」「生徒や学校、地域の実態」の名のもとに、男女別の指導をしたり、男女の役割分担意識を植えつけたりすることが決定的でないように、教育課程、学習指導要領の内容を慎重に決めるとともに、現場にその主旨が徹底するように配慮して下さい。

家庭科の学習領域や科目の選択に男女差

ができないように十分配慮して下さい。

中学校の技術・家庭科では、男子が主として技術的領域を、女子が主として家庭的領域を多く選択したり、高等学校では「家庭一般」を女子が学び「生活技術」を男子が学ぶことになる、「女は家庭」という性別役割分担意識を固定化することになります。

三、家庭科という名目で家庭科とはいえないような授業が行われないようにして下さい

「家庭生活と情報処理」などの名目で、実際には家庭生活の学習という目的からはずれた授業が行われることがないように、教育課程、学習指導要領の内容を慎重に決めるとともに、現場にその主旨が徹底するように配慮して下さい。

四、「生活一般」の後半二単位の代替履修はできるだけ行われないようにして下さい

(略)(編集部注・体育などによる代替履修)  
五、家庭科の男女共修のための条件整備を積極的にすすめて下さい(略)

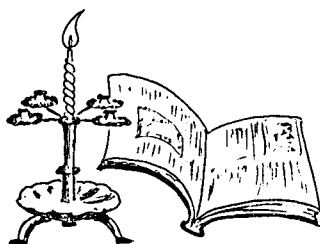
六、各学校、各学級で、できるだけ自由に、多様な学習活動が行えるようにして下さい

(略)

(全文は「会報」87年冬号(百円、送料70円)に掲載、申し込みはウイ書房へ、切手可。)

## 今月の読書から

半田 たつ子



### 家族の歴史人類学

マルチーヌ・セガレーヌ

片岡陽子他訳

◆家族の「危機」は、本当に存在するのか。新聞・テレビがこぞって口にするそれは、19世紀にも何度も叫ばれた。少し距離をとってながめてみると、家族は、社会の変化に対応すると同時に抵抗もする制度といえる。「進歩」家族の解体」という公式は再検討しなければ。フランス国立科学研究所研究部長が、この一五〇年間の歴史を探究した味読すべき本。

(新評論 四八〇〇円)

### 華の乱

永畑 道子

◆与謝野晶子、平塚らいてう、伊藤野枝、山川菊栄、山田わか、……大正期の女性論争は、まこと華のあらそいであり、火の柱立つ激しさであった。女としての彼女らをいとおしみ、人間を鮮やかに描きながら、流麗な筆致で語る七〇年前。幸徳秋水、大杉栄、与謝野寛、有島武郎ら、魅力的な男たちと彼女らの愛情をも書ききり、著者の代表作となること必定。

(新評論 二二〇〇円)

### ママハハ物語

宮迫 千鶴

◆夫婦はイワン、生母幻想とQ太郎：核弾頭と皮ジャン：「未婚の母」と嫁びり、び：目次を挙げるだけでゾクゾクする著者の才華。このママハハがQ太郎に教えたいのは民主主義のルール。〈私的な場〉(個の領域)と〈公共の場〉(共同体の領域)を自由に往還できることこそ自由な精神、それは家庭で体得されない限り、しっかり身につくことはないから。

(思潮社 一四〇〇円)

### シングルライフ

海老坂 武

◆読者の関心によってさまざまな光を発する本。シングル人間は自己のアイデンティティを何よりも(個)に求めるものだ。ここに家族を解くカギがある、と私は思う。大衆の基盤でシングル・ライフを生きられるようになって日の浅い現在、真摯に自分をひらいてみせた本書の意義は大きい。(シングル主義の迷い)とでも題すべき、著者は謙虚だが。

(中央公論社 一二〇〇円)

### シングル・カルチャー

青木 やよひ

◆ありのままのシングル・ライフを語る15人に続いて、新感覚でカッパルを生きる人たちと対話し、海老坂武・宮迫千鶴・金井淑子氏と、あるいはシングルの、あるいは家族を語る。著者は終章で、手ぎわよく整理し、「シングル感覚からシングル・カルチャーへ」を論ずる。自分の情念の幅・深さに忠実に、しかも自閉化させずにとの金井淑子氏の言葉が光る。

(有斐閣 一五〇〇円)

結婚そして夫婦・家族

尼川 洋子

◆やや平凡なタイトル。だが中身は非凡だ。団塊の世代、個と個を大切に「新しい結婚」を自負した友人が、なぜあいついで離婚するのか？ 女が一人の人間として生きたいと思うことが、結婚をきしませたりしないようにと願って、夫婦、親子、仲間、地域の絆を創っていく過程が、実にいい。率直で、肩ひじ張ってなくて、愉快で、あったかい。

(汐文社 一二〇〇円)

家族つき合い ひとつき合い

高見澤 たか子

◆あたり前の庶民が持っていたくらしぶりの知恵。ある家庭には細々ながら伝わり、あるところでは全く断ち切られている。家族つき合い、ひとつき合い、著者のこの細やかさこそ、優しさ、豊かさ、賢さであることを、若い人よわかつてほしい。著者に、新聞の切り抜きをせつせとした日があり、それをたった一人のカルチャー・センタールと呼ぶことも。

(海竜社 一一〇〇円)

忙しママのおふくる料理ブック

竹内 希衣子

◆理解あるおやじと、忙しがっているおふくろがいて、おいしいものが食べられる家庭があったら、子どもは放っておいても「上等」に育つのではないか……わが家の現実には、そう思い通りにはいかない、と著者は言うけれど、家族大好き、大切にしているけれど自分の時間も友達も大切、という行動派ママの具体的提言があふれる本。共感しきりの楽しい本。

(大和書房 一一〇〇円)

育児不安をこえる

子育ての輪

池亀 卯女

◆松戸で小児科医院を開業し、ひらかれた診療活動を模索、仲間と「すべーす遊」という地域の場を作って、共に生きるつながりを広げている著者からの提言。子育ての不安はだれにでもあるけれど、産業化された情報にふりまわされないで、自分なりの愛情で子どもとつきあい、おとなの「権力性」を見つめ直し、毎日の生き方を新しくしていこう、と。

(ユック舎 一二〇〇円)

ワーキングマザーになる本

ミズ・プロジェクトチーム編

◆副題に「均等法時代のマタニティガイド」とある。働きつつ子育てをすることを考える女性とそのパートナーに向けて、心やからだ、生活の上で必要と思われることを九つの章に分けて挙げた。特筆すべきは、読者が必要な情報を個別に選べるように、資料・問い合わせなどを紹介した情報のガイド本である点。著者たちの思いを囲み記事で散りばめた点。

(現代書館 一四〇〇円)

0度の女―死刑囚ファイルダス

ナワル・エル・サーダウィ

鳥居 千代香訳

◆アラブ女性として初めて公然と女子割礼を非難したフェミニスト作家は、男を殺した罪で絞首刑になったファイルダスの生と死を衝撃的に描いた。「奴隷のごとき妻にならないで、自由な売春婦に」なり、人が犯した犯罪のための死より、自分が犯した犯罪のために死ぬと言った誇り高いファイルダスを「世界は嘘で満ちているがゆえに」犠牲になったと書いた。

(三一書房 一三〇〇円)

あなたは、朝日新聞に連載中の干刈あがた氏の「黄色い髪」を読みますか？　こう尋ねると、十人中九人が、いいえ、と答える。

ああ、残念。あなたの問題をとらえた小説なのに、なぜ？

登校拒否をしている中学生の夏実と、その母史子を中心として、学校・家庭・親と子、若者など、実にビビッドに描いているのに。私がおし、いま中学・高校の教師だったら、ホーム・ルームで、授業で、今朝の「黄色い髪」を取り上げるのに。文化祭の劇の脚本だって作れるのに。

有責配偶者からの離婚請求を認めないとしていた最高裁が、考え方を換え、条件付きで認める新判例を出した。このことに関して、金住典子氏が九月四日付朝日新聞に書いた文章を読んだ時、「ああ、これも教材になる！」と叫んだ。

土曜の午前、立教大学で「家庭教育」という講座を持っていたころ、金曜の夜までに準備した内容を、土曜の朝刊を読んで捨てたこともあった。毎日、地球のあちこちで、家族・家庭に関する大小の問題が起き、それは必ず私の家族・家庭につながっている。私は、学生とともに、私の心にさざ波を立てたものについて考えたかった。私の固有の問題意識は、はたして学生と共有しうるものかどうかを確かめたかった。個が普遍たりうるかどうかを知りたかった。

私は、編集室でよく新聞やテレビを材料に、「あれ読んだ？　見た？」と尋ねる。「いいえ」で、がっくりする。八〇人ぐらいの学生の中には必ず数名「うん、うん」と輝きを放つ顔があった。その五年間は楽しかった。私はきつとより多くの人々と問題を共有したいタイプなのだ

## なぜ学ぶ

半田たつ子



ろう。"We"を出すのも"波"を書くのも、その欲求からだ。

NHK銀河テレビ小説「お入学」で、広告会社でバリバリ働く貴子が語った。「夫との間に、あまり会話がなくても、仕事で満たされている私にはさして問題ではありませんでした。問題を共有できる集団を持てば、家庭・家族はいらないのだろうか？

「黄色い髪」の夏実は、美術の時間にやった彫刻の削りかすを、給食に入れたことが直接のきっかけで、学校に行かなくなる。その夏実は、初めて外泊した翌朝、これからどこへ行ったらいいのだろう、と考える。家には帰りたくない。なぜか？　それは、家がまるで学校になってしまったからだ。学校には到底行けない私が、家に帰っていかれるはずがない、と思う。でも、夏実はともかく疲れていて眠い。安心してぐっすり眠りたい、と思う。安心してぐっすり眠れる場所は、自分のあのベッドしかない、と思う――。

ここは、とりわけ「すごい！」と読んだ。中学生たちと、この箇所を話し合いたいなあと痛切に願った。

中国の「残留孤児」が、生みの親を尋ね、次々に来日したころのこと。めぐり会えずに、空しく離日する折、その中の一人が「お父さん、お母さん、私はあなたたちの生活の中にちん入して、あなたの生活を乱そうとは思いません。ただ、私がだれであるのかを知りたいのです」とつぶやいた言葉を、忘れることができない。

私たちは、自分がだれであるかを知らないまま人生を続けることができないのではないだろうか？　いずれは自分の死を受け容れなければならない人間として、自分のアイデンティティをどこに置くかは、大問題なのだ。

人間の生が、たかだか七、八〇年のものであること。

生まれたからには必ず死ぬこと。その有限を生きる人間が、自分を歴史的存在としてとらえる時、ささやかな生にも、意味を見出すのではないか。人間が日記をつけ、写真をとり、記録を残そうとすること。ある人は研究をまとめ、ある人は本を書き、ある人は作品を制作する。

ある人は、男女の交わりによって新しい生命を生む。子どもを一人前に育て上げ、老いた人を看取る。個としての人生だけでは、あまりにも侘びしい。歴史の中に、たしかに自分が在ったという跡を刻みたいからではないか。

人間のアイデンティティは、個としての確立が、横―共感しうる仲間、縦―歴史への刻印、によってサポートされた時に、安定するのではないか。「家族」は、個がアイデンティティを確立する際に、それをサポートするところに意味を持つものかもしれない。

「家庭科という名称が悪いのです。むしろ生活科とか、生活科学科を名乗っては？」「いや、人生科とでもしたら？」

こんな意見を、共修運動を始めてから、十何年も聞いてきた。「家庭科」のイメージの悪さに嘆息するとともに、人びとが家族・家庭の呪縛から解放されたがっていることを感じた。家族集団の外に、自分の場所を持っている人が、よくそう言った。「お入学」の貴子のように……もつとも、小学校低学年に、道徳の味つけをした「生活科」が取り沙汰されてからは、ほとんど耳にしなくなったが。

女性民教審の教育改革提言を特集した「ひと」臨時増刊号で、朝日新聞の佐田智子氏が語っている。

「総合科学としての家政学を再構築して、普通教育としての家庭科

## 「家族」を

### 表皮

を教える、という提言、これだけ家庭を維持していくのがむずかしくなっている時代に、こんなことやらないでどうするという話で、当然のことだと思ふの」と。

佐田さんの意図を「家庭についての論議が沸騰し、家庭が揺れ動いている時代だからこそ、家庭について考える材料が無限にある」ととらえ、共感する。家庭科で家庭を扱うことを、家庭基盤充実対策なる権力者の意図にはまることだと受けとめるのは、その人が権力者の家庭観に染められているからに他ならない。

近代日本の歴史をひもどけば、権力者が家庭に強く介入する時は、必ず隠された意図があったことがわかる。女性民教審は「権力の側からのおしきせの家庭観ではなく、個人の尊厳と男女平等にもとづく私たち自身の家庭観を持つ」ことを提言した。臨教審は「教育の荒廃」の原因は、家庭機能の低下によるものとし、「母子相互作用」を強調する。子育ての責任は、母親にあるとし、父親を「母親の精神的支え」と見る。この考え方の上で「親となるための準備としての家庭科」を提唱している。

権力の側からのおしきせではなく、私たちが自分の家庭観を確立するために、家庭観をきたえ合う場がなかったら、表層的な変化だけを、ジャーナリストティックに書き立てる過剰な情報の中で、子どもたちは、もみくちゃになってしまいうだろう。

家族とは？ 家庭とは？ 理想のもの、意義あるもの、大切なもの、といった価値判断を含ませずに、人間はなぜ家族をつくるのか、つくりたくないのか、家族と家庭とはどう違うのか、どんな変遷をたどって今があるのか、などを生徒と共に考える学習こそが望まれる。



#### 〈We 岐阜の会〉

◆臨教審の第四次答申(最終答申)が八月七日に提出されたことしの夏は、女性民教審の提言の学習に燃えた夏でもあった。タイミングよく、We夏増刊号「女たちの教育改革提言」を資料に、八月二十九日読者会をもった。

半田さんの講演「新しい価値の創造を私たちの手で! (女性民教審の提言から)」は、大変新鮮で感動的であった。民教審の発足当時、すべて奉仕活動で手弁当でがんばっておられるメンバーや事務局の皆さんに、せめても、カンパの協力をしなくてはと思い、ささやかなカンパや手紙を送った。読者の皆さんにも賛同者になってもらうよう呼びかけもした。

教育の現状に危機感を抱いていた私は、民

教審の活動に感動し、期待をした。そして、みごとに困難をのりこえ最終提言がまとまった。臨教審のメンバーひとりひとりに読んでもらい、提言を反映させてほしいと、提言集を手渡してくださったことに感謝をしている。公開審議21回、非公開審議46回と計画的・精力的に審議を進められ、本当に「ごくろうさまでした」という感謝の念で一杯である。

さあ、投げられたボールをどう受けとめ、投げ返していくか。今後は、親も教師も共に実践に移すべく手だてを考えていかねばと思う。まず、何よりも親の意識を変革していくこと、固定した価値観を打破していくことの必要性を、しみじみ考えさせられた読者会だった。

充分に討議する時間がなかったが、「障害のある子もない子と共に」が話題になり、ハングのある子にもない子にも共育が必要で、それが可能でもあるという話が心に残った。障害も個性として認める提言は、教育を根本的にみなおす意味で、もっと話したい内容である。今後いろいろな場で提言をもとに話したい。

(掛布禮子)

#### 〈We 城北の会〉

◆「学校って、どうしてまとまりを大切にするのかしら?」「制服、教材などみんな同じだと安心し、はみ出した親、教師、子どもたちは切りすてて行く」「私たちっていつも少数派みたいネ」「でも、おかしいことは、おかしいと言っていかなければ……」

管理教育が年々強まる中で、とすると自分を見失い流されそうになっている時、城北の会に行くと私と同じ様な考えの人もいるんだと元気が出てホッとしています。

職業、家庭環境の違いを乗り越え、ホンネをぶつけ合い、小さな悩みもゆっくり聞いてくれる集まりだから、今回(九月十二日)初めて参加の長尾さんも、すぐうちとけて学校のこと、家庭のことを話してくれました。

「フォーラムの家庭科分科会で教師と市民の論議をかみ合わせたいわね」。来年への希望やWeへの注文などなど、話題はあちこちへ、「貴重な時間をさいて集まって来るのだから、ただおしゃべりだけでいいのか」「何かテーマを決め継続して討論すべきだ」という鋭い指摘も出て、次回から当分の間、『ほんとうの国際化とは?』というテーマで講演や映画会などを開き、沢山の人たちと呼びかけて、



## “We” 秋の集いへのおさそい

◆同封のチラシのように、秋の集いを開きます。昨秋の児玉澄子さんに続いて2回目。今年は、武田秀夫さんのお話を聞きます。

◆武田さんは、Weの霞通信、そして読書つれづれ草で、多くのファンを持っていられっしゃいますが、朝日新聞のコラム“色鉛筆”にも執筆中です。そちらも好評のため、予定を延ばして、年内一杯書かれるとのこと。

◆昨年の秋の集いに、はるばる山口県から参加された山名さんが今年もぜひ、とすでにおっしゃっています。「よいお話をじかにうかがうのは、なまの音楽を聴くようなもの、夜行で往復すれば、どうということもない」との言葉に感謝しました。

◆地の利を得ている方たち、どうぞお友達をさそって、ご参加下さい。

◆春の公開ゼミでは、その折のホットな問題をとらえ、夏のフォーラムは、泊りがけで話し合いたいことを、秋は、しみじみと心を通わせあうテーマをと、実行委員会はくふうをこらしています。

◆11月21日(土)pm 1:30~4:30  
中野サンプラザ8F集會室  
参加費 1000円  
テーマ “いま、「少年」はどこに棲むか”  
(詳細は同封チラシにあります)

◆九月二〇日午後、滝山団地東集会所で拡大読者会を開きました。半田さんをお迎えした今回は、当会としては初の「特別催事」。日

### 〈We 東久留米の会〉

考えながら話し合おうということになりました。その中から、アジアの中での日本のあり方を問いなおし、私たちの足もとをもう一度見なおして行きたいと思っています。

次回は十月三十一日(土)午後二時~五時・十条出張所にて ビデオ「再会―平壤への遠い道」を見ながら。 連絡先・蔡 03-066-6839 (永井恵子)

時も初めて日曜午後に設定し、参加者は十九名で通常の約二倍となりました。

まず、『We』の刊行のかたわら女性民教審メンバーとしても活動してこられた実践の中で、半田さんの意図されたこと、どんな想いをこめてそれらの活動を続けられるのかをお聞きたい、とお願いして、「私は自分の個人的な課題を、他の方々と共有化することによって、仕事ができきた幸福な人間です」とおっしゃる半田さんの、個人史を語っていただきました。子供の頃からの全生活体験の中で感じた疑問、直面した問題のひとつひとつに取り組んでこられた結果が、必然的に今日のお仕

事となったこと、課題の切実さこそが実践への活力となっていることが、それこそひしひしと伝わってくるお話でした。

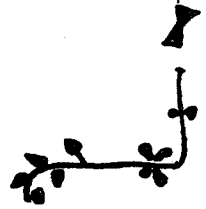
あと、参加者の自己紹介と発言が一巡したところで残り時間わずかとなり、議論を尽くせなかったのは残念でしたが、五人もの現職教師の方の参加があったことは、定例メンバーに教員のいない当会にとって大変うれしく、得がたい交流の場となりました。

次回は十月十九日午前十時・滝山団地東集会所和室にて。

連絡先・西内みなみ 0424-73-0901

(瀬戸井厚子)

# 私からあなたに



◆五月の連休明けから仕事が忙しくなり、土日の休日も満足に取れない日々が続いた。妻とも子どもとも会話する機会が少なくなり、ついに保育所へ通う子どもから、父の日に、「おとうさん、日曜日には家にいてね」というメッセージを受けた。また、妻の怒りも頂点に近づきつつあるので、「八月の初めは仕事の谷間で、少し楽になるから、家族そろってWeの会へ行こうか」などと口を滑らせてしまった。

妻が以前から、この会や家庭科の各種サークルに積極的に参加していることは知っていた。しかし、この種の人たちと会ったことはないし、また妻との会話の中で、教育や女性差別の話になると対立し、相手ののしりあっていたことを考えると、口を滑らしたといえ、出席するのは苦痛であった。この気持は、米沢に着いても同じであり、子どもと共に山に登ったり、温泉へ入りに行こうなどと考えていた。

しかし、幸か不幸か、山の天気が不順で、とっても外では遊べないことがわかると、やけっぱちで参加することにした。参加する限りは、モトをとらねばならないという大阪商人の根生と、いい女がいるのではないかと思うすけべ根性で、分科会を除くすべての会に参加した。

見知らぬ多くの人と出会い、人と人とのふれあいができたことなど、個々に多くの成果があったが、自分自身、最も成果があったと思うことは、過去に置き忘れてきた考えを、呼び起こされたことであつた。

私は中小企業ながら管理者の端くれに位置しており、仕事から発想の原点が、会社（全体）の利益であり、利益追求のために人をもどくように配置し、仕事を与えていくかを絶えず考えている。また利益を上げることが、従業員の最大公約数的幸せであると信じてきたし、今でもそう思っている。それ故、利益を上げない会社は悪であり、自然淘汰されるべ

きで、公務員や福祉関係など利益を生まない分野でも、運営はより効率的に、無駄のないように、絶えず努力すべきであると考えていた。

しかし、このフォーラムでは、出席者のほとんどが、発想の原点を個人の人権、生きがいにおいている。この考えはマイナーでありメジャーにはなり得ないと考えていたが、星さんや佐藤さんの講演や多くの人たちの会話の中で、それでも力強く生きつづけていることや、一部体制までも巻き込んだ運動になっている現実を見聞きして、感激した。

自分自身の発想には、人間という原点が小さいため、全体のために、個人の人格を踏みじるという結果を生みやすい。今まで自分が気づかない中で、これをやってきたのかもれない。学生の頃は、権力も何もなかったもので、原点は人間であつたのに、時がたつにつれ、地位が上がるにつれ、その心を失いつつあるのではないか、と思っている。

しかし、自分自身企業人であるが故に、今後とも利益を追求しつづければならない。この中で、いかに人間的な心を持ち続けるかが、私の課題である。

（高槻 森 利宏）  
◆私にとって豊かさとは、ゆつたりと暮らす

こと、家族が一緒に生活し、楽しむこと。

山形のフォーラムで見せていただいたくらしを、都市生活者から見ると、豊かさに満ちみちているように写ったが、その日常は厳しいものと思う。そういう意味で、私たちが求める豊かなくらしと、社会的効率、都市の文化について、来年は考えてみたい。

プログラムの中では、米沢の古代織のビデオが有意義だった。気の遠くなるような労働によって編み出された織物と、雪国の人々の貧しいくらしが印象的だった。山形弁で習った刺し子や食べ物がかつた。地元の実行委員の方には、見学でもとても親切にしていただいて感激だった。

星さんのお話には、ハッとさせられることが多く、大変感激した。農業の大規模化を追求してきた今、アメリカでは三百ヘクタールの農家がつぶれているという状況。数頭の家畜を飼う一ヘクタールの有機農業が一番効率がよいのだというお話が示唆するものを、各分野で考えたいと思った。深い緑と、澄んだ空気の中で、自然と共に生きることの大変さですばらしさを学んだ。

また、今回は、夫が参加したことで、私にとつての意味がまた別にあった。各々仕事を

一生懸命することが、互いの距離をどんどん離してしまうという悩みを、どう乗り越えていけるのか、困難な課題である。

フォーラムは、あくまでも「非日常」には違いない、しかし、自分を企業に売り渡してしまうことなく、自分を大切にするように、彼の日常を変えていってほしい、また、そういう企業人間がふえるようにと願っている。

(高槻 森 陽子)

◆夏のフォーラムが、よねざわの天元台であったので、おかあさんとぼくと二人でいきました。

ぼくははじめて、ロープウェイにのった。ひこうきみたいにみえました。

ロープウェイにのって、うえまでいくと、下にいる人が赤ちゃんみたい。

このフォーラムは、子どもかつどうというものもありました。ぼくは、一ばんさいしよあいさつ、とてもきんちようしました。

そのつぎ、ぼくのおかあさんがたつて、「大望の母のみえ子です」といいました。

こどもたちやく25名ほど、みんなあいさつしました。

一番大きのは六年ちいさいのは、三さいのもいました。おかあさんたちもそれぞれあい

さつしたのでたのしかったです。

三日かんさんかしましたが、バレーボール、ホテルたんけん、しんぶんてふくづくり、つぎのあさ、さんぽにいって、かもしかとあったり、リフトにのってやまのぼり、ゆべしづくり、花がさづくり。

夜はキャンプファイヤーで花火などがありました。どれもたのしいことばかりでした。

おともだちがいっぱいできたので、とてもうれしい。ガムなどねこのばつちをかってもらったのでラッキー!!

いっとうぼりをかけてもらった。

おもしろいのでたくさんできましたが、そのうち一ばんのおもしろいでは、かもしかにであったこと、二ばんめは、リフトにのって山のてっぺんまでいったことです。(中略)

一つだけしっぱいしたことがあります。ぼんおどりがはじまるまえおしっこをしようとおもったら水たまりにおちてしまった。

「しまった」とぼくがいった。

みたことないこと、やったことないこと、三日かんすごしました。

おかあさんはみんなのおせわをしたり、べんきようしたりえらいとおもいました。

(酒田 小二 渡部大望)

# 泉

情報の頁

◆いらっしゃいせんか◆

『第四回教育委員の準公選をすすめるための  
全国交流会』

私達はこども達の健やかな成長を保障する  
教育を願っています。その意味で教育委員  
会は、父母、住民の意向を反映するもので  
あって欲しい、と思ひ続けています。中野区  
では、教育委員準公選が全国唯一実施され、  
成果をあげています。「私たちの教育委員  
会も準公選で」という全国の運動を交流し  
あい、学びあい、第二、第三の準公選によ  
る教育委員会の誕生をめざして、この会を  
開催します。(案内文より)

- ・時 一〇月三〇日(金)～十一月一日(土)
- ・所 中野区・区立文化センター他
- ・参加費 五〇〇円、資料代 三〇〇円

・連絡先 同全国交流会実行委員会  
☎03-950-4021 前橋 ☎03-309-3226

『第三回日本臨床心理学総会』

日臨心がどんな活動をしてきたかを会員内  
外の方々に知っていただくために、一日目  
に三つの特別報告を設定しました。二日目  
は、「精神衛生法「改正」の波のなかで、精  
神医療活動がどう実践できるかを考える」  
「学校教育の中で心理学の位置を問う。直  
す」の二つの分科会を持ち、全体会で今後  
私たちが何をどう実践し、展開させてゆく  
べきかを討論します。(案内文より)

- ・時 一〇月二三(金)～二四(土)
- ・所 石川県金沢市中小企業会館、金沢市尾  
山町9-13 ☎0762-63-1151
- ・参加費 二〇〇〇円
- ・連絡先 同会事務局 〒272千葉市川市国  
府台1-7-3 国立精神・神経センター  
精神保健研究所内 ☎073-72-0141

◆冊子ができました◆

『誰にでもわかる女と政治』

政治はちょっとと、自分に引き寄せて考  
安東尚美著

えられなかった人に、この冊子が政治を近  
づけてくれる。Ⅰ、女の国会・議事録 Ⅱ、  
行動の手引き Ⅲ、資料 かななる。Ⅰの  
「女と教育」の「家庭科の男女共修」の項  
は、'75年三月二五日の市川房枝氏の質問に  
永井文部大臣が答えるところから、'86年十  
一月までの動きが収録されている。その  
他、家族、健康、労働、老後、母子福祉等  
々、各分野毎に実についていぬいである。著者  
は、日々の生活に追われていることを言い  
訳にせず、女が自分で人生を決め、幸福を  
追求し、男・子供・障害者・色々な国の人  
々と仲良くできる世の中を実現するために  
行動することを呼びかけている。

- ・定価 一〇〇〇円(送料共)
- ・連絡先 安東尚美 〒614京都府八幡市八幡  
土井102-5

『レディスコミック その全体像の研究』

―対の成就のために―

秋本雅代 奥山妙子 諸橋泰樹著  
レディスコミックは六年前に二誌が初めて  
登場した。読者は主婦やOLが多く、昨年  
一年間の発行部数は一九誌で、五七七万  
冊にのぼった。このうちの一五誌について、

昨年七月発行号を分析しまとめたもの。内容はレディスコミック誌の概況、登場人物の属性分析・性格分析、ストーリー構造の分析など。研究者は「女性雑誌研究会」会員。

・頒価 五〇〇円（送料共）

・連絡先 同研究会 〒194-01町田市金井町 2160  
和光大学井上研究室気付

# 『風をつかむ 被差別者と女の文化』

三月七日、京都で行われた国際婦人デー、女のフェスティバルでのシンポジウム「女と文化」の記録集。／マイノリティの人権・アイヌの立場から チカッブ美恵子／太平洋の要石 沖縄からの発言 大城美代子／共に闘うということ 徐翠珍／アメリカのマイノリティの人権運動 ベリンダ・ヤングデイビー／という内容。なお、記録集の売上げは、チカッブさん、徐さんの裁判闘争へのカンパ、沖縄一フット運動へのカンパになります。

・頒価 三〇〇円 送料 二四〇円

・連絡先 87女のフェスティバル実行委員会  
〒602京都市上京区下立売通西洞院西入ル  
ワイメンズブックストア松香堂書店内

# ◆ご協力お願いします◆

「日の丸」「君が代」について、不掲揚・斉唱を貫いている小・中・高は都内にあるでしょうか。私の子どもたちは北区浮間小に通学していますが、天皇訪沖をはじめ、キナ臭い世の動きもあり、私自身、反対の声をあげてみようと思っています。資料があればぜひ送っていただきたいのです。

・連絡先 〒115北区浮間1-1-1 204  
神矢千鶴・神矢努  
☎03-558-0513

# ◆秋です 演劇です◆

## 『ブルーストッキングの女たち』

・明治四二年、女性だけによる雑誌として発刊された「青鞥」に集まってきた女性たちと、それを囲む男性の心の葛藤を描いた作品。本当の自由を求めて生きぬいた誇り高き大正の人々があなたのなかの何かを呼び醒ましてくれるでしょう。

作 宮本研 演出 木村光一 出演 高林由紀子 西山水木 石田えり 高橋長英他

・時 十一月五日(木)～一五日(日)

・所 本多劇場(下北沢) ☎03-468-0030

・問い合わせ先 地人会 ☎03-354-1279

# ◆お近くの方いらっしゃいませんか◆

## ◎『子育て、そして女の生き方』

・時 一〇月二七日(火) 十時～十二時

・所 調布市西部公民館

・問い合わせ先 同館 ☎03-24-84-2531

◎『私にとっての「もうひとつのはたらきかた」』

・時 一〇月二九日(木) 十四時～十六時

・所 江東区教育センター

・問い合わせ先 同区教育委員会社会教育課  
☎03-647-9111

## ◎『家庭の教育力』

・時 一〇月三〇日(金)／十一月六日(金) ともに十時～十二時

・所 小金井市公民館本館

・問い合わせ先 同館内坂本 ☎03-23-83-1184

## ◎『戦後の女性の状況とその生き方』『女性の戦後史』

・時 十一月一七・二四日(火) 十時～十二時

・所 ともに和光市中央公民館

・問い合わせ先 同市役所社会教育課 ☎0434-64-1111 (大代表)

(いずれも講師半田たつ子、参加等については、必ず主催者側にお問合わせ下さい)

# 十字路



## ●北海道 巣立っても飛び立てぬ(道新8/18)

〈すべての障害児に学校教育を〉と、五十四年に養護学校の義務化がスタートして九年。来春には九年間の義務教育を終えた初の中学卒業生が巣立つ。しかし、卒業後の障害児受け入れ対策は一向に進んでおらず、障害児を持つ親の悩みは深まるばかり。

札幌市では、四年前「義務教育を終了した子に地域で生きる場を」と西区内の民家を借りて「生活の家」を開設した障害児を持つ親たちが、進まぬ対策に自前の新しい「家」建設のための資金づくりに奔走している。

道教委によると、来春道内の養護学校を卒業の中学二年生は、四百四十五人。進学や職業訓練施設や授産所など各種施設に入所希望する子が多いが、いずれも定員いっぱいである所の順番待ちが珍しくない。進学にしろ、施

設への入所、就職にしろ、家族のいる地域の中で教育、生活を—という親たちの願いにはまだ程遠いのが現状だ。

(高橋芳恵)

## ●千葉 井戸水汚染、市の対応に不満の声(朝日8/24)

水道法で定められた水質基準を上回る高濃度の六価クロムが検出された千葉市生実町と南生実町で、昨年四月にも一部の井戸から基準を超える六価クロムが検出される騒ぎがあったことが、二十三日わかった。この時、同市水質保全課は該当する家にしか汚染の事実を伝えておらず、住民からは「ここは六年前にも六価クロムが検出された地域。市の調査で異常がわかればすぐに町内会などに知らせることになっていたのに」と市の対応に不満の声も。これに対し西田英二同市環境部長は「全員に話して、いたずらに不安を高めさせるのはよくない、と判断した」と話している。

(木田直子)

## ●神奈川 事前協議制を導入(朝日8/5)

県は、体の不自由な人の暮らしやすい町づくりを進めるための推進要綱を策定、四日発表した。それによると、民間も含め、建物の新、改築の建築確認手続きに先立って、建て主と県が協議し、身障者に配慮した構造にし

てもらうための事前協議制を導入する。横浜、川崎両市ではすでに実施しているが、都道府県では初めてという。

適用対象となるのは、官公庁、学校、病院、社会福祉施設などの公共的な建物だけでなく、金融機関、デパート、スーパー、飲食店、ホテルなども含まれている。

(山口里子)

## ●新潟『どの子もみんな元気に育て』(新潟日報9/5)

新潟市保育運動連絡会(坂本典子会長)は市内のゼロ歳児を対象に行った「ゼロ歳児家庭実態調査」の報告をまとめた冊子(見出しのタイトル)を作成して保育所をもっと重視してと訴える。調査結果で注目されるのが、働く母親の多くが、子供の世話を祖父母に頼っている点。報告書では「祖父母の健康がそこなわれた時の不安を常に抱えている。母親が安心して働き続けるためには保育所に対する行政措置はもっと積極的であるべき」で「いまや働く婦人が子供を預けるだけでなく地域でだれもが利用できる子育ての専門機関として、また子供たちが遊びや友達関係を広げていく子育てセンターとしての役割が求められている」としている。

(山口久子)

●岐阜 もっと女性議員を（中日9/2）

女性が政治に参加するネットワーク作りを目指す「土井たか子とともに仲間をつくる女の会」（中村征子代表）の結成を機に、社会党の土井たか子委員長を囲む集いが、一日岐阜市金町の市文化センターで開かれた。県内の主婦や働く女性ら約六百人が詰めかけ、平和、老人、福祉、職場での男女差別などの問題について活発な意見を交わした。委員長は「政治を変えていくというのは生活を変えること。家庭や地域を女性が変わっていくことです。しかし全国の地方議員のうち女性はまだわずか二%です。もっと多くの女性議員を誕生させなければ高齢化社会や軍縮問題は解決できません。私はそのために女性の選挙基金づくりを呼びかけている」と力説した。

●京都「日中女性学文庫」の提案（朝日8/26）

「女性学入門」（富士谷あつ子編）がこのほど中国語に訳されて出版された。中国で女性学関係の本が出るのは初めて。翻訳にあたった中国社会科学院社会学研究所の張萍さんからの「日本の女性学に関心が高まっているのに、日本の本は高くて手に入らない」「日本

の女性学関係の本をもっと読みたい」の言葉がヒントになり富士谷さんらは文庫設立を思い立った。

「文庫」は、とりあえず左京区聖護院西町の富士谷さん方に置き、日本にいる中国人留学生に解放する。また希望があれば、北京大学図書館などに送ろう、という計画。（塚崎美和子）

●京都 保育所で帽子論争（朝日8/30）

長岡京市が、市立保育所の園外保育などで園児に規格のカラー帽子を着用することを義務づけたのに対し、保育の多くが、市の方針の決め方に疑問を投げ、かぶらせようとしなかった件で、市は二十九日、「文書による訓告と口頭による嚴重注意の処分をした」。背景には、五十五年以来懸案となっている障害者保育担当の保育増員問題や、昼休み時間をとるための保育増員要求などの問題がある、といい、事態は混乱。（徳永美知子）

●大阪 就職戦線、男女で明暗（朝日8/12）

リクルート大阪支社によると、来春卒業の大学生の就職は、円高不況で抑え気味だった前年に比べ、好況の内需産業を中心に景気の回復を見込んで、男子の採用数は全体で七・三%の増（前年比）。しかし女子は全体で一・八%の増にとどまり、とくに一般事務中心の

製造業は一三・三%の減、逆に非製造業では理科系が四五・三%の伸びを示すなど業種による明暗の差が激しいという傾向が出ているという。同社では「事務省略化や単純労働の外注化で、大手企業は考え、技術をもつ人間を採用するが、一般事務などは人件費圧縮のため減らす傾向」と分析している。

●兵庫 著者囲み「語り継ぐ会」（神戸9/7）

昭和二十年の明石空襲で左手足を失った、伊丹市行基町の田村フネさんが、今年四月、『夜はいつ明ける―私は戦傷の語り女』という自伝史を出版した。反響は予想を上回るもので、三百件を超える手紙や電話が寄せられ、千五百部はあっという間になくなり、千部を増刷したほど。「私の体験も聞いてほしい」「もっと詳しく当時の様子を知りたい」という声に、出版元が中心となって、十九日、中央区の生田神社会館で著者を囲んでの交流会を開くことにした。「交流会を単に戦争体験者の思い出話に終わらせたくない。戦無派の若い世代にも伝えたいし、意見も聞きたい」と田村さんらは若い人たちの参加を期待している。（由良サダコ）

則として6歳未満の子について、実親による放置や家庭の経済的困難など特別な事情がある時に、家庭裁判所の審判によって縁組をする②縁組の成立により、扶養、相続などをめぐる実親やその親族との法律関係は近親婚の制限を除いて消滅する③特別養子と養親との離縁は原則として認めない④戸籍には実子と同様、養父母を父母として記載、一見しただけでは養子縁組がされたことは分からないようにする、など。

(朝日、毎日、9・11付)

#### ◆ポスト臨教審、内閣直属の新機関設置◆

中曽根首相は9月9日、塩川文相と教育改革の今後の推進体制について話し合い、文部省が作成する「教育改革大綱」(仮称)のなかに、内閣直属で小人数の「教育改革推進審議会」(仮称)の設置を明記することで合意した。(朝日、9・10付)

#### ◆教員免許、大学院資格を新設◆

臨教審答申の大きな柱「教員の資格向上」策の具体化を検討していた文部省の教育職員養成審議会(文相の諮問機関、会長＝中川秀恭・日本学術会議副会長)は10月に発表する中間報告の基本方向を9月4日まで固めた。大学院修士課程修了者を対象とした「特修免許」(仮称)を新設し、大学、短大卒と合わせ三段階免許制度を実施することが最大の眼目。さらに大学での専門教育科目の最低単位数を引き上げる。教育実習時間の延長は、初任者研修が本格実施されるため、導入しない。同審議会は中間報告発表後、各界の意見を聞き、12月に答申、'89年度から実施に移す方針。

(読売、9・5付)

#### ◆高校開放し、公開講座◆

高校を一般に開放し、英会話からパソコン、美術まで幅広く教える公開講座を来年、全国に広める計画を、文部省は9月2日、明らかにした。「生涯学習」の新事業の一つとして打ち出したもの。公立、私立あわせ全国5500校のうち、公私立を問わず1県につき15校、全国では705の高校の協力を得て、授業に支障が起きない土曜日の午後などに定期的に講座を開く。教室だけでなく器具類も利用し、講師役も各校の先生たち。

文部省は、来年度予算の概算要求で1億600万円を計上、講座を開く高校には15万円ずつ補助金を出す。時間外勤務になる先生への謝礼などに充てられる。

(朝日、9・3付)

#### ◆電算機“必修”、全学生に習熟教育◆

すべての大学、短大、高専、専門学校でコンピュータ操作習熟教育を――と文部省は9月3日、情報処理教育設備を国公私立の高等教育機関に、5年がかりで整備する計画を発表。最初の来年度には約200校に設備をつける予定で、費用約103億円を予算概算要求に織り込んでいる。

(読売、9・4付)

#### ◆コンピュータ、全教師が操作へ ――東京都が'89年度から研修◆

“情報化時代にふさわしい教育”を実現するため、東京都教育庁は8月29日、都内の公立小、中、高等学校の約7万人の教師全員がコンピュータを操作できるように、計画的な研修の実施を決めた。'89年度からの実施を目指しているが、全国でも初の試み。

数学などでコンピュータを駆使した授業を展開し、ファミコンやパソコンで育った現代っ子の教育効果を飛躍的に高めるのがねらい。

(読売、8・30付)

#### ◆いじめ減、小中学生の登校拒否は最高に◆

9月11日、文部省がまとめた「児童生徒の問題行動実態調査」によると、全国の公立小、中、高校で'86年度に起きた「いじめ」は増に激減、半面、登校拒否や自殺がぐっと増加、問題行動の「内向型」化や根の深まりが指摘されている。

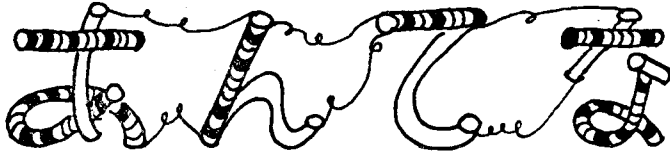
'86年度に発生したいじめは、小学校26306件、中学校23690件、高校2614件の計52610件。

登校拒否は、小学生が'67年度以来最も多い4402人、中学生は過去最高の29694人。教育相談機関への登校拒否にかかわる相談件数は前年より約1000件増の9001件。相談での拒否理由は「神経症的な拒否」70.2%、「怠学」8.1%、「いじめなど」7.7%。

自殺した児童、生徒は、小学生14人、中学生110人、高校生144人の計268人で、中学生はこれまでの最高。

(各紙9・12付)





#### ◆ INFの地球規模での廃絶

##### 米ソが原則的合意声明◆

米ソ外相会談が9月15～18日、ワシントンで行われ、18日、レーガン大統領は、ホワイトハウスで米ソ両国が保有する中距離核戦略（INF）を地球規模で廃絶することで原則合意したとの発表を行った。同時に米ソ両国はこれを盛り込んだ共同声明を発表。レーガン大統領とゴルバチョフ・ソ連共産党書記長は、今年秋に米国で米ソ首脳会談を開催する。6年越しの米ソINF交渉は、米ソ双方のINFの実戦配備能力を全廃するという、軍縮史上初の画期的な成果を得た。（各紙、9・19付）

#### ◆ 労基法改正案、可決、成立◆

労働基準法改正案は9月18日、参、衆両院本会議で可決され、成立した。41年ぶりの労基法抜本改正が来年4月1日から施行され、現行の週48時間労働制に代わって、法定労働時間・週46時間時代が始まる。さらに国際的要請もあり1990年代前半の週40時間労働制移行に向けて、法定労働時間の短縮が加速することになる。

（朝日、9・18、19付）

#### ◆ 有責配偶者からの離婚請求

##### 最高裁「容認」へ判例変更、35年ぶり◆

自ら結婚生活を崩壊させる原因を作った夫が、38年間にわたって別居を続けている妻との離婚を求めた「有責配偶者離婚請求訴訟」について、最高裁大法廷（裁判長・矢口洪一長官）は9月2日、上告審の判決を言い渡した。夫婦関係を壊す原因を作った側（有責配偶者）からの離婚について最高裁は、1952年以来、一切認めない立場をとっていたが、大法廷はこの判例を35年ぶりに変更。「夫婦の別居が双方の年齢や同居していた期間に比べて相当長期に及び、未成年の子供がいらない場合」と限ったうえで、「相手方配偶者が離婚によって精神的、経済的に極めて過酷な状態に置かれるなど特

別の事情のない限り、有責者側からの請求でも離婚を認めうる」との新たな判断を示した。そのうえで、離婚請求を棄却した二審判決を破棄、審理をやり直すよう東京高裁に命じた。「夫婦関係が修復できない以上、原因を問わずに離婚を認める」という「破綻主義」を積極的に採用する形になり、判決は今後離婚制度全体に影響するとみられる。（各紙、9・2付）

#### ◆ 西船橋駅ホームの酒酔い男性転落死

##### 押した行為は正当防衛—女性無罪◆

千葉県船橋市のJR総武線西船橋駅で昨年1月14日夜、酒に酔った高校教諭・河原邦光さんがホームから転落した事故で、河原さんにかまれたため突き落として死なせたとして傷害致死罪に問われ、懲役2年を求刑されていた桃田美鈴被告（北九州市）に対する判決公判が9月17日、千葉地裁刑事二部（渡辺一弘裁判長）で開かれた。渡辺裁判長は「被告の行為は、酒に酔った河原さんにかまれたあびく、コートの襟のあたりをつかまれ『このままでは何をされるかわからない』という恐怖心から離そうとしたもの」として正当防衛と認定、桃田被告に無罪を言い渡した。公共の場における酔っ払いのいやがらせに対する女性の側の防衛手段の正当性をめぐるとの司法判断として注目される。

（朝日、毎日、9・18付）

#### ◆ 「特別養子制度」新設へ◆

養子を実子並みに扱う「特別養子制度」を来年1月から創設する民法第一部改正案が、9月10日参院法務委員会で可決、18日の参院本会議で成立の運びとなった。

制度の必要性が早くから認識されながら昭和30年代後半、法務省で手がけた改正を中断させたのは「血のつながった親子関係を一片の条文で切り、アカの他人同士に変えてよいのか」という血縁重視。

昭和57年再開した今回の改正案作りでは養子の身分安定を最重視した。内容は①原



＜表紙のことば－加藤由美子＞

雨が九日間降り続き、川も海も荒れ狂い、地上の総てを押し流した後の泥だらけの地上に残されたのが、デウカリオンとピュラの信心深い夫婦。彼らの手によって投げられた大地の石が、新しい人間に。大地は万物をうみだす、か。

★Weバックナンバーのご案内★

(vol. 1) (vol. 2) (vol. 3) (品切れ)

(vol. 4) 4月号 性をどう語る

5月号 結婚の風景

6月号 家族、その人間関係

7月号 離婚と子どもたち

8・9月号 法律と私たち

85年夏増 働き続けるために

10月号 いま、熱く女の時代

11月号 みよりの秋に

12月号 人間と土を生かす

85年冬増 自分らしさをこそⅡ

1月号 暮らしの文化を探る

2・3月号 水はいのちの泉

(vol. 5) 4月号 幼い日－大人は

忘れてしまった

5月号 子ども－大人の勝手な思い込み

6月号 “いじめ”－その根っこには何が?

7月号 性－小・中・高校生は何を思う?

86年夏増 こどもたちへ－大人になる旅

8・9月号 親－いま、学校に何ができる?

10月号 家庭科－いま新しい地平に立つ

11月号 家庭科－どう変える、どう変わる

12月号 平和－今年を顧みる

86年冬増 自分らしさをこそⅢ

1月号 女性－世界を変え得るか

2・3月号 明日－人はみな成熟に向かって

(vol. 6) 4月号 先生は悩んでいる

5月号 情報化社会の光と影

6月号 学校給食で論争しよう

7月号 「制服」着る・着せられる

87年夏増 女たちの教育改革提言

8・9月号 「原発」知らなくていいのか

10月号 機会均等法、何が変わった?

◆暑い、熱い思い出とともに、夏とフォーラムの余韻が吹きぬけて、しんみりの秋。虫の音とともに、どこからともなく秋のつどい、の聲が上がり、今年も開催の運びとなりました。(詳細はチラシ参照) すっかり有名になってしまった武田秀夫さんですけど、ウイのつどいならではのお話が聞けそう。秋のひととき、どっかりと腰を落ち着けて、じっくり聞き入ってみたい気分になっています。(青木)

◆先日、留学先から帰って来たばかりの高校生たちと話し合う機会があった。中の一人は、重大な問題の相談相手として、ホスト・ファミリーが十八歳の自分を選んでくれたことにとても感激していた。そして、「今父も、母も、妹も好き」と言う。その声のさわやかさの中に、家族と自分との間に距離を置いて欠点も、エゴも持ち合わせている一人の人間として彼らを見ているのが感じられた。(中野)

◆朝日新聞で夏増刊「女たちの教育改革提言」が紹介されました。早速にも電話がかかってくる程の反響。新しい方との出会いがありうれしいことです。◆各地で教研が開かれる季節。その会場でWeのチラシを配ったり、本を販売したりしていただけないでしょうか。ご一報いただければ便宜を計ります。よろしく願います。◆「経済の目」は急なご都合により休ませていただきます。(馬場)

♥「暮らしの手帖」の故花森安治氏と氏をめぐる編集部の張りつめた態勢が、新聞に連載されていました。Weの編集部が見習うべきことの数々がありました。もっと厳しい姿勢で仕事に臨まなければ、と反省しきりです。皆さんからのご鞭達も待っています。♥企画ではシングルライフを男女二人に書いていただくはずでした。外国旅行などで原稿をいただけなかったのは残念です♥次は「国際居住年って何だった?」です。(半田)

新しい家庭科－

Vol. 6 No. 8 1987年10月20日発行  
¥530(年間購読料・増刊号含¥6700)  
編集兼発行人／半田たつ子

発行所／(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14

☎03(326)1380 振替 東京6-59867

印刷所／(有)岩佐印刷所 〒112 文京区春日1-6-7

旭札 京栄堂、樋口  
札幌 北東京堂、維新堂  
島松 矢野、ダイヤ  
吉小 熊谷  
函達 新生堂  
茅達 神田、森文化堂  
青室 岩田ライオン  
弘森 成田本店  
盛森 とはら  
八東山堂、みみずく書房  
花伊吉書院  
水戸誠山房  
仙沢 松田  
台 ことの本の店  
ブーの家、八重洲、萩書房、  
高山、千忠、宝文堂  
古川 高山  
泉ホビット館  
秋田 加賀屋、たかのずや、  
中田  
大館 石川  
湯沢 おびきゅう  
酒八文字屋、達藤  
山形 高陽堂、ほんべい  
鶴岡 阿部久  
尾花 鈴木  
郡岩瀬、西沢  
会松山 松文堂、すばる  
津若きニシザワ  
わBSオオスカ  
岡島朝日堂  
前アルプス社、遊書館  
中之橋桑  
宇条島村  
足杉山  
水関口  
土ツルヤB.C  
浦白石、マゼン  
川若淵、須原屋  
越新井、ブックストウ  
松谷 日野屋  
和比企文化社  
狭山屋  
大楓書房  
岩井 マスタ  
飯能 安藤芳文堂  
入間 ヤマトウ  
新座 みやかわ南口店  
鴻文堂  
熊谷 神田弘文堂  
船橋 前原かっぱ、西武  
B.C、はつらつ書房  
松戸 元山  
田大和屋  
佐原 多田屋  
市川 大杉、千里堂  
成日昇堂  
東葛飾郡 ブックスさかい  
東京 <千代田>日成堂、書  
肆アクセス、三省堂本店、書  
泉グランデ、東京堂、八重洲  
B.C <文京>ピッピ、文明堂  
<豊島>池袋、紀文堂<杉並>

木風舎、新愛、ブラサード、  
たつみ書房、西萩、結、大  
正堂、みどり書房<新宿>  
紀伊國屋、模索舎、風書  
房、伊野屋、図南書店<澁  
谷>すーすー、えいがさ  
い<練馬>いずみ<葛飾>  
宏結堂、中村、稲田、大  
和<世田谷>やまべ、山  
崎<北>愛京堂<大田>三  
州堂、藤乃屋<荒川>昌  
栄堂、江東、吉田書房部  
<品川>雄文堂<目黒>中  
川<吉祥寺>の、三書房  
<三軒>第九書房、たべ  
もの村<武蔵野>いがら  
し<調布>神代<小金井>  
かごや<府中>国府書店  
会、一二三書房<国分寺>  
吉野<国立>増田、富士  
見台店<立川>オリオン  
書房、泰明堂、石井<小  
平>和中、明文堂、大島  
<清瀬>マルオカ、飯田  
<町田>久美堂<八王子>  
小沢<秋川>増進堂  
横濱 浜有隣堂、栄松堂、  
ともだち、みどり書房、  
有文堂  
川崎 北野、早川、大  
塚、明朗書房、ホーエイ  
川崎  
相模原 中村書房  
鎌倉 大船書房  
相模大野 相模書房  
藤沢 東松堂  
綾瀬 藤美堂  
茅崎 文泉堂  
小田原 平井  
平塚 サクラ  
厚木 中央  
田内田屋書房、相  
模原  
甲府 甲府書房  
静岡 吉見、森上  
磐田 あつみ  
浜松 谷島屋  
沼津 遠州堂、稲勝  
沼津 マルサン、ランゲ社  
清水 戸田  
下田 村上  
焼津 谷島屋  
富岡 小長谷  
橋本 大石  
原宮 文正堂、資然堂  
一宮 ウニタ、日比野  
名古屋 泰文堂、谷口正文館、白  
樺書房西店、白鶴、竹中、  
中目書房、きたやま、丸  
山、豊川堂、ちくさ正文  
館、兼松、九善、前田、  
ボランの広場  
江 南 青雲堂  
豊橋 文教、耕文堂

豊田 鈴彦  
岡崎 カマクラ文庫  
尾張旭 活人堂  
瀬戸 三浦  
西尾 黒部  
愛知 日進書房  
刈谷 酒井日進堂  
岐阜 文光堂、水谷文溪堂  
津 栗山、万松堂、野  
沢、ブックス田奈賀、文信堂  
新長 美進堂  
上 寛張館  
飯 春陽館  
富山 稲豊  
高 清明堂  
水山 清文堂、イソノ屋  
新見 布瀬善  
岡 川辺  
松本 笠原  
長谷 新光堂  
上 平安堂  
飯 英文堂  
須田 英文堂  
信坂 山下  
濃 町 統屋  
金沢 1つのみやセー  
ルズセンター、北国書林  
能登 千間  
福井 ひまわり、品川、  
勝木  
天理 海老山  
西大寺 広谷屋  
奈良 南都書林  
松中村  
伊古川  
大版 紀伊國屋、ユー  
ゴー、樋口書籍、米原十  
六堂、藤川、学の友、西  
坂、呼文堂、もり、富士  
原文信堂、飯田集英館、  
川口文堂堂、坂口、篠田、  
丸山、青泉社  
東大 阪 ヒバリヤ、栗林書房  
和泉 かつらぎ  
豊中 昌文堂、豊文堂  
高槻 コーベ、ブックス西武  
ダイハチ 書房  
池田 春江  
堺 ワールド、西村、  
清城堂、三教堂、登美屋  
茨木 サノヤ  
寝屋川 中村興文堂、寝屋川団地  
京 都 松香堂、オデッサ  
書房、中島書院、洛陽  
宇治 大久保京都書院、  
井田  
長岡 恵文社神足店  
亀岡 亀岡書房  
舞鶴 舞鶴堂、北浦愛  
文堂  
和歌山 宇治、有馬  
新宮 荒尾成文堂  
神戸 流泉書房、ヒカ  
リ、日進堂、文進堂、アイヨ、

幾久、明文館、漢口堂  
西宮 イカロス書房  
尼崎 宣文堂、塚新西武B.C  
姫路 姫路九善、浅野八代  
明石 学友書房  
豊岡 ひさや  
三木 三木ブックス  
笠岡 池田成章堂  
岡原 金森  
山崎 福島かねつき堂  
米子 今井MC本店  
鳥取 富士  
出雲 武田  
津和野 金山文具店  
松江 ブックス文化の友  
浜田 吉田屋  
島 やまびこ、いづみ、  
紀伊國屋、ニシヤ、黙乎堂  
竹原 草間  
尾花本、啓文社  
福山 岡田  
高松 みやたけ  
宇和島 キング堂  
川之江 トウヤおおくぼ  
松山 丸三  
徳島 雄徳堂徳野、森住  
九島  
土佐山田 依光  
高知 金高堂  
北九州 北九州、白石、黒  
崎ひとつらわB.C  
福岡 金文堂、積文館、  
金進堂、尾崎堂、高橋  
日市 丸山スコアレ店  
直方 みやはら  
久留米 菊竹金文堂、江頭  
筑後 吉田  
大 山口  
粕 尾崎堂  
唐津 まつら  
佐賀 金華堂  
世保 好文堂、童話館  
熊本 金明堂  
三章文庫 教育文化用品KK、  
本渡 鶴田玉文堂  
延岡 池田  
宮崎 大山成文館、若印  
大崎 開書堂、今村、  
高校用品販売  
志布志 スズキ  
鹿兒島 加世田  
那覇 朝野書房  
那大生協 帯広畜産、東北、岩  
手、山形、福島、新潟、群馬、  
宇都宮、茨城、埼玉、芝浦工、  
日本女子、東京、東京家政、  
成蹊、東工、お茶の水女子、  
桜美林、横浜国立、山梨、大  
妻女子、愛知教育、金沢、富  
山、和歌山、大阪市立、立命  
館、神戸、宮崎、鹿児島、高知、  
香川、鳴門教育、琉球

読者の皆様へ 上記の取り扱い店以外の全国各地の書店でも、本誌は書店購入ができます。  
お近くの書店でお求めの際は、「地方小出版流通センター」経由とご指定のうえ、ご注文下さい。